

難読地名の読みと由来

日本国内版

近畿地方編



上総の国いちはらの歴史を知る会

日本国内の地名は、有史以来に付いたものや、地域の統廃合などの都合で命名された地名があります。そしてその地名は素直に読める地名と、読めない地名があります。ここでは難読地名を都道府県ごとに選び、その読み方と由来を調べてみました。

近畿地方編 三重県



NO	地名	読み方	由来
1	家城	いえぎ	津市・由来は、戦国時代に築かれた家城（いえぎ）という城に由来。
2	一身田	いっしんでん	津市・由来は諸説あり、奈良・平安時代の制度で、政治上の功績があった貴族に限って与えられた田「一身田」から来ているという説と、もう一つは、律令制度に「三世一身の法」によって与えられた田に由来するという説がある。この法律は、開墾した土地の私有を認めるものです。
3	井関	いせぎ	津市・由来は、一般的に「井戸」や「水路」に関係している場所、または「水の流れを堰き止める場所」を意味する事が多い。
4	雲林院	うじい	津市・由来は、中世にこの地を治めた「雲林院氏」に由来する。雲林院氏は、源頼朝の御家人である工藤祐長の子孫で、北伊勢一帯の地頭職を務めていて「雲林院城」を居城としていた。
5	奥津	おきつ	津市・由来は、「興津宿」に由来する。また、古くは「奥津」「息津」「沖津」とも呼ばれた。
6	栗加	おおか	津市・由来ははっきりしませんが、平安時代初期には既に存在している。
7	大仰	おのき	津市・由来については不明。他県にも「大柳」という地名が存在。
8	雲出	くもず	津市・由来は複数あり、主に雲出川の名称に由来するで、河口部の塩田から立ち上がる煙が雲のように見えたという説と、上流山地部に雲が多く、渦を巻く様子が下流から見えたという説がある。
9	村主	すぐり	津市・由来は、古代に存在した「村主郷」（すぐりごう）に由来する
10	新家	にのみ	津市・由来は、古代に「にのみ」と読まれ、新しく出来や家や集落を指す言葉に由来する。
11	波氏	はて	津市・由来は、松坂市に鎮座する「波氏神社」に関連すると思われるこの神社は、古くは「八頭山藏王権現」と称され、波瀬村に存在空いた三社の内の一社が明治時代に「波氏神社」と改称されたという。この経緯から「波氏」は「波瀬」という地名に由来すると思われる。
12	戸木	へき	津市・由来ははっきりしませんが、「へぎ」という読み方は、古くから存在する地名。「戸木」は戦国時代には地名として見られ、江戸時代から明治22年までは「戸木村」という村名でした。
13	朝明	あさけ	四日市市・由来は、旧朝明氏に由来し、「阿佐介」とも表記される。また、天武天皇が迹太川（現在の朝明川）を越え、朝日を拝んだという故事にちなむという説もある。
14	内部	うつべ	四日市市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征から帰途でこの地の急坂で「吾が足三重の勾りなりて甚だしく疲れたり」と述べた事に由来するという。この言葉が「三重県」の県名に由来する
15	采女	うねめ	四日市市・由来は、古代に朝廷に仕えた女官である「采女」に由来する。采女とは、天皇や皇后に近侍し主に食事に配膳などの身の回りの世話をした下級女官。この地域は古くから「采女郷」として知られており、多くの采女を輩出したとされている。

16	志氏	しで	四日市市・由来ははっきりしませんが、古くからの信仰や歴史的出来事に由来すると思われる。「志氏」という漢字表記は、御幣を意味する「シデ」に由来すると思われる。また、天武天皇が壬申の乱の際に伊勢神宮を望拝した際、木綿を取り垂らして禊ぎを行った事が、この地名が「シデ」となったきっかけになったとされている。
17	海山道	みやまど	四日市市・由来は、平安時代頃まで海浜の洲崎で、海と山の交通の要所であった事に由来する。
18	和無田	わんだ	四日市市・由来は、かつては「和田」と呼ばれていたが、亀山藩内に同じ地名が二つ合った為「和田ではない」という意味で「和無田」に改称された。
19	朝熊	あさくま	伊勢市・由来には諸説あり、主なものは弘法大師が山中で求聞持の法を修めた際に、朝に熊、夕に虚空蔵菩薩が現れた事にちなむ説と、川の浅瀬が曲がりくねった地形を表す「朝隈（あさくま）」に漢字を当てたという説がある。
20	鹿海	かのみ	伊勢市・由来は、倭姫命（やまとひめのみこと）がこの地を通った際、村の女性が苗草を頭に載せて運んでいた事に由来する説と、東鹿海は「鹿海船津」とも呼ばれ、伊勢神宮の贄海神事（にえうみしんじ）の舟が発着した場所でもあったとされている。
21	神社港	かみやしろこう	伊勢市・由来は、この地域にある「御食神社」（みけじんじゃ）がその起源という。神社港は、かつて伊勢湾の水上交通の要衝で、和船（みずき）の運行を通じて港の再生と地域の連携を目指している。
22	城田	きだ	伊勢市・由来は、玉城町にある「外城田」（そとだ）という地名に由来する。この地域は古くから陸上交通の要衝で、熊野街道が通っていました。
23	佐八	そうち	伊勢市・由来ははっきりしませんが、かつて宮川の河原であった「さわ地」が「佐八」になったと思われる。
24	高向	たかぶく	伊勢市・由来は複数あり、主なものは、伊勢神宮外宮のある高倉山に向かい合う地形に由来する説と、古代の「向田」（むくだ）・高田が転訛したという説や、大和の高向氏が移住した事に由来する説。
25	東大淀	ひがしおいず	伊勢市・由来は、倭姫命（やまとひめのみこと）がこの地の海を渡る際に「大いに淀んでいた事から「大淀」（おおよど）と名付けられたという伝承があり、江戸中期からは「おおよど」が転じて「おいず」と呼ばれるようになった。
26	宮後	みやじり	伊勢市・由来は、伊勢神宮外宮の別宮である月夜見宮の南に位置する事に由来する。
27	掬水	ていすい	松坂市・由来は、江戸時代の儒学者である奥田三角が、この地を流れる櫛田川に「掬水」という別名を付けた事に由来する。
28	深長町	ふこさちょう	松坂市・由来は、一般的には「細長く人家が続いている町」を意味する言葉に由来する。
29	駅部田町	いえのへたちょう	松坂市・由来には複数あり、主なものは、古代の松坂駅の傍にあった

			事から「駅の傍」(えきやのへた)が転訛し多という説と、安濃部の同名の地と区別するために「駅」を冠下という説がある。
30	御麻生藪	みおぞの	松坂市・由来は、皇大神の御衣を奉職する機殿御料の麻園に由来する
31	稲生	いのう	鈴鹿市・由来は、一般的に稲作殿関連が深い地名と思われる。
32	河曲	かわの	鈴鹿市・由来は、かつて存在した河曲郡に由来する。
33	徳居町	とくすいちょう	鈴鹿市・由来については不明。
34	長太	なご	鈴鹿市・由来は、「穏やかな海面」や「豊かな漁場」御意味する「なご」が由来で、全国的にもここだけの珍しい地名です。
35	薦生	こも	名張市・由来ははっきりしませんが、古代に存在した牧場「薦生牧」との関連が考えられる。
36	箕曲	みのわ	名張市・由来は、「箕」(み)のような半円形の土地の形状に由来する
37	八幡	やはた・やばた	名張市・由来は、その地域にある八幡神社由来する事が多い。八幡神は、応神天皇を主祭神とする神様で、全国的に多く祀られている。
38	尾鷲	おわせ	尾鷲市・由来には諸説あり、「山の尾の端」を意味する「おわし」が転訛下説や、「高くなった所の端」を意味する「ヲ(高くなったところ)+ハシ(端)が転じたという説有力です。また「大輪内」(おおわうち)が詰まって「おわし」になったという説もある。
39	早田町	はやたちょう	尾鷲市・由来は、「ハイ」が「小平地」または「岩礁」を意味する「ハエ」に由来すると思われる。早田町には「田」が少ないため、「早く稲が実る温かい地」という意味の「ハヤタ」ではないかと思われる。
40	能褒野	のぼの	亀山市・由来は、日本武尊(やまとたけるのみこと)が東征から帰途中にこの地で亡くなったという伝説に由来する。「日本書紀」にその終焉の地として記されており、明治時代に亀山市の前方後円墳が日本武尊の墓と認定された。
41	畔蛸	あだこ	鳥羽市・由来は、タコに由来するとされている。
42	安楽島	あらしま	鳥羽市・由来は、鳥羽市街から見ると三角錐の島のように見える半島先端の丘陵地である事から「荒島」転訛して「安楽島」になったと思われる。
43	石鏡	いじか	鳥羽市・由来は、島の中央にある円鏡のような風洞があった事に由来すると思われる。この島は「いしかがみさん」と呼ばれ、かつてはドーナツ状の形をしていた。
44	相差	おうさつ	鳥羽市・由来には諸説あり、「大砂津」(おおさつ)にちなむ説や、麻生浦(おうのうら)の同様に栗島にちなむという説がある。また、海女の町で知られる相差には、船の背中に乗った観音様の伝説に関連するという説もある。
45	国崎	くざき	鳥羽市・由来は、紀伊半島及び志摩半島の最東端に位置する事から「国の先(崎)」という意味で名付けられた。
46	石樽	いしぐれ	いなべ市・由来は、鎌倉時代に記録が残るほど歴史が古い事が由来
47	貝弁	いなべ	いなべ市・由来は、主に古代の渡来人である「猪名部(いなべ)氏」

			に由来するとされている。また、地形的な特徴から「イ（井）・ナ（土地）・ベ（辺）」が語源であるという説がある。
48	麻生田	おうだ	いなべ市・由来は、古くから麻の栽培が盛んであった事に由来する。この地域は伊勢の神領であり、麻積塚（おみづか）古墳に埋葬された人物も、麻の生産に深い関係があったと伝えられる。
49	安乗	あのり	志摩市・由来は、元々「畔乗」と表記されて居ましたが、文禄年間（1592年～1596年）安土桃山時代に志摩国の領主であった九鬼嘉隆が八幡宮（現在の安乗神社）に戦勝のお礼参りに訪れた際、住民が求めた社殿での手踊り（安乗人形芝居）を許可した。この出来事を機に、九鬼嘉隆が村名を「畔乗」から「安楽」に改めた。
50	波切	なりき	志摩市・由来は、遠州灘と熊野灘の境に位置し、荒波を切るように突き出た地形に由来すると思われる。古くは「名雉」（なきり）や「名切」とも表記され、平城京出土の木簡にもその名が見られる。
51	阿保	あお	伊賀市・由来は、当地を開発したとされる「安保氏」に由来する。安保氏は奈良時代から伊賀国伊賀郡安保郷に本拠地を置いていた豪族
52	印代	いじろ	伊賀市・由来ははっきりしない。
53	鶺鴒宮	うのみや	伊賀市・由来は、鶺鴒宮神社に由来すると思われる。この神社は、事代主命（ことしろぬしのみこと）を主祭神として、天平勝宝4年（752年）に開創されたと伝えられる。
54	大滝	おおだい	伊賀市・由来は、名張川中流部の溪谷美を形成する「たつき川の急流」に由来する。
55	神戸	かんべ	伊賀市・由来は、古代に伊勢神宮に付属した「神戸（かんべ）」と呼ばれる民戸が住んでいた事に由来する。彼らは神社の造営や供物、維持修理に従事し、その代わりに租税が免除されていた。
56	才良	ざいりょう	伊賀市・由来ははっきりしませんが、才良は木津川と比自岐川の合流する地点に位置し、弥生時代の遺跡や前方後円墳、延喜式内社の坂土社があった歴史ある地域。
57	柘植	つげ	伊賀市・由来は、「継（ツグ）」が転じたもので、段差のある地形に由来すると思われる。また、古くは「柘植（ツミウエ）」と書かれ、山野に自生するヤマグワを意味する（ツミ）に由来する説もある。
58	友生	ともの	伊賀市・由来は、平安時代に記録が残る古い地名で、東西に伸びる谷が舟の艚（とも）の形が似ている事に由来する説や、小さい沼を意味するエゾ語の「トポ」に由来する説もある。
59	柘川	ひじきがわ	伊賀市・由来は、名字の「柘川」が地名に由来する事が多く、伊賀市柘川という地名が存在する事から、この地名が名字の由来になった可能性が高い。
60	生琉里	ふるさと	伊賀市・由来は、天理教徒生琉里開拓団の入植に由来する。「生琉里」という地名は「古里、故郷」という意味の「ふるさと」に漢字を当てたものです。満州から引き揚げてきた開拓団が、再び日本で故郷を求めてこの地を「生琉里」と名付けた。

6 1	猿野	ましの	伊賀市・由来は、6匹の猿を朝廷に献上したという故事に由来する。「麻志野」とも表記される。
6 2	真泥	みどろ	伊賀市・由来は、この村の平地一帯が泥田であり、真泥という地名も自然地勢に由来する。
6 3	壬生野	みぶの	伊賀市・由来は、古代末期に「柘殖（つみえ）郷」から独立して「壬生野」と呼ばれるようになった事に由来する。
6 4	木曾岬	きそさき	桑名郡・由来は、明治時代に村名が「木曾島」と決議されたにも関わらず、当時の戸長が独断で「木曾岬村」と改めた事に由来する。
6 5	弟国	おおぐに	多気郡・由来は、隣接する「兄国（えくに）」と対する形で名付けられたと思われる。
6 6	大淀	おいず	多気郡・由来は、倭姫命（やまとひめのみこと）がこの地の海を渡る際に、潮が大きく淀んでいた事に由来する。倭姫命がその状況を喜び「大淀社」を定めた事が地名の起源となっている。
6 7	櫃井原	ひついはら	度会郡・由来は、天正4年（1576年）国司の北畠氏滅亡の頃、米櫃や鎧櫃などを井戸に隠した事に由来する。



滋賀県



NO	地名	読み方	由来
1	穴太	あのう	大津市・由来には諸説あり、「古事記」に記された成務天皇の都「志賀高穴穗宮（しがのたかあなほのみや）に由来する説と、交通の要衝であった事から交通に関する古代語に由来する説がある。
2	石居	いしずえ	大津市・由来は、「石居廃寺」の粘土を使って作られた泥塔については平安時代後期のもので時代が新しく、この寺院が存続していた時期を示すものです。この場所に残る礎石は「石居」という地名の由来となった。
3	逢坂	おうさか	大津市・由来は、主に神功皇后と忍熊王の軍勢が「逢った（戦った）」という伝承、または山城国と近江国の二つの坂が「逢う（出会う）」場所である事に由来するとされている。
4	大萱	おおがや	大津市・由来には諸説あり、「広い萱（かや）の野原であった」という説と、奈良時代の地方官庁「大衛屋（おおがや）」に由来する説、そして大寺院であった事を示す「大瓦屋（おおがや）」に由来する。
5	笹田	かがた	大津市・由来については不明。
6	膳所	ぜぜ	大津市・由来は、平安時代に朝廷へ魚介類を献上する「食膳を調える所」であった事に由来する。元々は「陪膳（おももの）」の浜田」と呼ばれていましたが、時代と共に「膳所」となり「ぜぜ」と読まれるようになった。
7	大物	だいもつ	大津市・由来には諸説あり、主なものは、室町時代まで存在した「歓喜寺」という大きなお寺に由来する説がある。
8	田上	たなかみ	大津市・由来は、古くからこの地域一帯を指す広域な名称であり、また「太神山（たなかみやま）」という山岳地帯の名称でもある。古くは「多那伽彌（たなかみ）」と表記され「日本書紀」に登場します。また「大神」という表記から「太陽の神」や「田の神」が宿る山として崇められていたと思われる。
9	苗鹿	のうか	大津市・由来は、天太玉命（あめふとだまのみこと）が農作業中に鹿が稲（苗）を背負って手伝ったという故事に由来すると言われる。また、「のうか」という読みは、那波加神社の那波加が転訛したものとされている。
10	和邇	わに	大津市・由来は、大和の古代豪族である和爾氏がこの地を拠点としていた事に由来する。和爾氏は、神功皇后に仕えた武振熊（かけふるくま）を祖とする古代豪族で、長きに渡り天皇家に妃を送り込み、大きな発言力を持っていた。
11	男鬼町	おおりちょう	彦根市・由来には諸説あり、男鬼寺（だんきじ）説では、奈良時代の神護景雲3年（769年）に、雲仙山の山麓に建立された七つの精舎の一つが「男鬼寺」と呼ばれ、これが地名の由来になった説と、「鬼のような男の伝説」では、かつて鬼のような男がいた」という言い伝えが残っており、地名の由来となった説がある。
12	出路町	でっちちょう	彦根市・由来については不明。

13	外町	とまち	彦根市・由来については不明。
14	楡町	にれちょう	彦根市・由来は、「楡（にれ）の木」が多く茂っていた土地に由来。
15	沼波	のなみ	彦根市・由来は、古代の犬上郡沼波郷、中世の沼波庄に由来する。
16	葉枝見	はえみ	彦根市・由来は、かつて存在した「稲葉荘（いなばのしょう）、日枝荘（ひえしょう）、栗見荘（くりみしょう）」という3つの荘園にまたがっていた事に由来する。
17	法士町	ほうぜちょう	彦根市・由来については不明。
18	物生山	みしやま	彦根市・由来は、室町時代に小野清介によって築かれたとされる物生山城があり、元亀元年（1570年）の織田信長による佐和山城攻めの際に、付け城の一つとなった。
19	阿閉	あつじ	長浜市・由来は諸説あり、古代氏族「阿閉臣（あへのおみ）に由来する説が有力です。阿閉臣は安倍氏の流れを汲む豪族で、飛鳥時代にはその名が記録されている。
20	大音	おおと	長浜市・由来は、この地域が古くから養蚕業や製糸業で栄「大音系」と呼ばれる特殊な生糸の産地であった事に由来すると思われる。
21	大路町	おちちょう	長浜市・由来ははっきりしませんが、「大路」という言葉が「通り道」や「主要な道」を意味すると思います。
22	垣籠町	かいごめちょう	長浜市・由来は、戦国時代に「垣籠久左衛門」という武士が居た事に由来する。
23	主計	かずえ	長浜市・由来は、古代の律令制における官職名の一つである「主計寮（しゅけいりょう）」に由来する。
24	口分田	くもて	長浜市・由来は、古代の土地制度である「班田制」における「口分田」に由来する。
25	香花寺町	こうけいじちょう	長浜市・由来は、「寺町」という地名は、一般的にその地域に寺院が多く存在した事に由来する。
26	相撲町	すまいちょう	長浜市・由来は、昔、朝廷で行われていた相撲の儀式の費用をまかなう田地であった事や、天覧相撲が行われた事に由来する。相撲は古くは「すまい」と読まれていた。
27	渡岸寺	とうがんじ	長浜市・由来は、国宝の十一面観音立像が安置されている観音堂に由来する。この観音堂は、観音菩薩への信仰が深く根付いている地域である事を示している。
28	新居町	にのいちちょう	長浜市・由来は、明和7年（1498年）の地震と津波により浜名湖の開口部が決壊し、橋本地区が壊滅した際に、住民が今切・新居地区に移転した事に由来する。
29	不室	ふむろ	長浜市・由来については不明です。
30	保田町	ほうでちょう	長浜市・由来は、平安時代に「保（ほ）」と呼ばれる行政組織が転じて地名になったと思われる。「保」とは、元々5戸を1組とした隣組のような最末端の行政組織を指す。これが、地方の区域の名称に転じ民間が開墾した私有地の団地を意味するようになったという。
31	祝山	ほりやま	長浜市・由来については不明です。

32	馬上	まけ	長浜市・由来は、古くは氏神である走落（はしりおち）神社の名から「走落」と称していたが、仁和年間（885年～889年）に当地の名馬が宇多天皇に献上され「馬上」の額を賜った事に由来する。
33	雌鳥谷	めんどりだに	長浜市・由来については不明。
34	馬渡	もうたり	長浜市・由来は、「渡し」には舟と馬が使われていた。ここでは馬に乗せて川を渡っていた地域が「馬渡」と呼ばれていた事に由来。 日本の各地で「馬渡」の地名は残っているが、橋のない時代に川を渡る大きな役割であり、交通の要所野になっていた。
35	岩熊	いわくま	長浜市・由来については不明。
36	山階	やまなし	長浜市・由来は、山からのなだらかな斜面が盆地を形成している地形に由来する。
37	山梨子	やまなし	長浜市・由来は複数あり、一つは滋賀県の賤ヶ岳のある地名と、もう一つは山梨県名に由来する。
38	丁野	ちょうの	長浜市・由来は、古代に開拓された土地の呼び名に由来。古代、国家のために徴発され使役された人夫のことを「丁」と書いて「ゆほろ」といった。癌右衛門の屋敷あと。
39	列見町	れつけちょう	長浜市・由来は、太政官が2月11日に行っていた「列見」という儀式に由来する。この儀式は、六位以下の文官の中から芸能に秀でたものを選び、その才能や容姿を太政官以下の者が評価する。長浜の列見は、この儀式を賄うための土地であった事から、この地名が付いた
40	赤尾町	あこうちょう	近江八幡市・由来は、江戸時代には「八幡野」と呼ばれる広大な原野を、大津の商人・赤尾松太郎が新田を開墾した事に由来する。
41	香庄	このしょう	近江八幡市・由来は、平安時代末期の「香御園」（このみその）という荘園がもとになり、その後「香庄」という荘園名になった事に由来する。かつては「香之庄」とも表記された。
42	下豊浦	しもといら	近江八幡市・由来ははっきりしませんが、小字に歴史的な背景を持つ地名が複数ある。1・眼左右衛門は、元亀元年（1570年）の大相撲で活躍した力士「宮居眼右衛門」の屋敷跡に由来する。2・鍛冶の裏は、安土城築城の際に、諸国から集められた刀鍛冶が住んでいた場所そのほかに、女郎屋町、番場などの小字がある。
43	仲屋町	すわいちょう	近江八幡市・由来は、八幡城下町が形成された際に、仲買人が集まる町として成立した。商売の仲介を意味する「すあい」が転じたものとされている。
44	千僧供町	せんぞくちょう	近江八幡市・由来は、延暦寺の荘園として千僧供養のための料地であった事に由来する。
45	鉄砲町	てっぽうちょう	近江八幡市・由来は、かつてこの地域で鉄砲の製造で栄え、鉄砲に関連する人々が住んでいた事に由来する。
46	西生来町	にしょうらいち ょう	近江八幡市・由来ははっきりしませんが、「生来」（せいらい）の一般的意味は、生まれつきの性質や能力や生まれてこれまでという意味。
47	博勞町	ばくろうちょう	近江八幡市・由来は、牛馬の売買を行う「博勞」が住んでいたことに

			由来する。
48	日吉野町	ひよのちょう	近江八幡市・由来については不明。
49	下物町	おろしもちょう	草津市・由来ははっきりしませんが、琵琶湖に面し、古くから水陸交通の要衝であった草津市の地理的特徴に関連していると思われる。
50	長束町	ながつかちょう	草津市・由来は、平安時代に比叡山の領地を束ねる長であった長束一族がこの地を治めていた事に由来する。
51	矢橋町	やばせちょう	草津市・由来は、古くは「矢走」「矢馳」「八橋」などとも表記され、琵琶湖の町として栄えた歴史に由来する。
52	焰魔堂	えんまどう	守山市・由来は、平安時代の貴族であった小野篁（おののたかむら）が、五道山十王寺（現在十王寺）を開基した際に、閻魔大王像を安置した事に由来する。鎌倉時代にはすでに集落として使われていた。
53	大曲	おまがり	守山市・由来は、全国的にも存在する地名で、大きく湾曲した難所に由来する。この地の大曲は、古くは「曲狭の里」や「巳薺野荘大曲里」と呼ばれており、中世には「大満加里曲」や「大曲」とも称されていた。
54	幸津川町	さづかわちょう	守山市・由来は、琵琶湖に注ぐ一級河川である幸津川（さづがわ）に由来すると思われる。
55	十二里	じゅんのり	守山市・由来は、条里制という古代の土地区画制度に由来する可能性が高い。条里制とは、古代の土地制度で、土地を碁盤の目のように区画し、条（じょう）、里（り）、坪（つぼ）といった単位で呼称する。
56	浮気町	ふけちょう	守山市・由来は、寛永年間から記録に見える地名で、湿地帯だったことに由来する。「浮気」（ぶけ）とは、水が地上に浮いている土地。
57	小坂	おっさか	栗東市・由来は全国的に諸説あり、ほかの坂に対して小さな坂を由来とする。
58	川辺	かわづら	栗東市・由来は、集落が金勝川に面して営まれていた事に由来する。古くは「河頬（かわづら）や「川づら」「川面」と表記され、時代とともに「川辺」が定着した。
59	金勝	こんぜ	栗東市・由来は、金勝山に創建された「金勝寺」に由来する。金勝寺は、天平5年（733年）に聖武天皇の勅願により、良弁によって開基されたと伝えられる寺院。
60	縷	へそ	栗東市・由来は、織物機に装着する麻糸の糸玉「縷」に由来する。この地域は古くから麻織物の産地であった事を示しており「へそくり」の語源にも関連するという。
61	鈎	まがり	栗東市・由来は、「曲」を意味する川の蛇行などの自然地形、または「古事記」に登場する「勾君」（まがりぎみ）の一族との関連が由来
62	山女原	あけびはら	甲賀市・由来は、アケビの産地であった事に由来する。また、「山女」と書いて「アケビ」と読む俗字が使われる事もある。
63	鹹川	うぐいがわ	甲賀市・由来は、昔は魚の「ウグイ」が多く生息をしていた事から着いた地名。
64	宇田	うった	甲賀市・由来については不明。

65	青土	おおづち	甲賀市・由来については不明。
66	神	かむら	甲賀市・由来は、「飯道（はんどう）」という言葉が、古代の「百済（ホジ）」に由来する。
67	蟻峨	ぎか	甲賀市・由来は、中世にこの地を本拠とした「蟻峨氏（ぎか）」に由来する。蟻峨氏は蒲浦氏の分流で、元久元年（1204年）に観学院領蟻峨庄の下司となり、蟻峨氏を称した。
68	貴生川	きぶがわ	甲賀市・由来は、明治時代に「内貴」「北内貴」「虫生野」「宇川」の四つの村が合併した際に、それぞれの村名から一文字ずつ取って作られた合成地名。
69	酒人	さこうど	甲賀市・由来は、11代垂仁天皇の時代（275年）に酒を造って神に献上した「御神酒（おみき）」の里である事に由来する。
70	信楽	しがらき	甲賀市・奈良時代に聖武天皇が造営した「紫香楽宮（しがらきのみや）」に由来する説が有力です。
71	杣中	そまなか	甲賀市・由来は、古代に宮殿や寺院の建築用材を供給する「杣山（そまやま）」がこの地域に置かれていた事に由来する。この地域を流れる川も「杣川」と呼ばれる。甲賀地域には、東大寺や西大寺が経営する「杣」が集中している。
72	幸ヶ平	はとがひろ	甲賀市・由来は、飛鳥時代にこの本拠地として百済系の豪族「鹿深臣（かふかのおみ）」に由来すると思われる。奈良時代には「甲可」や「甲賀」と表記され、やがて「甲賀」に定着
73	深川	ふかわ	甲賀市・由来は、1470年の望月内竜法師並野田深川」と記されているのが初出で、甲賀と伊賀を結ぶ交通の要衝として発展した。
74	柞原	ほそはら	甲賀市・由来には複数あり、主なものは、山を行き来する人々が山の資源に挽かれて定住したという説と、木地師が木地を求めて移る住んだという説、そして平家の落人が戦乱を逃れて住み着いたという説。
75	虫生野	むしょうの	甲賀市・由来は、麻系の原料となる「苧麻（からむし）」が繁茂していた土地である事が由来か。
76	毛枚	けびら・もびら	甲賀市・毛の一般的な由来は、作物と地形に由来すると思われる。作物の意味では「毛」が二毛作や毛見のような植物を指す場合と、地形の意味では、木が生えない岩山を指す場合や、逆に気が生い茂る「木成し」に由来する場合がある。
77	安治	あわじ	野州市・由来は、安治川が語源と思われる。安治川は、旧淀川の分流の一つで、大阪市中之島から大阪湾に注ぐ川で、貞享年間（1684年～1688年）に河村端軒が淀川の治水の為に開削した運河で、当初は「新川」や「新堀川」と呼ばれていた。元禄11年（1698年）に幕府の命令で「安治川」と改称された。
78	竹生	たけじょう	野州市・由来は複数あり、主なものは「神を齋き（いつく）島」が「いつくしま」から「つくぶすま」と変化し「竹生島」になったという説と、島の形が雅楽で使われる楽器の笙（しょう）に似ている事から「竹生島」と言う漢字が当てられたという説がある。

79	饗庭	あいば	高島市・由来は、古くは近江や京に都があった時代に、東北からの使節団を招いて饗宴を開いた場所であった事に由来する。
80	安曇川	あどがわ	高島市・由来は、古代にこの地に住んでいたとされる「安曇（あずみ）」族に由来する。元々は「あずみ」と呼ばれていたが、時を経て「あど」と転訛したと思われる。
81	天増川	あますがわ	高島市・由来は不明ですが、天増川は琵琶湖に注がず日本海に流れる珍しい河川であり、かつては集落が存在したという。
82	雲洞谷	うとうだに	高島市・由来は不明ですが、古くは林業で栄え、若狭と京を結ぶ街道として人や物の往来が盛んであった地域です。
83	小入谷	おにゅうだに	高島市・由来ははっきりしませんが、小入谷は若狭と京を結ぶ「鯖街道」の一つとして交通の要衝であり、「小入」という言葉が峠や谷に関連する地理的特徴を表している可能性が考えられる。
84	開田	かいて	高島市・由来は、新しく開墾された田んぼに由来する。
85	柏	かせ	高島市・「柏」という地名の由来は諸説ありますが、一般的には「柏の木が自生していた」や「河岸場（かしば）の転訛、「傾斜地の端などの説がある。
86	北仰	きとげ	高島市・由来は複数あり、一つは、北の峰を仰ぎ見て天の神を祈った事に由来する説（酒波寺縁起）です。もう一つは、大津市仰木町から最初の開拓者が入植し、その地名に「北」を冠して「北仰」と称した説がある。
87	朽木	くつき	高島市・由来には複数あり、一般的には横川の霊木を仰ぎ見た事に由来する説と、巨松を仰ぎ見る説では延暦年間（782年～808年）に伽太夫という人物が村を開き「巨樹の里」と称した。村にあった巨松の梢に毎夜明星が揺れるのを皆が仰ぎ見た為、後に「仰木」と改められた説と、小椋（おむく）の転訛説出は、仰木には式内社小椋神社があり、「仰木」は「小椋」が転訛したものという説もある。
88	木津	こうつ	高島市・由来は、一般的には「木材の集まる港を意味し、かつては木材の陸揚げ港として栄えた場所に由来する。
89	酒波	さなみ	高島市・由来は、かつて周囲の谷川に棲み村人を困らせていた大蛇に酒を飲ませて退治した伝説に由来する。
90	栃生	とちゅう	高島市・由来については不明。
91	西万木	にしゆるぎ	高島市・由来は、かつてこの一帯に広がっていた「万木の森（ゆるぎのもり）」に由来する。この森は、鎌倉時代に後鳥羽院が諸国から多くの木を集めて植えさせた事から「万木」と書かれるようになった。
92	蘭生	ゆう	高島市・由来は、石田川が山峡から抜け出た場所に位置する事に由来する。もともと西野村の一部でした。
93	妹	いもと	東近江市・由来は、愛知川右岸の氾濫原に位置する事に由来する。また、この地には「妹子の郷」という未知の駅があり、これは遣隋使の小野妹子がこの地を本領していた事に由来する。
94	大清水	おおしゅうず	東近江市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が高熱の病を

			癒したとされる「居醒（いざめ）」の清水」に由来する。この清らかな湧き水は、古くから地域住民の生活を支え、旅人の疲れを癒してきており、地名の発端となっている。
95	綺田町	かばたちょう	東近江市・由来については不明。
96	上南町	かみなちょう	東近江市・由来は、かつて「南村」とも呼ばれ、新堂村の南、日野川東岸の平地に位置していた事に由来する。「上南」という名称は「南村」に「上」が付けくわえられたものと思われる。
97	蒲生堂町	かもうどうちょう	東近江市・由来は、かつて蒲生郡蒲生町の一部で、非常に古くから人々が生活をしてきた。戦国時代には蒲生氏がこの地を治めていた。
98	木流	きながせ	東近江市・由来は、「木流し」という木材運搬方法や「木地師」の文化に関連が由来と思われる。
99	五位田町	ごいでちょう	東近江市・由来については不明です。
100	佐生町	さそちょう	東近江市・由来は、昔この地に霊泉があり、その清水が常に湧き出していた事に由来するという伝承がある。
101	尻無町	しなしちょう	東近江市・由来は、かつて蛇砂川（へびすながわ）がこの地で途切れており、川の下流がなかった（尻無の状態であった）事に由来する。
102	蓼畑	たてはた	東近江市・由来は、過去に蓼（たで）が栽培されていた畑があった事に由来する。蓼（たで）は香料として利用された植物。
103	外町	とのちょう	東近江市・由来については不明。
104	杠葉尾	ゆずりお	東近江市・由来は、「ユズルハ」という植物に由来する。中世の文書には「ゆつりはう」江戸時代には「杠葉村」や「樺穂村（ゆずりほむら）」と記されている。
105	和南町	わなみちょう	東近江市・由来については不明。
106	梓河内	さんかわち	米原市・由来は、「梓」と「河内」という二つの集落が合わさったことに由来する。梓は中山道沿いに位置する集落で、「梓」の木が多く見られた事に由来し、河内は梓川沿いの谷間にある集落を言う。
107	岩脇	いおぎ	米原市・由来は、岩脇稻荷神社が岩脇山に鎮座していることから、この地域の地形である岩とその「脇」に集落が形成された事に由来する。
108	河南	かわなみ	米原市・由来は、天野川の南側に位置する地域である事に由来する。
109	樽ヶ畑	くれがはた	米原市・由来は、戦国時代に織田信長が美濃攻めの際に、木下藤吉郎に命じて墨俣に築かせた「墨俣一夜城」の用材を、この地から調達した事に由来する。
110	顔戸	ごうど	米原市・由来ははっきりしませんが、「迷い原」が転じた可能性や、中世に存在した「米原氏」という地侍に由来すると思われる。
111	醒井	さめがい	米原市・由来は、日本武尊（やまとたけるのみこと）が伊吹山の神に傷つけられた際、この地の清らかな湧き水で体を癒し、正気を取り戻したという伝説に由来する。この湧き水は「居醒の清水」（いさめのしみず）と呼ばれ、地蔵川の源流となっている。
112	春照	すいじょう	米原市・由来は、伊吹山南麓に位置し「水の上」を意味する「水上」と記されていた事が、地名の語源という。

113	菅江	すえ	米原市・由来は、「洲処（すげ）」と「江（え）」が組み合わさったものとされ、これは砂洲が形成する入江の地形を表している。
114	夫馬	ぶま	米原市・由来は、「フ・ブ（やや高い所）＋マ（場所）」という地形を表す言葉に由来する説と、佐々木大原氏の支族である夫馬氏が居住していた地域である事に由来する説もある。
115	小田	やないだ	米原市・由来は、小さな田んぼや開墾地に由来すると思われる。
116	鎌掛	かいがけ	蒲生郡・由来は、掛信仰に由来する説と、熊対決の伝説に纏わる説などがある。
117	三十坪	みそつ	蒲生郡・由来は、三十坪という土地の広さに由来する。
118	薬師	くずし	蒲生郡・「薬師」という地名は仏教の「薬師如来」や薬師寺に関連していると思われる。
119	愛知川	えつがわ	愛知郡・由来は、「愛知」（えち）という読み方は、5世紀末頃にこの地域に住み着いた渡来系氏族の依知秦（えちはた）氏に由来すると思われる。彼らは、先進的農業技術を伝えたという。
120	蚊野外	かのとの	愛知郡・由来については不明。
121	香之庄	このしょう	愛知郡・由来は、平安末期に見られる香御園（このみその）の後身かと思われる香庄の荘園名と思われる。
122	不飲橋	のまずばし	愛知郡・由来は、平将門の首をこの川の源である野間津池で洗った際、池の水が血で濁り、人々がその水を飲まなくなったという伝承に由来する。
123	深草	ふこそ	愛知郡・由来は、古くから文献に登場し「深草屯倉（ふかくさのみやけ）」や「深草郷」と言った記述が確認できる。
124	斧磨	よきとぎ	愛知郡・由来は、昔、木こりが針を作るために斧を磨いていたところそれを見た高僧が感銘を受け、村名を「斧磨（よきとぎ）」と名付けたという伝承がある。
125	日栄	ひえ	犬上郡・由来については不明。
126	岬原	あけんばら	犬上郡・由来は、「山」の下に「女」で「あけび」という合成文字「岬（あけび）」に「原」で「あけんばら」と読む地名となった。
127	大君ヶ畑	おじがはた	犬上郡・由来は、平安時代に惟喬親王（これたかしんのう）が京の都から逃れて来た際、鞍掛峠で馬の鞍を外して休憩したという伝承に由来するという。
128	萱原	かいはら	犬上郡・由来は、かつて広い萱（カヤ）の野原であった事に由来する
129	川相	かわない	犬上郡・由来は、鈴鹿山脈を源流とする「北谷川（きたやがわ）」と「南谷川」が当地で合流し「犬上川」となります。これが「川相」の地名の由来と思われます。
130	栗栖	くるす	犬上郡・由来は、栗の木が生えた土地、岩礫の多い土地が由来とおもわれる。他県にも「栗栖」の地名がある。
131	仏ヶ後	ほとけら	犬上郡・由来については不明。
132	桃原	もばら	犬上郡・由来は、かつてこの地に存在した天台宗の「桃源寺」に由来すると思われる。

京都府



NO	地名	読み方	由来
1	不明門通	あけずどおり	京都市・由来は、通りの北端にある因幡薬師堂（平等院）の門が常に閉ざされていて開けられる事がなかった事に由来する。
2	烏丸通	からすまるとおり	京都市・由来は諸説あり、主なものは「川原洲（かわはらす）」に出来た村（まる）が転じて「からすま」となり、そこに「烏丸」の漢字が当てられたという説と、「烏丸」という名の有力な公家の邸宅があったので「その名が着いた説と、平安京以前にカラスが多く生息する森があった事に由来する説がある。
3	御幸町通	ごこまちどおり	京都市・由来には諸説あり、主なものは豊臣秀吉が伏見（あるいは大阪）から禁裏御所に参内する際にこの道を通ったという説と、天子が御幸（ぎょこう）になる事からとも言われる説、同じ言葉を使いながら上皇や法皇のお出ましを御幸（ごこう）と呼び表す事から、秀吉もこれに準じて、秀吉の為の道となったという。
4	深泥池	みどろがいけ	京都市・由来は複数あり、主に池の底に泥が深く堆積している事が由来とする説と、行基が弥勒菩薩像を発見した、あるいは深泥池地藏堂を置いたという伝承から「弥勒（みろく）や「地藏（じぞう）」の音に由来する説がある。
5	新ン町	しんちょう	京都市・由来は、安居院の地で新しく拓かれた町である事による。
6	上終町	かみはてちょう	京都市・由来は、京の都の北の果てに位置する事に由来する。
7	雲母坂	きららざか	京都市・由来には諸説あり、主なものは都から見て夕雲が湧き出るように見えた為着いた説と、坂の土砂に雲母が多く含まれていた事による説がある。
8	糺の森	すだすのもり	京都市・由来は諸説あり、「偽りを糺す（ただす）」という意味や、賀茂川と高野川の合流点を指す「只洲」、清らかな水が澄む場所を表す「直澄」、そして祭神である「多多須玉依姫（ただすたまよりひめ）神名」に由来する。
9	化野	あだしの	京都市・由来は、「はかない」「むなしい」を意味する古語の「あだし」に由来し、生と死へと「化」す場所、つまり葬送の地であった事にちなんでいる。平安時代には、身分の低い人々の風葬地。
10	太秦	うずまさ	京都市・雄略天皇の時代に渡来系の豪族である秦氏（はたうじ）が、絹を「うず高く積んで」朝廷に献上した事から「禹豆麻佐（うずまさ）」という姓を与えられ、これが地名になったという。
11	生田口	おいたぐち	京都市・由来は、かつて存在した生田村に由来する。明治7年に生田村と高田村が合併し、現在の「嵯峨野」が成立した。生田口は旧生田村だった地域の名称として残る。
12	西院	さい	京都市・由来には複数あり、主に平安時代の官寺「西院」に由来する説と、「賽（さい）の河原」に由来する説がある。
13	樽尾	とがのお	京都市・由来は、この地域に「樽尾山高山寺」という寺院が存在し、樽尾が「樽尾山」の山号と関連が深い事から、山岳の名称が地名になったと思われる。

14	霖原	ふしはら	京都市・由来は、かつて桂川で行っていた「霖（ふし）」と呼ばれる漁法に由来する。この漁法は、水中に柴などを沈めて魚を捕らえる仕掛けの事。
15	先斗町	ぽんとちょう	京都市・由来は複数あり、主なものはポルトガル語の「ponta（先）や「ponto（点）」に由来する説と、鴨川と高瀬川に挟まれた地形を鼓に見立て「ポン」と音がする事をもじったという説もある。
16	壬生	みぶ	京都市・由来は、もともと水辺や低湿地を意味する「水生（みぶ）」に由来し、後に「壬生」の漢字が当てられた説と、皇子の世話をする「乳部（みぶべ）」からの転訛も含まれるという説がある。
17	蹴上	けあげ	京都市・由来は、奥州平泉へ向う源義経が泥水を蹴り上げた武将を切った事が由来と言われている。また、処刑を拒み、山を登って刑場に向うのを嫌がる罪人達を、役人が後から蹴り上げて処刑場まで連れていった事から、蹴上という地名が着いたという説もある。
18	良町	うしとらちょう	京都市・由来は、方角の北東を表す、丑寅（うしとら）にちなんだ地名。
19	久我	こが	京都市・由来は、公家の「久我家（こがけ）」に由来する可能性が高いと思われる。久我家は、藤原北家を祖とする名家であり、この地域と歴史的につながりが地名に残ったと思われる。
20	直違橋	すじかいばし	京都市・由来は、七瀬川に架かる橋が、南北に走る伏見街道に対して斜めに架けられた事に由来する。この橋は「直違橋」と呼ばれ、斜めにかかる形状からその周辺の地域や通りもこの名で呼ばれている。
21	納所	のうそ	京都市・由来は、皇室に納める穀物などの重要な倉庫があった事、または淀川を上って都に送られる物資を一部保管する場所であった事に由来する。
22	羽束師	はづかし	京都市・由来は、古代に瓦や石灰を焼いていた技術者集団「はづかしべ」（泥部）が住んでいた事に由来する。「はづかしべ」が「はづかし」と読まれるようになり「羽束師」という漢字が当てられた。
23	柳辻	なぎつじ	京都市・由来は、かつて村内に「柳（なぎ）」の大樹があり、その木を目印に村を知る事が出来た為「柳」という漢字を建てて村名にしたものと思われる。
24	御陵	みささぎ	京都市・由来は、天皇や皇后など皇室の墓を意味する「御陵（みささぎ）」に由来する。特に京都府山科区は天智天皇陵に、左京区の御陵は文徳天皇陵または桓武天皇の生母である高野信笠の墓に由来する。
25	檜原	かたぎはら	京都市・由来は、源和元年（1615年）の「大原野一覽」に「カタギ原の町」と記され、貞享2年（1685年）の「京羽二重」には「檜原七条通りの西丹波へこゆる道なり」と見える事から、古くからこの地名が使われていた。
26	石原	いさ	福知山市・由来は、鎌倉時代の記録に初見があり、「ささいへのしやうのうちしわら（石原）ハ、せうしやう（惣庄）—こ（期）ののちにハ、そうしやうにつくへき物なり」と記されている。この地名は

			「いさ」と読みますが、かつては「いしはら」とも発音した。
27	行積	いつもり	福知山市・由来については不明。
28	鋳物師	いもじ	福知山市・由来は、かつて鋳物師が多く住んでいた事に由来する。
29	大油子	おゆご	福知山市・由来は、「ユ」が水や川「ナゴ」が崖や平坦地を指す言葉に由来し、「川崖」や「川沿いの崖」といった地形を表す可能性が指摘されている。
30	門垣	かづか	福知山市・由来は、近世の直見のうみ村に含まれる集落。直見天神の鎮座地を宮垣（みやがい）といい、直見の口にあたる地を「門垣」飛んだと思われる。
31	私市	きさいち	福知山市・由来は、古墳時代の豪族・物部守屋が、現在の私市を含む一帯の領地を皇后に差し上げた事から、この一帯を「きさいべ」（私部）と呼ばれるようになったという。「きさい」は皇后、「べ」は部民（所属する人々）を指すとの事。
32	篠尾	さそう	福知山市・由来は、笹の生えた丘陵の端を意味している。
33	額塚	すくもづか	福知山市・由来には複数あり、主なものは、春日大社にまつわる社額が埋められた事に由来する説と、古墳群が存在した事に由来する説。
34	住所大山	おおやま	福知山市・由来については不明。
35	三河	そうご	福知山市・三河の由来は、3つの川（豊川、矢作川、乙川）を表し、3つの川の源になる事を表す。
36	多保市	とおのいち	福知山市・由来は、昔、塔のあった寺の前の市場という事から起こった地名。
37	土師	はぜ	福知山市・由来は、古代当地が河内国志紀郡土師郷に属しており、氏寺の土師寺（現在の道明寺）や氏神の天穂日命神社（現在の道明寺天満宮）を祀った事に由来する。
38	日置	へき	福知山市・由来は、平安時代の承平年間（931年～938年）に書かれた「和名抄」の中に、丹波の郷「日置」（へき）がある。旧多紀郡の国造的豪族に「多紀臣」や「日置君」の名が見られる事から、古くから「日置」の名称は心材していたと思われる。
39	報恩寺	ほおじ	福知山市・由来は、北朝時代に興国2年（1341年）足利尊氏が後醍醐天皇の菩提を弔うため、三光国師を開山として創建された寺に由来
40	六十内	むそち	福知山市・由来は、古代六部郷の六人部連に由来と思われる。
41	六人部	むとべ	福知山市・由来は、古代の天田郡むとべ郷（和名抄）に立荘された荘園で、福知山市の東南部、土師（はぜ）川流域の六人部谷一帯に比定される。六人部とは、古代日本に存在した職業部（品部）の一つ。
42	森垣	もりがい	福知山市・由来は、とある僧侶が山で修行を行った際、邪魔をしないように村人が山を垣根で囲った事に由来する。
43	岬	ゆり	福知山市・由来は、山の中腹の平地を意味する言葉が由来する。
44	朝来	あせく	舞鶴市・由来は、「校倉（あぜくら）」に由来する。
45	鷺鷥	うの	舞鶴市・由来については不明。
46	河原	こうら	舞鶴市・由来は、岩石の間の丸い穴から水が湧く泉が由来。

47	女布	によう	舞鶴市・由来は、古代には彌布と書いたが、中古から今の地名に改められた。「ニヨオ」はアイヌ語の村という意味。
48	室牛	むろじ	舞鶴市・由来は、河辺谷の観音寺宿坊などへ食料を運ぶ為に牛を飼っていた事による。
49	私市町	きさいちちょう	綾部市・由来は、古代の何鹿郡12郷の一つ私部（きわいべ）郷の地で、皇后の名代部の私部は「日本書紀」敏達天皇6年条（577）に初見し、当郷もそれが由来すると思われる。
50	旦棕	あさくら	宇治市・由来は、「校倉（あさくら）から転訛したものとされる。
51	黄檗	おうばく	宇治市・由来は、唐僧・黄檗希運の名に由来する。
52	穴太	あなお	亀岡市・由来は、「穴穂（あなほ）」由来する。雄略天皇の夢に豊受大神が現れ、伊勢へ還る途中に上田家の庭が御旅所となった。その際、御供えした荒稲の種子が櫛（けやき）の老木の腐った穴に落ち、そこから育った稲が美しい瑞穂を結んだ事から「穴穂の里」と名付けられたのが始まりという。
53	印地	いじ	亀岡市・由来は、「印地」とは「印地打」の略で「川を挟んだりして石を投げ合う一種の合戦」で、中世には盛んに行われていた。
54	大槻並	おおつくなみ	亀岡市・由来は、村内に「槻（つき）」の大樹が多く生えていた事に由来する。「槻」は「櫛（ケヤキ）の一種。
55	小林	おばやし	亀岡市・由来は、小さな林の意味で、集落の近くには防風林や防砂林のような家を守る林があり、それが地名となった。小林を「おばやし」と呼ぶ地域もある。
56	柏原	かせばら	亀岡市・由来は、昔は「かしぐ（炊ぐ）」種に用いた樹木（ブナ科の落葉高樹で、東日本ならカシワ、西日本ならナラガシワ）が多く生えていた原、あるいは、カシの木が多く生えていた原をいう。
57	北金岐	きたかなげ	亀岡市・由来については不明。
58	神前	こうざき	亀岡市・由来は、東に谷を下ると、丹波国府（北庄）に出る事により国府先（こくふさき）が「神前（こうさき）」になったと思われる。
59	小米田	こごめだ	亀岡市・由来は、周辺の地形や歴史、米作りとの関連姓型名付けられたと思われます。
60	突抜町	つきぬけちょう	亀岡市・由来は、「突抜」という言葉が示すように、既存の道を突き抜ける形で新たに造られた道に由来する。
61	土田	つた	亀岡市・由来ははっきりしませんが、地形的関連から「土壌や田畑」から名付けられたと思われる。
62	天川	てんが	亀岡市・由来についてははっきりしませんが、全国的の「天川」という地名は多く存在する。
63	土ヶ畑	どんがはた	亀岡市・由来は、焼畑農業に由来していると思われる。
64	西豎町	にしたつちょう	亀岡市・由来は、「豎町（たてまち）」が元々の地名であり、城下町の南北に伸びる通りを示す「豎（たて）」に由来する。
65	稗田野	ひえだの	亀岡市・由来は、稗田野神社に祀られる「稗（ひえ）」と「田」と「野」に由来する。

66	東豎町	ひがしたつちょう	亀岡市・由来は、方向に由来する町名と思われる。
67	本梅	ほんうめ	亀岡市・由来については不明。
68	南金岐	みなみかなげ	亀岡市・由来については不明。
69	宮前	みやざき	亀岡市・由来は、神社の参道周辺の地域を指す「宮前」に由来する。
70	山階	やまなし	亀岡市・由来は、古くは「山階（やまなし）」と書かれていた。この「しな」という音は、坂道や階段、階層を意味する言葉に由来し、山のなだらかな斜面が盆地を形成する地形から名付けられたという。
71	笑路	わろうじ	亀岡市・由来ははっきりしませんが、永享年間（1429年～1441年）以降に築城された「笑路城」があった。
72	上津屋	こうづや	城陽市・由来は、木津川の流路変更により分断された元来一つの集落であった事に起因する地名。
73	水度坂	みとさか	城陽市・由来ははっきりしませんが、「水度神社」がある。
74	鶏冠井	かいて	向日市・由来は、楓（かえて）の葉っぱの色や形が「鶏のとさか」の「井」と当て字されたという由来。
75	向日	むこう	向日市・由来は、市域の鎮守である向日明神から来ています。天正20年（1592年）8月、豊臣秀吉は西国街道沿いの向日明神前に新町を造ることを認めた。当時の京都所司代前田玄以が向日前新町の建設を認める3か条の定書を下した事が始まりという。
76	物集女	もずめ	向日市・由来は、現在の大阪府の百舌鳥（もず）周辺から移り住んだ埴輪などを作る工人集団を率いていた古代の氏族に由来する。
77	神足	こうたり	長岡京市・由来は、桓武天皇が奈良から長岡京に遷都した時に、この地に「田村の池」と呼ばれる聖なる池があり、ここに神が降臨した故に「神（かむ）」「到り」の村と称された。これが転じて「神足村」と呼ばれたという。
78	長田	おさだ	八万市・由来は、苅藻川沿いに長く開けた田地が続いていた事からつけられた地名。
79	女郎花	おみなえし	八幡市・由来は、平安時代に八幡の男山に住む小野頼風とその恋人の悲恋の物語に由来するもので、恋のもつれから、山吹重ねの衣を脱ぎ捨てた女が川に身を投げたあとに咲いた黄色の花が「オミナエシ」でした。
80	指月	しげつ	八幡市・由来は、空の月、川の月、池の月、杯の月など一度に4つの月を見る事が出来るから指月という諸説がある。「指月」は月を指しながら指先だけを見て本当の月を見ていない例えて、月が目的、指先が手段を示すなどと説かれている。」
81	五十河	いかが	京丹後市・由来は、「妙性寺縁起」によると、火事に悩んでいた村人の相談を受けた小野小町が「五十日」という地名を「五十河」に帰れば火事が治まると教えたのが地名の由来という。
82	間人	たいざ	京丹後市・由来は、聖徳太子の母である間人皇后（はしうどこうごう）がこの地に滞在した事に由来する。皇后がこの地を去る際に、自らの名を贈ったとされ、地元の人々はそのまま読むのは恐れ多いとい

			う事で「たいざ」と読み替えて呼ぶようになったという伝承がある。
83	坳	たわ(あくつ)	京丹後市・由来については不明。
84	雛塚	ひなづか	京丹後市・由来ははっきりしませんが、ひな人形やひな祭りに関連する地名とも考えられる。
85	越方	おちかた	南丹市・由来については不明。
86	音海	おとみ	南丹市・由来は、福井県の高浜町音海が発祥という。
87	川澁	かわばた	南丹市・由来については不明。
88	口人	くちうど	南丹市・由来は、京都における「口」の付く地名は、かつて平安京への出入り口や街道の要衝であった場所を示している。
89	穴人	ししうど	南丹市・由来には諸説あり、古代の氏族名で「穴人部(ししひとべ)」に由来や鹿や猪を捕らえる事にたけた氏族、地形的特徴では、猪が多く生息する土地や獣道があった場所などが考えられる。
90	八乙女	はつとめ	南丹市・由来は、神楽や舞を奉仕する8人の巫女を指す「八乙女」に由来する地名。
91	無碇口	みしゅうぐち	南丹市・由来ははっきりしませんが、京都では「京の七口」と呼ばれ、かつて平安京の主要な出入口でした。
92	文字鬮地	もじがいち	南丹市・由来ははっきりしませんが、「鬮」という字が珍しいため、古くから歴史や地域特有の文化に由来する可能性があります。
93	涌澁	ゆうけ	南丹市・由来については不明。
94	綺田	かばた	木津川市・由来は、「日本書紀や「古事記」に登場する「綺戸辺(かにはとべ)」などの人名に由来すると思われる。
95	相楽台	さがなかだい	木津川市・由来は、「古事記」に記された伝説では、第11代垂仁天皇の后が亡くなった後、ミチノウシの娘四姉妹が大君の元に蒸しあげられた。妹二人は醜いという理由で送り返された。その内の一人が恥かしさに耐えきれず、父の元に返される途中で木の枝にかけて死のうとしたため、その地を「懸木(さがき)」と呼び、それが転じて「相楽(さがなか)」となったという。
96	銭司	ぜず	木津川市・由来は、奈良時代に貨幣を鑄造する役所であった「鑄銭司(ちゅうせんし)」が置かれていた事に由来する。
97	一口	いもあらい	久世郡・由来には諸説あり、かつて巨椋池(おっぐらいけ)の西岸に位置し、洪水による疫病を「忌み祓い(いみはらい)」した事に由来する説と、集落への出入口が西の一方しかなかった事に由来する説
98	巨椋	おぐら	久世郡・由来には諸説あり、主なものは、かつて巨椋池(おぐらいけ)のほとりを拠点とした「巨椋氏」一族に由来する説と、巨椋池周辺に「椋の木」が多く生えていた事に由来する説。椋
99	祝園	ほうその	相楽郡・由来は、崇神天皇の時代に武埴安彦(たけはにやすひこ)の反乱で多くの兵士が殺された場所を「羽振苑(はふりその)」と呼んだ事に由来する。この「羽振苑」が転訛して「祝園」になったという説
100	安栖里	あせり	船井郡・由来は、「せり上がっている斜面」や「由良川の川水で土砂がせり上がり集まった土地」に由来する。

101	蒲生	こも	船井郡・由来は、かつてこの地域が「菰（こも）」た「蒲（がま）」が茂る広大な原野であった事に由来する。
102	質志	しずし	船井郡・由来は、隣接する三ノ宮に鎮座する式内社「酒治志神社」の「酒治志（しゅし）」に由来する。
103	須知	しゅうち	船井郡・由来は、「倭名類聚清抄」に丹波国船井須知郷と記されており、古代から歴史を持つ地名です。また、「シュウチ」「シュチ」スチ」「シチ」といった読みは、古代の渡来語で「大様」「首長」を意味する言葉に由来する。
104	耳鼻	にび	与謝郡・由来については不明。
105	嗎	いななき	与謝郡・由来については不明ですが、「馬などの嘶き」に関連か。
106	加悦	かや	与謝郡・由来には諸説あり、古代に茅原（かやはら）であった事、吾野神社の祭神である「我野迺姫（かやのひめ）」にちなむこと、朝鮮半島の古代国家である伽耶国（かやこく）に由来する。
107	三河内	みごち	与謝郡・由来には複数あり、主なものは野田川、岩谷川、加悦奥川の三つの川に三方を囲まれている事に由来する説と、当地の倭文神社の祭礼で、行われる「神招き」の行事から、「御神地（ミゴチ）神社」と称されていたことに由来する。
108	与謝	よさ・よざ	与謝郡・由来に諸説あり、「イサナギのミコト」が余社命で子神らに依事（よざ）をした事に由来する説や、豊受大神が真名井水を調べた事に由来するとする古代伝説が伝えられている。また、雄略天皇22年には「餘社郡」として文献に初見され。湾での「よせあみ」（寄網）漁法が「よさみ」から「ゆさ」へ転訛したという説もある。
109	河梨峠	こうなしとうげ	京丹後市・由来については不明。
110			



大阪府



NO	地名	読み方	由 来
1	内代町	うちんだいちょう	都島区・由来は、寛永20年（1643年）から徳川氏代官の支配地になった事に由来する。
2	大開	おおひらき	福島区・由来は、かつて茶畑であった所を西野田工科高等学校の開設に伴い、新たに周辺を切り開いた事から「大開」と名付けられた。この地域が野田村の小字名が大正14年まで「西野田大開町」と呼ばれている事に由来する。
3	夢洲	ゆめしま	此花区・由来は、1991年に公募で決定した地名。古今和歌集の和歌「住之江の岸による波よるさえや夢の通ひ一目よくらむ」から「夢」を連想した事に由来する。
4	立売堀	いたちぼり	西区・由来は、「伊達堀」が転じて「いたちぼり」となり、後に材木の「立売」にちなんで漢字が当てられたという説がある。
5	靱	うつぼ	西区・由来は、豊臣秀吉が魚商人たちの「やすい、やすい」と魚をうる掛け声に「やすとは靱（矢を入れる道具、矢巢ともいう）と洒落（しゃれ）を言った事に由来する。
6	本田	ほんでん	西区・由来は、元々あった田んぼに由来する。
7	波除	なみよけ	港区・由来は、かつて存在した人口の山「波除山」に由来する。波除山は、貞享元年（1684年）に淀川の治水工事を行った際、その土砂を積み上げて作られた人口の山です。
8	泉尾	いず踞お	大正区・由来は、和泉国大鳥郡踞尾村（つくお）の北村六右衛門が開発した際、開発者が国名「和泉」と村名「踞尾」から一文字ずつ取って名付けたとされている。
9	恩加島	おかじま	大正区・由来は、江戸時代にこの地を開発した岡島嘉平次（おかじまかへいじ）の功績を称え「恩加島新田」と名付けられた事に由来する
10	小橋町	ばせちょう	天王寺区・由来は、仁徳天皇の時代に猪甘津（いかいの）に架けられた「小橋」に由来する。この橋は「日本書紀」にも記されており、文献に残る日本最古の橋とされている。
11	伶人町	れいにんちょう	天王寺区・由来は、四天王寺の舞楽に携わる楽師たちが集まって住んでいた事に由来する。
12	浪速	なにわ	浪速区・由来には諸説あり、「なみはや」という言葉が転訛して「なにわ」と表記されたという説で、「なみはや」はかつて大阪湾の潮の流れが速かった事に由来する説と、元々「魚（な）庭（にわ）」から来ており、大阪湾で魚介類が豊富に獲れた事が由来という説もある。
13	御幣島	みてじま	西淀川区・由来は、神功皇后が三韓征伐からの帰途に、この地で神に捧げる御幣（みてぐら）を調整し、国の安泰を祈ったという伝承に由来する。
14	柴島	くにじま	東淀川区・由来には複数あり、主なものは、かつて「荃島（くきじま）」と呼ばれていたものが転訛した説と、柴薪に利用されるクヌギが多く茂っていた事から「櫟島」（くにぎじま）が転じたという説、そして柴島神社の創始に関する説がある。

15	大桐	だいどう	東淀川区・由来は、昭和55年の住居表示に関する法律に基ずくもので「大道」から「大桐」と「大道南」に整理された。理由は、住居表示の明確化で「大道」を冠する地名が複数あり、郵便や地図上での混乱を避けるためという。
16	豊新	ほうしん	東淀川区・由来は、昭和55年に実施された住居表示に関する法律により、旧西成郡豊里村と新庄村にまたがっていた事に由来する。
17	生野	いくの	生野区・由来は、1400年前、推古天皇の時代に聖徳太子由来の「生野長者」の伝説に由来する。生野長者は言葉を話せない子供を授かり、聖徳太子に助けを求めた。聖徳太子は子供が前世で預かっていた仏舎利を返すように促し、子どもは仏舎利を吐き出して言葉を話せるようになったという。聖徳太子は仏舎利を長者に与え、祀るために建てた「舎利寺」がその名の起源という。
18	生江	いくえ	旭区・由来は、かつて「なぎ（荒生）」と呼ばれていた地域に南北に流れる「江（え）」が存在した事に由来する。「荒生江」から「荒」が除かれ「生江」が町名となった。
19	新喜多	しぎた	城東区・由来は、宝永元年（1704年）に旧大和川の河川敷跡を開発した鴻池新十郎、鴻池喜七、今木屋多兵衛の3名の開発者の名前から一文字ずつ取って名付けられた地名。
20	鳴野	しぎの	城東区・由来は、旧大和川と寝屋川が合流するデルタ地帯で、干拓が進んだ水田に「シギ」が多く集まっていた為、この名が付いた。
21	放出	はなてん	城東区・由来は複数あり、主に「水の放出口」という説と、「草薙剣（くさなぎのつるぎ）」に関する伝説に由来する説がある。
22	河堀口	こぼれぐち	阿倍野区・由来は、延暦元年（788年）に和気清麻呂が桓武天皇の命により行った治水工事で、茶白山の南東から開削を始めた堀の入り口に由来する。
23	我孫子	あびこ	住吉区・由来は、古代にこの地に住んでいた豪族「依羅吾彦」（よさみのあびこ）に由来する。
24	遠里小野	おりおの	住吉区・由来は複数あり、古くは「とをさとおの」と読まれ、住吉の周辺原野を意味したという説と、「瓜生野」（うりうの）と呼ばれていたものが変化して「おりおの」になったという説がある。
25	帝塚山	てづかやま	住吉区・由来は、この地にある帝塚山古墳から名付けられた。帝塚山古墳は、4世紀末から5世紀初頭の前方後円墳で、大阪市内唯一の本来の形をとどめた古墳として国の史跡の指定されている。
26	千躰	せんたい	住吉区・由来は、徳川幕府が千歳を祝いし名付けた松栄亭とここにあった正印の御筥（みはこ）が秘符された内部の正躰に接する事がないという伝承に由来する説がある。
27	長峽町	ながおちょう	住吉区・由来は、元々は安立町新田と呼ばれていたが、明治8年の地租改正の際に「長峽町」に改称された。長峽の里に由来する。
28	楠瑠社	なんくんしゃ	住吉区・由来は、住吉大社の末社である楠瑠社は、推定樹齢1000年のクスノキの巨樹がご神木として祀られている事に由来する。

29	依羅	ゆさみ	住吉区・由来は、古代にこの地に居住していた豪族「依羅吾彦」（よさみのあびこ）に由来する。
30	百濟	くだら	東住吉区・由来は、古代に朝鮮半島の百濟国から渡来したに人々が住み着いた事に由来する。特に、百濟滅亡後に日本に亡命した百濟王「善光」とその一族が難波に住み、多くの百濟人が彼らを頼って移住したため、この一帯が「百濟」と呼ばれるようになった。
31	杭全	くまた	東住吉区・由来は諸説あり、主なものは土地を区別するために杭を打ったことに由来する説と、百濟からの渡来人が住んでいた事に由来する説がある。
32	住道矢田	すんじやた	東住吉区・由来は、「中臣須牟地神社」や「神須牟地神社」に祀られる道の神である「住道神」（すみちがみ）に由来する。
33	聖天下	しょうてんした	西城区・由来は、「天下茶屋の聖天さん」として知られる正圓寺の坂の下に位置する事に由来する。
34	天下茶屋	てんかちゃや	西城区・由来は、豊臣秀吉が住吉大社参拝や堺への途中に立ち寄り楽しんだ茶屋があった事に由来する。この茶屋は「殿下茶屋」と呼ばれたが、それが転じて「天下茶屋」となったという。
35	十三	じゅうそう	淀川区・由来は諸説あり、一つは淀川の上流から数えて13番目の渡し場があった説と、古代の土地区画法である条里制において、現在の十三の地が13条にあたるという説がある。
36	新高	にいだか	淀川区・由来は、周囲より土地の標高が高かった事や、新しく開拓された土地の収穫量（高）に由来する説がある。また、大正14年に町名が制定された当時、台湾の新高山が日本領で最も高い山として知られていた事も関連しているとも言われる。
37	茨田大宮	まったおおみや	鶴見区・この地名は、二つの要素から成立ち、「茨田（まった）」という地名は、古代に仁徳天皇が水害を防ぐために築いた「茨田堤（まったのつつみ）」に由来し、淀川の治水に貢献した河内の豪族「茨田連衫子（まんだのむらじころものこ）」の名にちなんで名付けられた。「大宮」の由来は、この地域にあった産土社（うぶすなしゃ）である「大神社（おおみやじんじゃ）」の社名に由来する。
38	安立	あんりゅう	住江区・由来は、江戸時代初期に宮中や徳川将軍家の御典医を務めた半井安立（なからいあんりゅう）に由来する。元々は住吉大社の領地であった為「西町」と呼ばれたが、近世に「安立町」へと変わった。
39	瓜破	うりわり	平野区・由来は諸説あり、主なものは道昭法師が天から降りて来た神体に瓜を割ってお供えしたという説と、弘法大師がこの地を通った際に住民が瓜を割って差し出したという説がある。いずれもこの地が古くから瓜の産地である事を示している。
40	加美鞍作	かみくらづくり	平野区・由来は、「加美」と「鞍作」の二つの地名が組み合わさった地名。
41	喜連	きれ	平野区・由来は、古代朝鮮の高句麗からの渡来人である「伎人（くれびと）」に由来する。彼らは「伎楽（ぎがく）」に優れていたため伎人

			と呼ばれ、その「くれ」が転訛して「きれ」となり、後に「喜連」の漢字が当てられたという。
4 2	天満	てんま	北区・由来は、学問の神様である菅原道真を祀る「大阪天満宮」の門前町として栄えた事に由来する。
4 3	兔我野町	とがのちょう	北区・由来は諸説あり、古代朝鮮語で「日の出」を意味する「都祈野（ときの）」が転訛したという説と、渡来人系の由来説では「都下（つげ）」が「とが」に変化し「菟餓」の字が当てられたという説などがある。
4 4	長柄	ながら	北区・由来には諸説あり、主なものは「な」は魚、「がら」は形を表し、「魚の形をした島」を意味する説と、梵語で「天皇のいる大都（首都圏）」を意味するという説がある。
4 5	道修町	どしょうまち	中央区・由来は諸説あり、主なものは室町時代にこの地が「道修谷」と呼ばれていた説と、「道修寺」という寺院があった説や、「北山道修」という医師が住んでいた説もある。
4 6	井池	どぶいけ	中央区・由来は、かつて難波薬師の境内にあった「井（どぶ）のような形をした池」に由来する。この池は「芦間池（あしまいけ）」とも呼ばれ、明治7年（1874年）に埋め立てられた。
4 7	馬場町	ばばちょう	中央区・由来は、かつて馬を訓練する馬場があった事に由来する。
大阪府下			
4 8	神南辺町	かななべちょう	堺市・由来は、江戸時代後期の僧侶である神南辺道心（かななべどうしん）がこの地に住んでいた事に由来する。
4 9	北旅籠町 南旅籠町	きたはたごちょう みなみはたごちょう	堺市・由来は、かつて堺の町の南北の入り口にあたるこの地に、旅人が宿泊する「旅籠」が多く存在した事に由来する。
5 0	百舌鳥 夕雲町	もずせきうんち ょう	堺市・由来は、昭和14年（1939年）に堺市に編入された旧百舌鳥村の一部で、「百舌鳥」という地名は仁徳天皇の時代に「モズ」が鹿の命を救ったという伝説に由来する。
5 1	文珠橋通	もんじゅばしど おり	堺市・由来は、文殊菩薩を本尊とする家原寺（えばらじ）に由来する可能性が高い。家原寺は行基菩薩が自身の生家を寺に改めたと伝えられ、日本で初めて文殊菩薩を本尊とした寺院とされている。
5 2	毛穴町	けなちょう	堺市・由来は、鎌倉時代にこの地域を統治していた豪族の名前に由来するという説がある。
5 3	土師町	はぜちょう	堺市・由来は、古墳の築造に関わった古代の技術者集団である土師氏がこの地を本貫地としていた事に由来する。
5 4	八田寺町	はんだいじちょう	堺市・由来は、奈良時代の高僧である行基が創建したとされる蜂田寺（はちたでら）、現在の華林寺に由来すると思われる。
5 5	日置荘	ひくしょう	堺市・由来は、古代の「日置部（ひきべ）」という集団の居住地であった事と、中世に興福寺の荘園「日置荘」が置かれた事に由来する。
5 6	家原寺町	えばらじちょう	堺市・由来は、奈良時代の高僧である行基が自身の生家を寺に改めた「家原寺」に由来する。

57	神野町	こうのちょう	堺市・由来は、古代にこの地域に居住していた豪族「依羅吾彦（よさみのあびこ）」に由来する。日本書紀には、神功皇后が三韓親征の際に、依羅吾彦族のオタルミを神主にしたという記述がある。
58	逆瀬川	さかせがわ	堺市・故藍は、川が武庫川との合流点の手前で土砂が堆積し、流れが逆流する事に由来する。
59	樽	とが	堺市・由来は、室町時代から存在し、応永7年（1400年）の文章に「(トカ)左近次郎」という記述がある。
60	三木閉	みきとじ	堺市・由来は、4世紀の神功皇后が九州出兵の際、献上された地酒を喜んだことから「酒壺」で「みき」という地名になり、後に「三木」にあらためたという俗説がある。
61	上神谷	にわだに	堺市・由来は、神が降り立たとされる伝説に由来する。古い時代に神を「みわ」と呼んだ事から、神が降臨したこの地域は「上神郷」（かみつみわのさと）と呼ばれ「みわのさと」が「にわのさと」に変化し「上神谷」（にわだに）という地名になったという。
62	大豆塚町	まめづかちょう	堺市・由来は、地域で大豆の栽培が盛んであった、あるいは大豆に関わる歴史的な背景があった可能性があると思われる。
63	百舌鳥	もず	堺市・由来は、仁徳天皇陵の築城にまつわる伝説に由来する。仁徳天皇陵の工事中に鹿の耳から百舌鳥が飛び出した事から「百舌鳥耳原」と名付けられたという話が「日本書紀」に記されている。
	余部	あまべ	堺市・由来ははっきりしませんが「余部城（あまりべじょう）」に関連すると思われる。余部城は、応仁・文明の乱（1467年頃）には、野田泰忠らが居城し、後に中沢正綱が居城とした。
65	大饗	おわい	堺市・由来は、鎌倉時代に記録が残る古い地名で、かつて存在した「大饗城」に由来する。「おおあえ」「おおわい」「おおば」「おおあい」などの読み方がある。
66	有真香	あまか・ありまか	岸和田市・由来は、津田川中流域の古名に由来する。この古名は「天下」「阿間河」「阿理莫」などとも表記され「ありまか」とも読まれる
67	包近町	かねちかちょう	岸和田市・由来は、中世の「名田（みょうでん）」に由来する。元々「名田」という土地に単位の名主の名前（仮名）に由来する。
68	神於町	こうのちょう	岸和田市・由来は、「神於山（こうのやま）」に由来する。「神於山」は、岸和田市の中央を流れる春木川の水源地であり、古くから「神のおわす山」として崇拝され、特に水の信仰に支えられた神於山信仰は雨乞い行事に見られる山岳信仰と仏教が融合したものです。中世には修験道の行場として栄え、百八坊の大羅漢を誇ったと伝えられる。
69	作才町	ざくざいちょう	岸和田市・由来ははっきりしませんが、天正年間（1573年～1592年）に土生村から分村したと言われ「作才村」となったという。
70	積川町	つがわちょう	岸和田市・由来は、牛滝川と深山川が合流し、土砂が堆積して出来た土地である事に由来する。
71	塔原町	とのはらちょう	岸和田市・由来ははっきりしませんが、「との原」という地名は古くからあったと思われる。

72	並松町	なんまつちょう	岸和田市・由来は、紀州の殿様が参勤交代の際に通った紀州街道沿い にあった「松並木」に由来する。
73	土生町	はぶちょう	岸和田市・由来は、「埴生（はにゅう）」が転訛したものと思われる。
74	箕土路町	みどろちょう	岸和田市・由来は、古くは「犬飼（いぬかい）」と称されていたと伝 えられる。
75	山直中町	やまだい なかちょう	岸和田市・由来は、古代の和泉郡にあった「山直（やまたえ）郷」に 由来する。この地域の中心氏族であった「山直（やまのあたえ）」と いう氏名が転訛したものと思われる。
76	行遇町	ゆきあいちょう	岸和田市・由来は、かつて阿間河荘の神事の際に、上字と下字の人々 がこの場所で落ち合った「行き会った」事に由来する。
77	上津島	こうづしま	豊中市・由来は、周囲を海に囲まれた小島に由来する説がある。 この地域にはかつて海神を祀る住吉神社があり、海にゆかりのある歴史 を伝えている。
78	利倉	とくら	豊中市・平安時代後期の平治元年（1159年）に鳥羽上皇の菩薩所 である安楽寿院に寄進された所領の中に「利倉」の名が確認されてい る。由来については、はっきりしない。
79	刀根山	とねやま	豊中市・由来は複数あり、主なものは、古代の渡来人である答本（と うほん）氏に由来する説と、地形を表す「利峰（とね）」から転訛し た説、そして戦国時代の「殿山（とのやま）」が転訛した説がある。
80	螢池	ほたるがいけ	豊中市・由来は、かつてこの地域にあった「螢ヶ池」という溜池に由 来する。
81	呉服町	くれはちょう	池田市・由来は、城下町に於いて呉服商が多く住んでいた事に由来。
82	神田	こうだ	池田市・由来には複数あり、一つは八坂神社を運営・維持するための 「神田（しんでん）」に由来する説と、猪名川の氾濫によって田が荒 れた「荒田（あれた）」に由来する説がある。
83	豊島	てしま	池田市・由来は、和銅5年（712年）に太安万侶が撰んだ「古事 記」の中巻に初めて登場し、古代の摂津国豊島郡に由来する。この地 域は古くから開発が進み、多くの集落が存在した場所。
84	満寿美町	ますみちょう	池田市・由来は、大正7年（1918年）」に開発された「満寿美住 宅地」の販売時に名付けられた事に由来する。
85	正雀	しょうじゃく	吹田市・由来は、阪急電鉄の正雀工場が由来となっており、昭和41 年（1966年）に町名として誕生した。
86	二田町	ふつたちょう	泉大津市・由来は、飛鳥時代の豪族である物部氏一族の「二田氏」が この地に居住していた事に由来する。物部氏の祖神である饒速日尊 （にぎはやひのみこと）が降臨した際に従った「二田造」や「二田物 部」の子孫が、この地に住み着いたとされる。
87	出灰	いずりは	高槻市・由来は、昔、石灰（石灰石）が産出し、朝廷に献納されてい た事に由来する。
88	上牧	かんまき	高槻市・由来は、かつてこの地に天皇や公家が所有する牧場があった 事に由来する。

89	神内	こうない	高槻市・由来は、古代の西国街道の要衝として栄え、「神南の戦い」の舞台にもなった歴史的な背景を持つ地域。
90	西面	さいめ	高槻市・由来は、かつての面（村に相当する行政単位）の名に由来。西面の面事務所（村役場）が釜田洞にあったことから、釜田洞の集落の事を指して「西面」と呼ぶようになったという。
91	芝生町	しばちょう	高槻市・由来は、菅原道真賀休息した際、老翁が「草むらに靈芝（れいし）が多く生えるので芝生村」と説明したという事に由来する。
92	辻子	ずし	高槻市・由来は、街道の分岐点である辻の意味。
93	富田	とんだ	高槻市・由来は、律令制以前に存在した皇室の御料田である「屯田（とんでん）に由来する。この「屯田」が音便変化して「トング」となり、後に「富田」という漢字が当てられたと思われる。
94	土室	はむろ	高槻市・由来は、土器を制作する人々が集まっていた事に由来する。この地域では、粘土を意味する「埴（はに）」と、室意味する（廬（いお））が合わさった「埴廬（はにいお）」が転じて「土室（はむろ）」になったと思われる。
95	五百住町	ゆすみちょう	高槻市・由来には複数あり、主なものは安閑天皇の時代に郡司が罰として差し出した500人の労働者が住んだ土地が「五百住（いおすみ）」と呼ばれ、後に「五百住（よすみ）」に転じたという。
96	麻生中	あそなか	貝塚市・由来ははっきりしませんが、「麻生郷」という広域の地名の一部であり、古くは「麻生本郷」と呼ばれていた。
97	秬谷	きびたに	貝塚市・由来については不明。
98	神前	こうざき	貝塚市・由来は、式内神前神社に由来する。古代に船息（ふねすえ）が設置されたことなどから、神前は神崎の意で、脇浜と近木川下流によって形成された三角地帯であろうと思われる。
99	近木	こぎ	貝塚市・由来は、中世に高野山金剛峯寺の荘園であった「近木庄」（こぎのしょう）に由来する。
100	清見	せちご	貝塚市・由来は、奈良時代の僧である行基（ぎょうき）にまつわる伝承に由来する。聖武天皇の勅命で行基が聖観音像の出現地を探していた際、白鳥を見失い途方にくれていた行基の前に十六童子が現れ、水間（みずま）の地へ導いたという伝承がある。この十六童子が現れた地が「清見（せちご）」と呼ばれるようになった。
101	蕎原	そぶら	貝塚市・由来ははっきりしませんが、地名は古くは蕎麦原とも書き「そばやら」や「そばら」ともいう。蕎麦の産地であった事にちなむ
102	名越	なごぜ	貝塚市・由来については不明。
103	新井	にい	貝塚市・由来は、その昔「新しい井戸」が次々とできるほど水が沸いた事に由来する。
104	三ヶ山	みけやま	貝塚市・由来については不明。
105	来迎町	らいこうちょう	守口市・由来ははっきりしませんが、鎌倉時代創建の「来迎寺」に由来か。
106	枚方	ひらかた	枚方市・由来は、淀川水系の「平らな渦の入り江」の意とする由来説

			や、「日本書紀」にある白波が立ち寄せる「白肩（シラカラ）、白瀉之津」から転じた説がある。
107	大垣内町	おおがいとちょう	枚方市・由来については不明。
108	楠葉	くずは	枚方市・由来は諸説あり、「古事記」に記されている「くそはかま」が転じたという説と、古語で崖地を意味する「クス」と端を意味する「ハ」に由来する説がある。
109	蹉跎	さだ	枚方市・由来は、菅原道真の娘である苺屋姫が、父との再会が叶わず悲しみのあまり足摺りをした事に由来する。
110	招堤	しょうだい	枚方市・由来は、仏教寺院を指す一般名詞「招堤」に由来する。この地域は、かつて浄土真宗の道場を中心とした寺内町として発展した。
111	三栗	めぐり	枚方市・由来は、元々は「みぐり」と読まれていたものが、音韻変化で「めぐり」に変化した可能性がある。明治時代には「小倉村三栗」の形で存在していた。
112	王仁公園	わにこうえん	枚方市・由来は、近くにある大阪府指定史跡「伝王仁墓（でんわにはか）」に由来する。この「王仁」は、5世紀初頭に朝鮮半島の百済から渡来し、日本に漢字や儒教を伝えたと言われる王仁博士にちなむ。
113	安威	あい	茨木市・由来は、古代にこの地を本拠とした豪族「中臣藍連（なかとみのあいらじ）」に由来する。また、安威川流域一体が「藍野」と呼ばれていた事に由来する。
114	粟生岩阪	あおいわさか	茨木市・由来は、1999年2月1日に茨木市粟生岩阪の一部が箕面市に再編入された事に現在の形になった。
115	泉原	いずはら	茨木市・由来は、「養老の滝伝説」に由来するという。泉や湧き水のある平原や平地に関連する。
116	道祖本	さいのもと	茨木市・由来は、「道祖神社」に由来する。「道祖神」が「さいのかみ」「さいのもと」とも読まれていた事にも由来する。
117	沢良宜	さわらぎ	茨木市・由来は諸説あり主なものは、古代朝鮮語の「サワラ＝首邑（しゅゆう）」に由来する説と、金属器と村を示す接では、「サワラ」の金属器を「ギ」が村を意味するという見方をする説もある。
118	宿河原町	しゅくがはらちよう	茨木市・由来は、あるとのさまの馬が病に倒れた折り、この地の伯楽（馬医）が手当して治した事に感謝し、馬のわらぐつを奉納した事に由来する。また京都と下関を結ぶ西国街道（山陽道）のうち、京都と西宮を結ぶ区間に設けられた6つの宿場の一つであった事に由来。
119	内瀬	ないじよ	茨木市・由来ははっきりしませんが、河川の「瀬」に由来する。
120	耳原	みのはら	茨木市・由来は、耳原古墳があり、6世紀末から7世紀前半に築造された。この地域一帯は古墳群を形成している。
121	南条	みなんじょう	茨木市・由来は、古代の土地区画制度である条里制に由来する。条里制は、土地を碁盤の目のように区画する制度で、その区画の南側に位置する地域が「南条」と呼ばれた。
122	曙川	あけがわ	八尾市・由来は、この地域を流れる「明川（現在の楠根川）」という川に由来する。

123	刑部	おさかべ	八尾市・由来は、古代日本の部民（べのたみ）の一つの「刑部（おさかべ）」に由来する。この部民は、允恭天皇の皇后である忍坂大中姫命（おさかおおなかつひめのみこと）の名代として設定された忍坂部（おさかべ）が正字とされており、その料地（りょうち）の管理などに従事した人々が刑部氏となったという。
124	恩智	おんじ	八尾市・由来には複数あり、主な説は「日本書紀」に記された「恩、母が如し」という言葉に由来する説と、百済系渡来人である阿智使主（あちのおみ）の勢力地であった事から「阿智（あち）」が転訛したという説がある。
125	垣内	かいち	八尾市・由来は、垣根で囲まれた武家屋敷を意味する「垣内」に由来する。これは主に近畿地方特有の言い回し。
126	竹瀝	たこち	八尾市・由来は、初代天皇の神武天皇が生駒山で強敵に襲われた際に大竹藪（やぶ）に身を潜めて危機を免れたという伝承に由来する。
127	弓削	ゆうげ	八尾市・由来は、古代の豪族である弓削氏がこの地を本拠地としていた事に由来する。弓削氏は、弓矢などの武器制作に携わる弓削部を率いていた氏族。
128	八尾木	やおぎ・よおぎ	八尾市・由来は諸説あり、八枚の羽根を持つ美しい声のウグイスが止まる木を「八尾木」と呼んだ事に由来する説と、八負い説は、「古代八尾地域には弓矢の生産に携わった人々が多く住んでおり「矢を背負う（矢負う）」が転じて「八尾」になったという説、八百の柵（木）説では、称徳天皇の由義宮造営に関連し、古大和川の堤防工事で数多くの木（柵）が打ち込まれた事から、「八百の木」が「八尾」に転じたという説もある。
129	山畑	やまたけ	八尾市・由来ははっきりしませんが、かつて大窪村の一部で、正保年間から寛文年間にかけて、大窪村から3つの村に分村された際に「山畑」という地名が生まれたとされている。
130	嬉	うれし	富田林市・由来は、大治4年（1129年）の文献に「河内国錦郡宇礼志別所」と記されており、興福寺大乘院領の荘園「宇礼志庄」に由来すると思われる。
131	毛人谷	えびたに	富田林市・由来は、古代に蝦夷人（毛人）が居住していた事に由来。
132	彼方	おちかた	富田林市・由来ははっきりしませんが、南北朝時代からある地名。
133	甘南備	かなび	富田林市・由来は、神聖な山や場所、あるいはそれらに関連する神社仏閣を指す「神奈備（かなび）」に由来する。
134	廿山	つづやま	富田林市・由来は、「廿」の文字が「十」が二つ横に並んだ形を意味する事に由来する。この地名は、鎌倉時代末期には「津々山（つづやま）」として存在していた。
135	富田林・	とんだばやし	富田林市・由来には諸説あり、主なものは、永禄2年（1559年）に興正寺の証秀上人が「富田の芝」と呼ばれる荒芝地を開拓し、寺内町を建設した際に、この「富田の芝」という原野名に由来して名付けたという説や、古代語「とだ」に由来する説では、「どだ」とは湿地

			を表す古代語で「泥田（どだ）」が語源となり、「どだ林」から「富田林」に変化した説と、地形に由来する説出は、「とび（崩壊地形）」と「た（場所を示す接続語）」に「はやし（林）」が組み合わさって「富田林」になったという説もある。
136	楠風台	なんふうだい	富田林市・由来については不明。
137	太秦	うずまさ	寝屋川市・由来は、渡来系の豪族である秦氏に由来する。秦氏は機織りの技術者の集団であり、絹布を「うず高く積んだ」ことから、朝廷は「兔豆満佐（うずまさ）」の姓を与えられた事に由来する。この「うずまさ」に「太秦」の漢字を当てられたという。
138	木屋	こや	寝屋川市・由来は、「木屋」（きや）が転訛したもので、古くは淀川分流の分岐点に当たり、上流から運ばれる木材を管理する「木屋」があった事から生まれた地名です。
139	点野	しめの	寝屋川市・由来は、宇多天皇が対岸の鳥飼牧の境界に標（しめ）を立てた事に由来する。元々は「標野」と書かれ、後に「メ野」そして現在の「点野」に変化したと思われる。
140	対馬江	つしまえ	寝屋川市・由来は、古代氏族である対馬部（つしまべ）が住んでいた事に由来し、「ツシマベ」が転訛したものと思われる。また「津島」は船の着く所「対馬江」は淀川の縁を意味すると思われる。
141	秦町	はだちょう	寝屋川市・由来は、6世紀から7世紀にかけて聖徳太子の補佐役として活躍した渡来系の豪族「秦河勝（はたのかわかつ）」に由来する。
142	初町	はっちょう	寝屋川市・由来については不明。
143	高向	たこう	河内長野市・由来は、古くは731年に記された「住吉大社神代記」にも登場するほど歴史は深く、渡来人である石川錦織許呂が預かった山の所在地に「高向」の名が記されている事に由来する。
144	阿保	あお	松原市・由来は、平安時代初期にこの地に居住したとされる平城天皇の第一子である阿保親王に由来する。阿保親王は、水利が悪く干ばつに苦しんでいたこの地に「親王池」を造り、農業を奨励したという。
145	御供田	ごくでん	大東市・由良は、かつてこの地が石清水八幡宮へ寄進された土地であった事に由来する。元々「河内国讃良郡園野村」と呼ばれた地域が、源義家によって石清水八幡宮へ社領として寄進され「御供田村」に改称されたと古文書に記録されている。
146	住道	すみのどう	大東市・由来は、寝屋川と恩智川の合流地点にあった「角堂浜（すみのどうはま）」に由来する。この場所は、かつて舟運の拠点として栄え、大阪と大和を結ぶ荷物の積み替えや、寺社参詣の舟が利用されるほど大変賑わっていた。
147	太子田	たしてん	大東市・由来は、聖徳太子ゆかりの「太子堂」に由来する。かつてこの地には聖徳太子信仰が盛んで、善根寺という大きな寺院があり、大師像が安置されていた。
148	中垣内	なかがいと	大東市・由来は、治めていた人たちが住む所を意味する。
149	深野	ふこの	大東市・由来は、江戸時代の宝永元年（1704年）に行われた大和

			川の付け替え工事によって、かつて存在した深野池が新田として開発した事に由来する。
150	南面利町	なめりちょう	和泉市・由来は、南面流とも書き、滑らかなの意味で、岩床の丘を流れる地形に由来する。
151	納花町	のうけちょう	和泉市・由来は、昔この地域に施福寺の花畑があり、四季折々の花を寺に納めていた事に由来する。江戸時代には、仏閣に納める花を栽培する農家が多かった為、「納花」と呼ばれるようになったという。
152	伯太町	はかたちょう	和泉市・由来は、伯太神社の祭神である伯太彦・伯太姫（はかたひこ・はかたひめ）に由来する。
153	粟生	あお	箕面市・由来は、かつてこの地域で良質な酒米である「粟生米（あおまい）」が生産されていた事に由来する。
154	外院	げいん	箕面市・由来は、「勝尾寺（かつおうじ）」の別院である帝釈寺（たいしゃくじ）」に由来する。
155	止々呂美	とどろみ	箕面市・由来は諸説あり、「轟き（とどろき）」という言葉や、若松神社に祀られる「止止呂支比売命」（とどろきひめのみこと）」に由来する説もある。
156	新稲	にいな	箕面市・由来は、玄和年間に吉田四郎兵衛（ト斎）がこの地を開拓し、新しい稲作地を拓いたことに由来する。
157	半町	はんじょう	箕面市・由来は、古代の官道である山陽道に沿って発展した集落であった事に由来する。
158	箕面	みのお	箕面市・由来は、主に箕面大滝の形が農具の「箕（み）」に似ている事に由来する。また「み（水）」と「おも（面）」が転じて「川沿いの地」を意味するという説がある。
159	雁多尾畑	かりんどばた	柏原市・由来は、光徳寺の門前にある案内板によると、1113年の戦いで唯一残った「雁林堂（がんりんどう）」という建物に由来する
160	国分東条町	こくぶひがしじょうちょう	柏原市・由来は、「国分」が古代の河内国分寺に由来し、「東条」は国分寺から見て東の方角にあった事に由来する。
161	大黒	おぐろ	羽曳野市・由来は、「大黒寺」という寺院があり由来する。
162	誉田	こんだ	羽曳野市・由来は、応神天皇の別名である誉田別尊（ほんだわけのみこと）に由来する。また、崇神天皇の子孫である「品陀真若王（ほむだまわかのおおきみ）の名にちなむ説もある。
163	稗島	ひえじま	門真市・由来は、かつては「姫島」と呼ばれたものが転訛したもの。「姫島」という地名は新羅の女神アカルヒメが滞在したとされる「比売島」に由来し、その後「ひめ」が「ひえ」に訛って「稗島」となり、更に「へじま」と発音されていた時代もあった。
164	別府	べふ	摂津市・由来は、荘園に付随する区画を指す「別府（べつふ）」が転じて「べふ」となったと思われる。
165	国府	こう	藤井寺市・由来は、奈良時代から平安時代にかけて、律令制下の地方行政機関である国府（国司が政務を行う場所）が置かれた事に由来する。国府の読み方は地域により異なり、ここでは「こう」と呼んだ。

166	土師ノ里	はじのさと	藤井寺市・由来は、古墳時代に古墳や埴輪の制作に携わった豪族である土師氏（はじし）がこの地に住んでいた事に由来する。
167	足代	あじろ	東大阪市・由来は、川の浅瀬に竹や木、葦を編んで魚を獲る仕掛けである「網代（あじろ）」が変化し「足代」となったという説がある。中世には「足代荘」という荘園があり、江戸時代には奈良街道と十三街道の分岐点として交通の要衝でした。
168	大蓮	おばつじ (おおはす)	東大阪市・由来は、中将姫が当地の蓮池（淵側池）の蓮で当曼荼羅を織ったという伝説、または当地にあった大蓮寺という寺院名に由来する説がある。現在は「おおはす」と読む。
169	衣摺	きずり	東大阪市・由来には複数あり、主なものは、古くからこの地域で織物や染色業が盛んでいた事から「衣を摺る（こする）」という言葉が転じて「衣摺」となったという説と、「物部守屋の悲劇説」では、587年の丁未の乱で、蘇我氏と戦った物部守屋がこの地で討たれた。聖徳太子はこれを哀れみ、大榎の木に衣の袖を擦り付けて嘆き悲しんだ事から「衣摺」となったという説などがある。
170	孔舎衛坂	くさえざか	東大阪市・由来は、神武天皇が東征の際に、長髓彦（ながすねひこ）の軍勢に行く手を阻まれ、兄の五瀬命（いつせのみこと）が負傷したとされる場所である事に由来する。
171	日下町	くさかちょう	東大阪市・由来は、古代にこの地が「草香江（くさかえ）」と呼ばれる入江であり、「日下」という漢字が「クサカ」という読みを表すようになったという。
172	新喜多	しぎた	東大阪市・由来は、江戸時代に新田開発をした「鴻池新十郎・鴻池喜七・今木屋太兵衛」の名前の一文字づつ寄せて付けたものという。
173	額田町	ぬかたちょう	東大阪市・由来は、古代の豪族である額田氏がこの地に居住した事に由来する説や、額田という読みは、元々「沼潟（ぬがた）」から来ており、ぬかるんだ湿地を意味する説もある。
174	蛇草	はぐさ	東大阪市・由来は、「波牟許會（はむこそ）」の「波牟」は蛇を意味する「はみ」が転じたもので、「許會」は社を意味するとされている。この「はむこそ」が長い年月を経て「はぐさ」に変化したという。
175	枚岡	ひらおか	東大阪市・由来は、「ひら」という大和言葉に由来し、平らで神の満ち満ちた場所という意味が込められている。この地域に鎮座する河内国一宮の枚岡神社が地名の由来。
176	御厨	みくりや	東大阪市・由来は、神に供える食材を調達する場所や、そのための領地を意味する「御厨」が由来という。平安時代には、この地域が皇室領「大江御厨」と定められ、都へ魚介類などを納めていた。
177	水走	みじはい	東大阪市・由来は、古代から中世にかけてこの地域を支配していた「水走氏」という一族に由来する。
178	弥刀	みと	東大阪市・由来は、かつてこの地域が大阪湾の入り江や大和川の河口にあたり、「水門（みと）」や「水戸（みなと）」と呼ばれていた事に由来する。この「水戸」が転じて「弥刀」という漢字が当てられた。

179	兎田	うさいだ	泉南市・由来についてははっきりしませんが、「和泉国日根郡兎田村」が起源と思われる。
180	男里	おのさと	泉南市・由来は、「日本書紀」や「古事記」によると、神武天皇の兄の「五瀬命（いつせにおみこと）が、東征中に矢傷を負い、その痛みには耐えかねて雄叫びを上げた場所が「雄水門（おのみなど）」または「男之水門（おのみなど）」と名付けたという事に由来する。
181	信達大苗代	しんだちおのしろ	泉南市・由来は、「苗代」という言葉が示すように、稲作に関連する土地であった可能性が高いと思われる。
182	信達葛原	しんだちずらばた	泉南市・由来は、信達が昭和31年までの自治体名で、「葛原」は山中にある集落に由来すると思われる。
183	信達童子畑	しんだちわらづはた	泉南市・由来は、かつて山中で人々が生活を営み、松茸狩りを楽しんでいた豊かな自然の畑の地。
184	中小路	なこうじ	泉南市・由来は、かつてこの地が「中小路（なかおじ）」と呼ばれていた事に由来する。この「中小路」は、暗越奈良街道の別称。
185	四條畷	しじょうなわて	四條畷市・由来は、南北朝時代の古戦場である「四條畷の戦い」に由来し、この戦いで戦死した楠木正行を祀る四條畷神社の名が広まって定着したという。
186	蒨屋	しとみや	四條畷市・由来には諸説あり、「蒨屋（しとみや）」という言葉の語義やこの地域で発見された遺跡からの出土品に関連しているという説。
187	交野	かたの	交野市・由来は、主に「肩野物部氏」という氏族名に由来する説と、「人が行き交う野」から転じたという説がある。
188	私市	きさいち	交野市・由来は、「私部市（きさいちべ）」の略で、皇室領であった事に由来する。これは大王（天皇）の後妃の為に置かれた「私部（キサイチベ）」という部民（べのたみ）が居住していた事にちなむもの。
189	私部	きさべ	交野市・由来は、古代に皇后（きさき）の為に農耕や身の回りの世話をする人々、すなわち「私部（きさいべ）」が置かれた事に由来する。時代と共に「きさいべ」から「きさべ」に変化した。
190	郡津	こうづ	交野市・由来は、古代に交野郡の郡衙（ぐんが）が置かれ、その門前の集落であった事、また郡衙の外港があった事に由来する。
191	茱萸木	くみのき	大阪狭山市・由来は、鎌倉時代の公文書に「佐志久美岡（さしくみのおか）」と記載されていた事や、茱萸（ぐみ）の木が多く生えていた事に由来する。
192	自然田	じねんだ	阪南市・由来は、地域に所在する瑞宝寺の鉦講（かねこう）が由来と思われる。鉦講は、念仏講の一種。
193	淡輪	たんのわ	阪南市・由来は、古代の「田身輪村（たむわむら）」に由来する説と、また鎌倉時代にこの地に土着した武士である淡輪氏に由来する。
194	山中溪	やまなかだに	阪南市・由来は、地理的特徴に由来し、山に囲まれた溪谷であった事から「山中」の「溪」と名付けられたと思われる。
195	水無瀬	みなせ	三島郡・由来は、川の水が伏流し、地表では水が涸れたように見える地形に由来する。

196	豊能	とよの	豊能郡・由来は、明治29年(1896年)に豊島郡と能勢郡が合併した際に、両郡の頭文字を組み合わせて「豊能郡」と命名された。
197	神山	こやま	豊能郡・この地の由来は不明ですが、府内に「神山」という地名は幾つか存在し、由来もそれぞれ違う。
198	小垣内	おがいと	泉南郡・由来は、明治時代に熊取村の一部として合併した地域。「垣内」の意味は、土地のある区画をいう語で、元は開墾を予定した区画を指したものの。
199	孝子	きょうし	泉南郡・由来は、平安時代の書家である橘逸勢(たちばなのはやなり)の娘が、流刑中に病死した父をこの地に葬り、妙沖と名乗って菩提を弔ったその孝心にちなんで名付けられたという。
200	望海坂	のぞみざか	泉南郡・由来ははっきりしませんが、「望海」という言葉から、海を望む景観の良い場所である事に由来すると思われる。
201	深日	ふけ	泉南郡・由来は、古くは「吹飯(ふけい)や「吹井」とも記され、「風が吹く」や「夜が更ける」といった意味合いが込められていると思われる。
202	磯長	しなが	南河内郡・由来ははっきりしませんが、古代には「科長」とも記され河内国石川郡に属する科長郷として存在した。地域には敏達天皇・推古天皇・聖徳太子の磯長墓など、多くの皇族の墓が設けられている。
203	青崩	あおげ	南河内郡・由来は、山が崩れた際に土の色が青色だった事に由来する
204	芹生谷	せりゅうたに	南河内郡・由来ははっきりしませんが、丘陵地に位置し、谷を挟んで南北に広がる地形が「芹生谷」の地名に関連していると思われる。
205	二河原邊	にがらべ	南河内郡・由来は、二つの河原から付いたと思われる地名。
206	吉年	よどし	南河内郡・由来については不明。



NO	地名	読み方	由来
1	青木	おおぎ	神戸市・由来は、かつてこの地域に存在した「青木漁業組合」に由来する可能性が高いと思われる。
2	敏馬	みぬめ	神戸市・由来は、敏馬神社に祀られている「ミヌメ神」に由来する 古くは、港として栄え、万葉集にも多くの歌が詠まれる景勝地。
3	長楽町	ながらちょう	神戸市・由来については不明。
4	行幸町	みゆきちょう	神戸市・由来は、天皇や上皇など貴人の外出を意味する「行幸（ぎょうこう）や「御幸（ごこう、みゆき）」に由来する。 特に、過去に天皇や法皇がこの地を訪れた事が地名の起源となったと思われる。
5	宅原	えいばら	神戸市・由来は、長尾川流域に成立した荘園「宅原荘」（えばらのしょう）に由来する。
6	淡河	おうご	神戸市・由来には複数あり、大河説では、古い文献に「大河」と記されていた地名が、時代を経て「淡河」に転訛した説と、「泡河湖」説では、かつて「泡河湖」という湖だったという伝承があり、この湖に由来したという説もある。
7	小河	おうご	神戸市・由来については不明。
8	小部	おうぶ	神戸市・由来は、かつて「尾部（おぶ）」と呼ばれていた地域が転じて「小部」になったという説がある。「尾部」は、小部峠や尾通りにあたる集落を指している。
9	大沢	おおぞう	神戸市・由来には複数あり、主なものは、かつてこの地域に大きな沢が存在した事に由来するものと、山地の焼畑地名であるという説もある。
10	唐櫃	からと	神戸市・由来は、神功皇后が朝鮮半島での戦いから帰還した際、武器や衣服、そして雌雄二羽の黄金の鶏を石の唐櫃（カラヒツ）に納めて埋めた事が地名の由来という。この唐櫃が埋められたとされる場所には、後に石の祠が祀られ「布土（ぬのと）の森」と呼ばれている。
11	神影	みかげ	神戸市・地名は、六甲山と三田盆地の間に広がる丘陵地帯に位置する地滑り地域で、昭和40年に活動が確認され、昭和41年には地滑り防止区域に指定された。由来については不明。
12	熊内町	くもちちょう	神戸市・由来は複数あるがはっきりしない。神内説では、元々、北の砂山に祀られていた生田神社の神域領内、すなわち「神内（くまうち）」だったという説と、隈内説では、山の奥まった隠れた場所、つまり「隈内（くまうち）」だったという説がある。
13	再度筋町	ふたたび	神戸市・由来は、明治時代に作られた神戸山手の南北道路の

		すじちょう	うち、再度山への登口であった西から2番目の筋（道）に由来する。
14	五百蔵	いおろい	神戸市・由来は、江戸時代中期の正徳3年（1713年）に美囊郡吉田村に住んでいた「五百蔵孫六勝成（いおろいまごろくかつなり）」が、明石郡藩主の松平直明に雄岡山（おごやま）北側の新田開発を願い出て、この開発によって出来た集落が、開発者の名前から「五百蔵」と呼ばれる名前に由来する。
15	木見	こうみ	神戸市・由来には複数あり、主なものは、法道仙人が桜の霊木を見つけた場所である事から「木見」と名付けた説と、もう一つは、「コ」が狭い場所、「ミ」が川を意味し、狭い谷間の川沿いの集落を表すという地理的特徴に由来する説がある。
16	潤和	じゅんな	神戸市・由来ははっきりしませんが、近くには前方後円墳や群集墳がある「シンド山」という地名があり、「新しく御堂が建てられた山」や「新しく開拓された山」を意味する可能性がある。
17	勝成	よしなり	神戸市・由来については不明。
18	英賀	あが	姫路市・由来は、「播磨国風土記」に記されている阿賀比古（あがひこ）と阿賀比売（あがひめ）の二柱の神に由来する。
19	英賀保	あがほ	姫路市・由来は、「阿賀」に同じ。
20	苜野	あぞの	姫路市・由来は、「アザミの野」が由来という。
21	阿成	あなせ	姫路市・由来は、8世紀の文書に登場する「安師里（あなしのさと）」や10世紀の「穴无郷（あなしのごう）」南北朝から室町時代の「穴無郷（あなしのごう）」が起源と思われる。これらの地名は、当地に存在した倭穴無神の神戸に由来するとされており、江戸時代になって「阿成」という表記になった。
22	網干	あぼし	姫路市・由来は、魚吹八幡神社の放生会（ほうじょうえ）の際に、氏子の漁師が殺生せず網を干してお参りした事に由来する。
Yuraiha 23	伊伝居	いでい	姫路市・由来は、田に水が沸くことから「井出村」と呼ばれ、明治地代に「伊伝居村」へと変わった事に由来する。また、村人が定住する事を願って「人が居つくように」との意味を込めて「伊伝居」に改名されたという説もある。
24	春 春峠	うすづく	姫路市・由来ははっきりしませんが、姫路市安富町春から夢前町野畑へ通ずる所に春峠（うすづく）がある。
25	奥垣内	おくがいち	姫路市・由来は、「元々近畿地方の特有の言い回しで、垣根に囲まれた武家屋敷の意味で、「奥」や「中」などの表現が

			ある。
26	国府寺町	こうでらまち	姫路市・由来は、平安時代に播磨国の国府が置かれた「志深庄（しじみしょう）」に「薬師寺」という寺があり、これが「国府寺」と呼ばれた事に由来
27	神谷	こだに	姫路市・由来は、元神屋村の内で、江戸期は姫路町下の1町の武家地。神谷北浦、神谷南浦、西神屋町を合わせて神谷町と称した。
28	神種	このくさ	姫路市・由来は、「高草村」が転じて「神種村（このくさむら）」になったという。
29	河間町	こばさまちよう	姫路市・由来は、かつて船場川が二股に分流し、その川に挟まれた土地であった事に由来する。この「川狭間（かわはざま）」が転じて「こばさま」になったという。
30	佐良和	さろお	姫路市・由来は、「さろ」は断崖の立岩、崖地、突き出し部を指しており、「お」は尾根で、その地を開墾して集落が発達したという意味。
31	飾磨	しかま	姫路市・由来は、播磨国風土記にも出てくるほど古い地名で、「鹿がいて啼いた」という由来という。
32	飾西	しきさい	姫路市・由来は、古代の飾磨郡が東西に分割されて成立した「飾西郡（しきさいぐん）」に由来する。飾西は「しままにし」が転じて「しきさい」と読まれるようになったという。
33	実法寺	じほうじ	姫路市・由来は、かつて存在した「実法寺」という寺院に由来する
34	菅生澗	すごうだに	姫路市・由来は、「菅生郷」という古い地名に由来し、中世には「菅生庄」と呼ばれていた。この地域は菅生川を挟んで位置し、慶長国絵図には「谷村」と記され、「菅生谷村」や「澗村（たにおら）」とも呼ばれていた。
35	男鹿島	たながしま	姫路市・由来は、応神天皇の時代（西暦270年頃）に雄鹿が海を泳いで姫路から現在の男鹿島付近に渡って来たという伝承に由来。対岸の姫路市には「妻鹿（まが）」という地名があり、この雄鹿と雌鹿の物語に関連しているという。
36	苫編	とまみ	姫路市・由来は、かつて飾西郡に属し、町坪村の西に位置していた 天正3年（1575年）の記録には「苫編村百家許り、山の下の居構脇田氏」とあり、苫編構居の領主は三木氏の家臣である服田斎であったという。
37	仁豊野	にぶの	姫路市・由来は、「ニブ」が朱色の砂土を指す「丹生（にふ）」に由来する説と、皇族の養育を司る「壬生部（みぶべ）」が転じたという説がある。
38	南畝町	のうねんちよう	姫路市・由来は、古くは「長畝（ながうね）」と記され「播磨国風土記」に登場する長畝川に由来し、その南部に位置す

			る南長畝（みなみながうね）が転じて「のうねん」になったと思われる。
39	土師	はせ	姫路市・由来は、古代の土師氏（はじうじ）や、埴輪・土器制作に携わった技術者集団「土師部（はじべ）」に由来すると思われる。
40	坊勢	ぼうぜ	姫路市・由来には複数あり、高僧・覚円に由来する説では、883年（元慶7年）に比叡山西塔実相院の高僧である覚円が学論に敗れてこの島に流された。その後、覚円を慕って比叡山の若い僧が大勢この島に移り住んだ事から「坊勢」という島名になったという説と 水軍の首領に由来説では、百済の王子の子孫で「坊施法師」と名乗る水軍の首領にちなんで名付けられた説もある。
41	神子岡前	みこおかまえ	姫路市・由来は、播磨国風土記「伊和の里」にある14の地名起源 に記された「甕丘（みかおか）」に由来する。これは「甕（みか）が落ちたところ」という意味。
42	皆河	みなご	姫路市・由来については不明。
43	妻鹿	めが	姫路市・由来は、仁徳天皇が狩りをされた時、雌雄の鹿が逃げ延び二か所に住み着き、雄鹿が住み着いた処を雄鹿島（たんがじま）、雌鹿が住んだ処を妻鹿（まが）といい、海中の州（す）を行き来したという説がある。
44	八家	やか	姫路市・由来は、この地域に家が八軒あった事に由来する。
45	丁	よろ	姫路市・由来は複数あり、主な本は「風土記」に記されている「与富等（ゆふど）」が転じたという説と、後醍醐天皇の播磨国行幸の際に赤松家が人夫を選出した事に由来するという説、また古代の土木工事に従事した人夫「よほろ・よぼろ」に由来するという説。
46	夢前	ゆめさき	姫路市・由来は、北から南に還流する「夢前川」に由来するかつて千年以上前に鹿谷・置塩・菅野の三村が合併して「夢前村」となったという。全国で唯一「夢」の付く市町村名であったという
47	食満	けま	尼崎市・由来は、農作物が豊かに採れる土地であった事に由来する
48	昆陽	こや	尼崎市・由来は、元々伊丹市に属する「昆陽」という広大な地域に由来し、中臣氏が祖先の天児屋命（あまのこたねのみこと）の名をとって「児屋」と名付けられた事は始まりといわれる。その後、行基が建てた寺が「児屋寺」と呼ばれ、佳字を選んで「昆陽寺」となったため、地名も「昆陽」に改めたという。
49	大物	だいもつ	尼崎市・由来は、平安時代に港町として栄え、西日本各地から集められた巨材（大きな材木）の集散地であった事に由来

			する。
50	道意	どい・どうい	尼崎市・由来は、江戸時代の新田開発者である「道意」という人物に由来する。「道意」は、武庫川や猪名川の土砂堆積によって出来た平野で盛んに行われた新田開発に携わった人物の一人です。
51	若王寺	なこうじ	尼崎市・由来は、かつてこの地域に存在した「若王寺」という寺院に由来する。
52	和阪	かにがさわ	明石市・由来は、古くは蟹板や加爾坂とも書き、弘法大師の蟹伝説に由来するという。弘法大師の蟹伝説とは、昔この地域に巨大な蟹が住んでいて、行き交う人に被害を与えていた。ある日そこを通りかかった弘法大師の法力により蟹を封じ込めたという伝説がある。
53	船上町	ふなげちょう	明石市・由来は、平安時代に摂津住吉神社の封戸であった「舟木村」が由来という。舟木村は、造船を司る舟木連（ふなきむらじ）の居住地であったという。
54	柏堂	かやんどう	西宮市・由来については不明。
55	神呪町	かんのうちょう	西宮市・由来は、中世に甲山の麓にあった神呪寺（かんのうじ）が一時的に移設されていた事に由来する。「神呪」は「神の呪い」ではなく「神様が与えてくれるありがたい呪文」や「仏の真の言葉（真言）」を意味するという。
56	甑岩	こしきいわ	西宮市・由来は、越木岩神社のご神体である巨大な花崗岩（こしきいわ）に由来する。この岩は、高さ約10メートル、基部の周囲約30メートルの巨岩で、数個に割れて積み重なったような形状で酒米を蒸す「甑（せいろ）」に似ていることから名付けられた。
57	夙川	しゅくがわ	西宮市・由来は諸説あり、「宿場を意味する「宿（しゅく）」が転訛した説が有力で、他に「野見宿禰（のみのしゅくね）説では、垂仁天皇の時代に殉死の習慣を埴輪に改める事を進言した「野見宿禰」に由来する説もある。
58	高座町	たかくらちょう	西宮市・由来は、「高」は高貴な場所「座」は座る場所を意味し、神々や豪族が鎮座するにふさわしい場所という由来。
59	津門	つと	西宮市・由来は、「津（港）」と「門（出入口）」を合わせた「港への出入口」を意味する。西宮が古くから港町として栄えていた事に由来する。
60	甲陽園 目神山町	こうようえん めがみやま ちょう	西宮市・由来は、二つの地名出成り立つ氏名で、甲陽園は甲山の南部に位置する事に由来し、目神山は古くから信仰の対象であった「甲山の遥拝所」のような丘陵であった事に由来する。
61	安乎町	あいがちょう	洲本市・由来は、明治22年（1889年）4月1日に平安

			村・平安浦・豊秋村の区域で発足した地域で、昭和30年（1955年）3月31日に洲本市に編入し、安乎村は廃止された。
62	鮎原	あいはら	洲本市・明治22年に誕生した村で、由来については不明。
63	炬口	たけのくち	洲本市・由来は、炬口港へ出入りする船の夜間の目印として「たいまつ」を焚いた事に由来する。
64	土生河	はぶかわ	洲本市・由来についてははっきりしませんが、「土生」という地名は、元々「埴生（はにゅう）」で、「埴（はに）は土の事。「生（ふ）」はあるところを指す。
65	公光町	きんみつちょう	芦屋市・由来は、能の演目「雲林院（うんりんいん）」に登場する人物「公光」に由来する。この地域は、平安時代の歌人である在原業平ゆかりの地とされており、業平の霊が舞を舞う「雲林院」の影響を受けて地名が付いたという。
66	伊丹	いたみ	伊丹市・由来には諸説あり、主なものは中世にこの地を治めた武士団「伊丹氏」の名が土地に刻み込まれたという説と、「系海転訛説」では、細く入り組んだ入江の奥にある土地を意味する「系海」が転訛した説、「板上（いたかみ）転訛説」では、猪名川に架けられた板の橋に由来する説、地形由来説では、川沿いの崩れやすい場所を意味する「イタ（崩壊地形）・ミ（接尾語）」や、段丘の上の意味から来ているという説もある。
67	鋳物師	いもじ	伊丹市・由来は、かつて鋳物師（鋳物を造る職人）の作業場が多く存在し「いもじ千軒」呼ばれていた事に由来する。
68	御願塚	ごがづか	伊丹市・由来は、行基が仏道弘法の願いを立てた古跡である事、また「五ヶ塚」と呼ばれる古墳群が存在した事に由来する。
69	昆陽池	こやいけ	伊丹市・由来は、奈良時代の僧である行基が造営したとされる「昆陽池」に由来する。「昆陽」の由来は「48」番に記載。
70	端ヶ池	ずがいけ	伊丹市・由来ははっきりしませんが、「主が池」や「ずいが池」と呼ばれていた事が関連していると思われる。元禄6年（1693年）に作成された絵図面には、池の名が記載されている。
71	千僧	せんぞ	伊丹市・由来には諸説あり、主なものは、奈良時代の僧である行基が、昆陽池などの築造工事の犠牲者を供養するために「千僧供養」を行った事に由来する説がある。
72	相生	あいおい	相生市・由来は、仲良く並んで生長する」という意味や「共に生きる」と「端祥的」な意味合いが込められているというもの。
73	上石	あげし	豊岡市・由来については不明。

74	出石	いずし	豊岡市・由来は、新羅の王子である天日槍（あめのひぼこ）が日本に渡来し、この地を開拓した際に持っていた宝物「出石小刀（いじしこがたな）」に由来すると伝えられる。
75	稲葉	いなんば	豊岡市・由来は、「稲葉」という地名は稲作に関連するもので、稲の葉、刈り取った稲を積み上げる場所、または稲田を意味する平坦地を指す「稲庭」に由来する。これは、稲作が盛んな地域に多く見られる地名。
76	上山	うやま	豊岡市・「上山」の由来については全国的に様々な由来があり、地形や氏族、神説などがある。
77	大篠岡	おおしのか	豊岡市・由来ははっきりしませんが、かつて柳が生い茂っていた土地に由来すると思われる。
78	大磯	おおぞ	豊岡市・由来についてははっきりしませんが、「磯」という地名は海辺だけでなく、山中の岩場や巨石に由来する場合もある。それは 巨石が「磯」の本家であるという考え方があからずかです。
79	鬼神谷	おじんだに	豊岡市・由来は、須恵器（すえき）の生産地であった事に由来する
80	川南谷	かなんだに	豊岡市・由来は、町の中心を流れる平田川や北部の名貫川に関連しており、特に名貫川の南に位置する事に由来する。
81	神美台	かみよしだい	豊岡市・由来は、旧地名である神戸庄の「神」と安美郷の「美」に由来する。
82	加陽	かや	豊岡市・由来は、古代の豪族である蚊屋（萱・加屋・神谷など）臣の娘が皇子を生み、その皇子が「蚊屋皇子」と命名された事に由来するという説がある。また、備中国賀陽郡の子孫である加夜国造の子孫である加陽朝臣の一族が当地に移住したという説もある。
83	木内	きなし	豊岡市・由来については不明ですが、全国的に見ると発祥地名や氏族説などがある。
84	江野	ごうの	豊岡市・由来については不明。
85	五荘	ごのしょう	豊岡市・由来は、荘園時代にこの地域が5つの荘に分けられていた事に由来する。
86	楽々浦	ささうら	豊岡市・由来は、この地の氏神である三嶋神社の祭神に由来する。 古代には「三島」と呼ばれていたが、「佐々字良毘売命」「佐々字良毘古命」が居住した事により「ささうら」と呼ばれるようになったという言い伝えがある。
87	清冷寺	しょうれんじ	豊岡市・由来は、京都市右京区嵯峨にある「清冷寺」の荘園だった事に由来する。
88	田結	たい	豊岡市・由来は、但馬国城崎郡田結郷に由来する。

89	戸牧	とべら	豊岡市・由来ははっきりしませんが、豊岡病院が戸牧地区の丘陵地に移転した事で急速に住宅等の建設が進んだ地域。
90	祢布	によ	豊岡市・由来には諸説あり、アイヌ語の「村」を意味する言葉に由来する説と、古代の但馬国府があった場所に関連する説がある。
91	袴狭	はかざ	豊岡市・由来についてははっきりしませんが、古代奈良時代から平安時代にかけての官衛（役所）や祭祀、生産に関わる重要な遺構や遺物が発見されていて、古代但馬国にとって重要な地域と思われる
92	八社宮	はさみ	豊岡市・由来は、生田神社の末社である「生田裔神八社」（いくたえいしんはっしゃ）に由来する。これらの神社は一宮から八宮まで番号が振られており、それぞれの神社周辺の地域が地名に定着している。
93	土淵	ひじうち	豊岡市・由来は、一般的に水辺の地形に由来する可能性が高い。
94	一日市	ひといち	豊岡市・由来は、かつて定期的に市場が開けていた事に由来する
95	日撫	ひなし	豊岡市・由来は、「火撫村に由来する。「日撫村名寄帳」によると、阿智使主の子孫火撫（ひなで）直が居住の地と伝えられ、火撫直を祀る「日撫神社」（現三坂神社摂社）がある。
96	法花寺	ほっけいじ	豊岡市・由来は、かつて存在した「法華寺」という寺院に由来する
97	虫生	むしゅう	豊岡市・由来は、地域によって異なるが、豊岡市の「虫生」は「虫生神社の祭神である蚕生（虫生）神に由来する説がある。
98	水上	むながい	豊岡市・由来については不明。
99	百合地	ゆるじ	豊岡市・由来については不明ですが、江戸時代からある地名。
100	榎見	よのみ	豊岡市・由来については不明。
101	砂部	いさべ	加古川市・由来ははっきりしませんが、加古川下流域西岸の堆積平野に位置し、かつて洗川の流路に接していた事から、砂地の多い地形に由来すると思われる。
102	尾上	おのえ	加古川市・由来は、加古川河口東岸に地形に由来し、古くから「高砂の尾上」として歌や謡曲に詠まれる景勝地。
103	神吉	かんき	加古川市・由来は、加古川の崖や川岸を指す「ガンギ」という言葉が清音化され「カンキ村」と呼ばれた事に由来する。
104	旱魃田	かんばつだ	加古川市・由来は、日照りによって水が涸れてしまった田んぼを意味する言葉から来ている。これは、この土地がかつて水不足に悩まされた歴史を持つ事を示唆している。

105	薬栗	くすくり	加古川市・由来については不明。
106	国包	くにかね	加古川市・由来には複数あり、主なものは、この地域を開拓した荘園の地主の名に由来する説と、地形に由来説で「クニ」は地域「カネ」は曲がった土地を意味し、加古川の湾曲した地形から名付けられたという説もある。
107	新野辺	しのべ	加古川市・由来は、新田開発された土地に名付けられた地名と思われる。
108	投松	ねじまつ	加古川市・由来は、街道沿いにあったねじれた松の大木に由来する
109	別府	べふ	加古川市・由来は、平安時代末期に国衙領（こくがりょう）などの荘園に付属する特別区域を指す「別符（べっふ）」という土地制度に由来すると思われる。
110	赤穂	あこう	赤穂市・由来には諸説あり、赤い穂のタデ説では、穂が赤くなるタデ（アカマンマ）が多く自生していた事に由来する説と、土地の色が赤い説では土地が水銀鉱床の上を通っており、土地の色が赤い事から「丹保」「丹穂」「丹尾」などと呼ばれ、それが転じて「赤穂」になったという説、地形に由来する説では、「アカ」は高くなった場所「穂」は海に突き出た場所を意味し、赤穂御崎付近の地形に由来する説もある。
111	有年	うね	赤穂市・由来は、畑に作物を植える為の盛り土を意味する「畝（ウネ）」に由来する。
112	唐船柳	からせんうつろ	赤穂市・由来は、日本が唐と交易していた時代に、唐船が赤穂沖で嵐に遭い沈没し、その船に土砂が積もって島となり、現在の小高い山になったという言い伝えに由来する。
113	木生谷	きゅうのたに	赤穂市・由来は、かつて海岸沿いに木が生い茂っていた谷であった事に由来する。中世には僅か3戸の集落でしたが、慶長14年（1609年）の検地では18戸に増加した。江戸時代初期には、薩摩浪士が帰農を志し、折村の7戸と共に山畑を開墾して村を作ったという伝承もある。
114	坂越	さこし	赤穂市・由来には複数あり、地理的由来説では、内陸の千種川から坂を越えて坂越浦に通じる道があった事に由来する説と、歴史説では、聖徳太子の重臣である「秦河勝（はたのかわかつ）」が蘇我入鹿の難を避けてこの地に漂着し、坂越浦に浮かぶ生島に埋葬されたという伝説があり、この歴史的伝承に由来する説がある。
115	周世	すせ	赤穂市・由来は、古代の「周勢郷」や中世の「周世郷」に由来する説と、「洲瀬（すせ）」が転じたとも思われる。
116	鷗和	てんわ	赤穂市・由来は、明治9年（1876年）に真木村と鳥撫村が合併した際、それぞれの頭文字である「真」と「鳥」を合わせ、さらに両村の「和」を願い名付けられた地名。

117	合山町	あやまちょう	西脇市・由来は、平安時代末期に源頼政の家臣である内橋雄源とその弟に源弘が当地を開拓し、合山神社を創建した事に由来する。
118	大垣内	おおがち	西脇市・由来は、「垣内（かいと）」という言葉が「広い垣内」を意味する「大垣内」に変化した可能性が高いと思われる。「垣内」とは、洪水を避ける為の堀の内側を指す言葉。
119	郷瀬町	ごうのせちょう	西脇市・由来ははっきりしませんが、西脇村の北に位置し、村の西境を杉原川が北西から南東に流れる。「江之瀬」とも記されている
120	蒲江	こもえ	西脇市・由来は、蒲が多く自生していた事に由来する。
121	比延町	ひえちょう	西脇市・由来は、中世に存在した荘園の一つである「比延庄」（ひえのしょう）に由来する。
122	伊子志	いそし	宝塚市・由来は、古代氏族の「伊蘇志臣（いそしのおみ）」に由来。
123	小林	おばやし	宝塚市・由来は、古代にここに住んでいた渡来人の林史（はやしのふひと）一族に由来し、「御林（おはやし）」が転じて「小林（おばやし）」になったとされている。
124	蔵人	くらんど	宝塚市・由来は、かつて存在した「武庫郡蔵人村」に由来する。この地域は、古くから渡来系の氏族が居住していたと思われる。
125	香合新田	こうばこしんでん	宝塚市・由来は、江戸時代初期に「香箱山下新田」として検地を受け、新しく開墾された土地である事に由来する。
126	逆瀬川	さかせがわ	宝塚市・由来は、六甲山系から流れる支流が武庫川の増水時に逆流するように見えた事に由来する。
127	雲雀丘	ひばりがおか	宝塚市・由来は、住宅開発を行った阿部元太郎氏が、滝の谷川にある「雲雀の滝（ひばりのたき）」にちなんで名付けられた。
128	売布	めふ	宝塚市・由来は、「売」が米を意味し「布」が織物を指す事に由来する。古くから米作りや布織物が盛んな地域であった事に由来。
129	安福田	あぶた	三木市・由来は、この地を開拓した安福氏と、霜が降りる田に由来する「田霜」（以前は「田下）」という地名に合わせて名付けられた
130	窟屋	いわや	三木市・由来は、「志染の石室（しじみのいわむろ）」という岩穴がある事に由来する、この石室は、約1600年前に皇位継承争いから逃れた二人の王子が隠れ住んだとされる場所という。
131	大沢	おおそ	三木市・由来は、この辺り一帯が江河沢沼であった頃、この内の大いなる津という意味が、いつしか大沢と唱えられるようになった。

132	貸潮	かしお	三木市・由来については不明。
133	楯原	くぬぎはら	三木市・由来は、かつて楯（くぬぎ）の木が茂っていた事に由来する。また、南北朝時代の地頭職である小野盛国がこの地を開拓した事から「貴族が開いた林」という意味も込められている。
134	志染町	しじみちょう	三木市・由来は、履中天皇がこの地で食事をした際に「シジミ貝」が弁当箱に這い上がった事に由来するとされる。
135	這田	ほうだ	三木市・由来は、元々「祝田郷（いわいだごう）と呼ばれていた。これは神社に新米を供える田があった事に由来する。その後「祝田」に改められ、田んぼの世話をする際にはいつくばって作業する事から、現在の「這田」という地名になった。
136	生石	おおしこ	高砂市・由来は、生石神社のご神体である「石の宝殿」が水に浮いているように見える事から「浮石（うきいし）」と呼ばれ、それが転じて「生石（おいし）」となった事に由来する。
137	高砂	たかさご	高砂市・由来は、加古川河口に堆積した砂の状態を「高砂子」（たかいさご）と呼んでいたものが略されて「たかさご」となったという説が有力で、また、室町時代に夫婦和合の象徴として人気を博した能の演目「高砂」の舞台となった事も、地名が広まるきっかけとなった。
138	小戸	おおべ	川西市・由来は、波食で崩落して出来た狭間を指す小門（おと）が地名の由来で、小戸神社が鎮座する丘陵と御善立の丘陵に挟まれた地域を呼称する。
139	畦野	うねの	川西市・由来は、「畦」という漢字が、水田の畔道や田畑の境界を示す言葉である事から、この地域の水田開発に深く結びついた地名と思われる。
140	粟生	あお	小野市・由来は、古くから粟が多く収穫される畑があった事に由来
141	来住町	きしちょう	小野市・由来は、清和源氏多田満仲の後裔がこの地に移り住み「来住氏」を名乗った事に由来する。
142	榊町	さがきちょう	小野市・由来ははっきりしませんが、「榊」は「神」と「木」を合わせた日本で作られた国字であり、神事には欠かせない木です。このような神聖な意味合いを持つ「榊」が地名になっている背景にはその地域の歴史や信仰、特性などが関係していると思われる。
143	福甸	ふくでん	小野市・由来については不明。
144	相総	あいがせ	三田市・由来については不明。
145	乙原	おちばら	三田市・由来は、「乙が森伝説」があり、この近くに「乙が森」という場所があり、大原の里のお通という娘が大蛇とな

			り、若狭の殿様を襲った悲話がある。この大蛇の首が「乙が森」に埋められたとされ、龍王大明神の石碑を建てられている。
146	木器	こうづき	三田市・由来は諸説あり、「木の器（ぼくき）」に關割るとい う説と 古くは「コツキ村」と記されていた事に由来する説がある。
147	尼寺	にんじ	三田市・由来は、花山法皇を慕ってきた女官たちが花山院菩 提寺は 女人禁制で入山を許されず、麓の村に自ら尼僧となり住み着 いた事から付いた事に由来する。
148	母子	もうし	三田市・由来は、古くは「毛子」と呼ばれていたが、江戸時 代頃から現在の「母子」という表記になり、猫間中納言の奥 方とその子の物語「母子草」に由来するとされている。
149	網引町	あびきちょう	加西市・由来は、万願寺と下里川の合流地点に出来た広い水 たまりで、人々が網を引いて川魚を捕っていた事に由来す る。
150	越水町	うてみちょう	加西市・由来は、万願寺川上流左岸の堆積平地に位置する加 西郡地方では、満水時の池の余水吐を「うてみ」と称して 「越水」の字をあてている事に由来する。
151	大柳町	おおなぎちょう	加西市・由来については不明。
152	小印南町	こうなみちよ う	加西市・由来は、享保2年（1717年）田屋村から分村し て成立するが、当地の開発は早くから着手され釜ヶ原・小印 南・小印南新田を合わせて「小印南村」と称するようになった。
153	鎮岩町	とこなべちよ う	加西市・由来は、「播磨国風土記」に記された「大汝命（お おむなちのみこと）と少彦名命（すくなひこのみこと）」の 伝承に由来。 伝承は、大汝命と少彦名命が国づくりをしていた際、少彦名 命が紀伊国へ旅立つこととなり、その際、少彦名命は「元氣 に暮らしている証拠に、熊野の浦から毎日潮水を送りましょ う」と約束した。この潮水が送られてきた場所が、現在の 鎮岩町にある「潮の井」通称「ブツブツさん」とされてい て、今でも水が湧き出ている。
154	満久町	まくちょう	加西市・由来ははっきりしませんが、嶋村の北、中幡丘陵北 東部に位置し「幕」とも書いた。また、慶長国絵図に「まく り村」とも記されている。
155	馬渡谷町	もおたにちよ う	加西市・由来は、「渡し」には舟と馬が使われていた、そこ で馬に乗って川を渡っていた地域が「馬渡」と呼ばれていた 事に由来する
156	両月町	わちちょう	加西市・由来ははっきりしませんが、「月村」と「西月村」 が合併して出来た村と思われる。空と善防池の両方に月が映

			る景観に由来する可能性もある。
157	網掛	あがけ	丹波篠山市・由来は、かつて湿地帯で人々が漁をして網を掛けていた事に由来すると思われる。
158	追入	おいれ	丹波篠山市・由来は、山地の奥まった地形や、修行僧に「笈人（おいびと）」が転じた可能性や、街道の宿駅として繁栄した由來說。
159	古森	こうもり	丹波篠山市・由来については複数あり、「河守（かわもり）」が転訛したという説と、「古宮（ふるみや）」に由来する説がある。
160	遠方	おちかた	丹波篠山市・由来ははっきりしませんが、「遠方」という言葉自体は「遠く離れた場所」や「ずっと向こうの方」という意味の為、と名としてはその地域が中心地から離れた場所にある事に由来すると思われる。
161	不来坂	このさか	丹波篠山市・由来は、「この坂」が訛ったもの、源義経の軍勢が「ひよどりごえ」に向かう途中で、平家が待ち伏せていると思ったのに来なかったので「不来坂」となったなど諸説ある。
162	笹見	ささみ	丹波篠山市・由来は、中世に丹波国日置荘黒岡村の一部であった地域で、この村にあった小山が「聖なる山」と呼ばれた事が起源。
163	後川	しつかわ	丹波篠山市・由来は、武庫川の支流である羽束川の上流に位置し、周囲を山に囲まれた地形から「尻川（しりかわ）」が転訛して「後川」になったという説が由来。
164	塩岡	しょうか	丹波篠山市・由来ははっきりしませんが、塩の流通に関連した地域と思われる。
165	安口	はだかす	丹波篠山市・由来は、オオサンショウウオの古語である「ハジカミイヲ（ハジカミウオ）や、地方での呼び名「ハダカス」に由来する
166	幡路	はだち	丹波篠山市・由来についてははっきりしませんが、地名自体は「正保郷帳に記載されており、田畑の記録があった事から古くから農耕が行われていた地域と思われる。
167	火打岩	ひうちわん	丹波篠山市・由来は、かつて発火する石（火打石）が産出されていた事に由来する。
168	風深	ふうか	丹波篠山市・由来は、かつて篠山川の中流域に位置し、川の氾濫原であり、河流が運んできた土砂が堆積して出来た泥深い土地である事から「泥深い」が転じて「風深」という地名に変化したもの。
169	糯ヶ坪	もちがつぼ	丹波篠山市・由来は、かつて「糯ヶ坪浜」と呼ばれていた場所が、 田松川通船事業の荷物の揚げ降ろし場として利用され、地元

			で「湊」と呼ばれた事に由来する。
170	休場	やすんば	丹波篠山市・由来は、安政年間（1854年～1859年）に下小野原から分村した際に名付けられた地名で、「休場」という意味は旅人が休息する場所であった事が由来という。
171	上箇	あげ	養父市・由来については不明。
172	岩崎	いわさい	養父市・由来は、「村に唯一の神様『山の神』があり、神の御座所を意味する岩境（いわさか）が転じて岩崎（いわさい）になったのではないか」という説がある。
173	鉄屋米地	かなやめいじ	養父市・由来は、米地の中の金物を生産する村という意味。
174	国木	くにぎ	養父市・由来ははっきりしませんが、地名に「木」が使われる場合は、主に自然環境・地形・地域の歴史や信仰と関連している。
175	左近山	さこやま	養父市・由来は、大徳山への登山道が左近山から始まる事、そして左近山に「大徳」という地名が存在する事に由来する。
176	宿南	しゅくなみ	養父市・由来は、鎌倉時代の地頭館跡地や円山川の景観に関連している可能性が考えられる。
178	建屋	たきのや	養父市・由来についてははっきりしませんが、かつて養父郡にあった建屋村（たきのやむら）に由来する。
179	外野	との	養父市・由来については不明。
180	夏梅	なつめ	養父市・由来ははっきりしませんが、植物の「マタタビ」の別名または人名や商品名や、二十四節気の一つでもある。
181	網場	なんば	養父市・由来は、この地に鎮座する和奈美神社は、平安時代の書物にも記載があり格式高い神社です。この神社と網場の地名は関連しており、白鳥を捕獲した場所に由来する。
182	谷間地	はさまじ	養父市・由来は、「谷間（たにま）のような地形に由来する。
183	養父	やぶ	養父市・由来は、非常に古くから使われている地名で、奈良時代には「夜夫郡（やぶぐん）」その後「養父郡」と記されている。この「やぶ」という名称は、川原近くの小木が生い茂る「藪」の景観に由来するという説がある。
184	八鹿	ようか	養父市・由来は、「屋根が連なる岡」を意味する「屋岡（やおか）」に由来するという。この地域は古くから水陸交通の要衝として栄え多くの家屋が立ち並んでいた事が地名の由来となった。
185	若杉	わかす	養父市・由来は、杉の木が生えている場所を指す言葉に由来する。
186	拳田	あぐた	丹波市・由来については不明。
187	朝阪	あさか	丹波市・由来については不明。
188	石生	いそう	丹波市・由来は、奈良時代から平安時代にかけて丹波国に見

			られた「石負郷（いそべごう）」に由来すると思われる。また、鉱石採掘に従事した部民「磯部（いそべ）」が転訛した可能性もある。
189	上垣	うえがい	丹波市・由来については不明。
190	歌道谷	うとうだに	丹波市・由来は、古くは「歌谷村」と記され「ウトウ」と読まれていた。この「ウトウ」という読みが、現在の「歌道谷（うとうだに）」の地名の由来。
191	大名草	おなぎ	丹波市・由来は、丹波市青垣町の北西部に位置する神楽地域を構成する7つの集落の一つ。古くは但馬から京への街道として栄え、天正19年（1591年）の豊臣秀吉の判物にも「大名草村」としてその名が記されている。
192	大稗	おびえ	丹波市・由来ははっきりしませんが、古くからの集落があり、特に屋用時代からの生活の痕跡が見られる地域。
193	柏原	かいばら	丹波市・由来は、「柏（かしわ）」の木が多く生えていた原野、または狭い谷間の原を意味すると思われる。
194	栢野	かやの	丹波市・由来については不明。
195	鹿場	かんば	丹波市・由来は、「鹿場（かんば）」という言葉が、かつてこの地域で「箕（み）」と呼ばれる竹細工が作られていた事に由来する。
196	小新屋	こにや	丹波市・由来については不明。
197	酒梨	さなせ	丹波市・由来は、「丹波志」によると字蚊（か）ジりに蚊を封じ込また塚があり、古くは蚊ナシ村と称していたのを「酒梨」と称したことが由来する。
198	玉巻	たまき	丹波市・由来は、かつて「栗作郷玉巻村」と呼ばれており、応永15年（1408年）に久下氏が当地を拠点とし「玉巻殿」と称していた事に由来する。
199	戸平	とべら	丹波市・由来については不明。
200	七日市	なぬかいち	丹波市・由来は、かつて七の日に市場が開いていた事に由来する。
201	野上野	のこの	丹波市・由来は、この地域が小高い丘になっていて、その上に草が生い茂る野原があった為「上の野」と呼ばれた事に由来する。
202	丹波	たんば	丹波市・由来には諸説あり、主なものは古代米の赤米が風になびく様子が「丹い（赤い）波」のように見えたという説や、「田庭」すなわち広く平らな土地を意味するという説がある。
203	母坪	ほつぼ	丹波市・由来ははっきりしませんが、「穂壺城（ほつぼじょう）」とも呼ばれる「母坪城」の存在が地名に関連していると思われる。
204	三井庄	みのしょう	丹波市・由来は、かつてこの地域に「岩井」「浅井」「今井」

			という三つの古い井戸があった事に由来する。
205	山垣	やまがい	丹波市・由来は、現在の青垣町山垣中央を流れる遠阪川に由来する
206	椋田	いちだ	南あわじ市・由来については不明。
207	榎列	えなみ	南あわじ市・由来は、平安時代中期の辞書「和名抄」に記載された「三原郡榎列（江奈美）郷」に由来する。この地名は、明治維新の王政復古を機に古代の表記に戻された地名。
208	掃守	かもり	南あわじ市・由来は、朝廷の整備・清掃に従事した掃守蓮の部民の居住地に由来すると言われ（淡路島の古代地名）、掃守蓮の遠祖天忍人命を祀る掃守神社がある。
209	倭文	しとり	南あわじ市・由来は、古代に「倭文（しづ）」と呼ばれる織物を織っていた職業集団「倭文部（しとりべ）」に由来する。この織物は、樺や麻などの繊維を赤や青に染め、乱れ模様で織り出したもの
210	鉦	たたら	南あわじ市・由来は、たたら製鉄に由来すると思われる地名。この地域ではかつて鉄器の生産が行われていたと思われる。
211	土生	はぶ	南あわじ市・由来は、元々は埴生（はにゆう）で、「埴（はに）」は土の事で「生（ふ）」は「あるところの意味。土のある処とは、耕すに良い土のある処で、石ころや砂などのない土地の事。
212	沼島	ぬしま	南あわじ市・由来は、「沼」という言葉が「神」を意味する古語に由来するという説がある。また、沼島は日本の国生み神話においてイザナギとイザナミが最初に生み出した「オノコロ島」という伝承の存在する島です。
213	朝来	あさご	朝来市・由来は、古代の但馬国に郡名「朝来（アサコ）」に由来する。「ア（接頭語）・サコ（谷）」または「アサ（崩壊地形）・コ（接尾語）」といった地形を表す言葉が語源と思われる。（マオリ語）
214	一品	いっぽう	朝来市・由来については不明。
215	内海	うつのみ	朝来市・由来についてははっきりしませんが、地形的に湾内の内海の関連した地名と思われる。
216	大垣	おおかい	朝来市・由来は、江戸時代頃から「おおかい」と呼ばれており、洪水を避けるための堀の内側を指す「垣内（かいと）」という言葉が由来という。
217	越田	おった	朝来市・由来は、山陰の山裾に田を耕し、生活の場を形成下農村という意味。
218	口銀谷	くちがなや	朝来市・由来は、生野銀山に由来し、かつて「口銀屋」と表記され「銀」の字が使われていた。この地域は、日本有数の鉱山であった「生野銀山」の鉱山町として発展した・

219	久留引	くるぶき	朝来市・由来は諸説あり、丸山川の氾濫を避けて「久しく留まる事の出来る安住の地」に移住した事に由来する説と、川の蛇行を表す言葉が転訛したという説がある。
220	老波	しわなみ	朝来市・由来については不明。
221	高生田	たこうだ	朝来市・由来ははっきりしませんが、高生田城という山城が存在し、この地名が城郭に関連していると思われる。
222	田路	とうじ	朝来市・由来は、「田路」という姓を持つ一族がこの地に居住し、その名が地名になったと思われる。
223	新井	にい	朝来市・由来は、応永20年(1413年)にこの地で村の共同井戸が掘られ、新しい井戸という意味で「新井村」と名付けられたことに由来する。
224	土田	はんだ	朝来市・由来は、土を採ったあとの埴田(はにた)に由来する。
225	柊木	ひいらぎ	朝来市・由来は、元々「須賀」と呼ばれていた地域に、柊の木が多く生息する「柊木山」があった事に由来する。
226	枚田	ひらた	朝来市・由来については不明。
227	法興寺	ほつこうじ	朝来市・由来は、かつてこの地に「法興寺」という寺院に由来。
228	早田	わさだ	朝来市・由来については不明。
229	土器屋	からきや	淡路市・由来は、弥生時代に土器の製造が行われていた可能性が考えられる。また、淡路島北部では弥生時代で国内最大規模の鉄器生産集落である五斗垣内遺跡が発見されていて、朝鮮半島から運ばれた鉄を加工していた事から、地名と関連があると思われる。
230	塩尾	しお	淡路市・由来は、塩の生産に関連した事に由来する。
231	養浦	ひきのうら	穴栗市・由来は、カエル(養かえる)が多く生息する、あるいは特徴的な入江(浦)だったことに由来する。
232	五十波	いかば	穴栗市・由来は、揖保川の川波が多い事によると思われるが、「播磨国風土記」穴禾郡石作(いしつくり)里の条に伊加麻川が見え、イカマがイカバに転訛したとする説もある。
233	生栖	いぎす	穴栗市・由来については不明。
234	生谷	いぎだに	穴栗市・由来は、「生」を「いぎ」と発音するのは、事の始まりを意味し、蔦沢の谷の始まる地に立地するのが村名の由来という。
235	百千家満	おちやま	穴栗市・由来は、元々「落山(おちやま)」と称されており、山崩れによる大災害後、村の繁栄を願って「百千家満(百も千も家が満ちるように)」に改称されたという。
236	下河野	けごの	穴栗市・由来は、高い山々に囲まれた、それらの山々から流れ出る溪流が集まる千種谷の最下流部に位置する事に由来する。

237	高所	こうぞ	穴粟市・由来ははっきりしませんが、標高の高い場所を指したものと思われる。
238	小茅野	こがいの	穴粟市・由来ははっきりしませんが、古くは「小荊野（こがやの）とも呼ばれていたとされている。
239	穴粟	しそう	穴粟市・由来は、古くは「穴禾（しさわ）郡」と呼ばれていた。その由来は「播磨国風土記」に記された、伊和大神（いわのおおかみ）と新羅の王子「天日槍（アメノヒボコ）」が土地を巡って争う中で大きな鹿に出あった事から「鹿に会う（ししあう）」が転じて「しそう」になったという説がある。
240	須行名	すぎょうめ	穴粟市・由来は、延喜式大社である伊和神社が鎮座している事に由来する。
241	鳥虬	とりがわた	穴粟市・由来は、鳥ヶ虬の「鳥」は、昔、観音様をどちらの村に迎えるか争った際に、鶏の声で決めたという言い伝えに由来する。 「虬（わた）」は、尾根の低く窪んだ場所を表す漢字です。
242	土万	ひじま	穴粟市・由来については不明。
243	筆築	ひちりき	穴粟市・由来は、麓にある筆築神社に由来する。筆築神社は、平安時代に宮中の楽人が洪水で伊和神社へ行けず、この地で雅楽を演奏して遥拝したという伝説から名付けられたという説が由来。
244	七野	ひつの	穴粟市・由来については不明。
245	深河谷	ふかだに	穴粟市・由来についてははっきりしませんが、地形的な背景で着いた地名と思われる。
256	能倉	よくら	穴粟市・由来についてははっきりしませんが、「米倉」を起源とすると思われる。
247	多井田	おいだ	加東市・由来は、「多井畑」の「タイ」が傾斜地を意味し、山間の段々畑に由来すると思われる。
248	栄枝	さかえ	加東市・由来については不明。
249	捨鹿谷	はしかだに	加東市・由良には諸説あり、一つは、昔、神が木の実を分け与えた際にこの村には足りず「間（はした）なるかも」（数が足りない）と言った事に由来するという説と、古代の土師部（はじべ）の集落であった事から、「土師が谷」が転じたという説がある。
250	筋原	あざわら	たつの市・由来は、かつて道路や田畑の畔や野原一面にアザミの花が咲き誇っていた事から「アザミの原っぱ」を意味する「筋原（あざみはら）」が転じて「あぞうばら」になったと言われる。
251	芝田	こげた	たつの市・由来は、「ススタケ」（篤竹）が多く生えていた事に由来

252	善定	ぜんじょ	たつの市・由来についてははっきりしませんが、二つの文字を合わせると「世が安定する」「よく定まった土地」という意味になる。
253	中垣内	なかがいち	たつの市・由来は、囲われた土地の中央付近の集落や田地。
254	萩原	はいばら	たつの市・由来には複数あり、萩の花が咲き乱れていた事に由来する説と、崩崖や開墾地を意味する地形に由来する説がある。
255	二柏野	ふたつがいの	たつの市・由来ははっきりしませんが、「二つの柏の木があった野原」「柏の木が二列に並ぶ野・など、柏の木と野原に由来する地名と思われる。
256	吉島	よしま	たつの市・由来については不明ですが、3世紀後半頃に築造された吉島古墳がある。
257	紫合	ゆうだ	川辺郡・由来は、元々「ゆうだ」という地名があり、そこに「紫色の雲が重なりあう松」にちなんで「紫合」という漢字が当てられたと伝えられる。
258	柏梨田	かしうだ	川辺郡・由来は、平安時代に近衛府に寄進された「栢梨(かしう)郷(栢梨庄)」に比定される「栢梨田(かいうだ)」に由来する。
259	木間生	こもお	川辺郡・由来は、「薦生(こもふ)」が変化したもので、ムシロの原料となる真菰(マコモ)の産地であった事に由来する。
260	安楽田	あらた	多可郡・由来は、「荒田(あらた)」という古くからの地名に由来し かつて田が荒れてしまった事に由来する。
261	岩座神	いさがみ	多可郡・由来は、千ヶ峰が「磐座神(いすわりがみ)山」とも呼ばれ、山岳信仰の対象とされていた事に由来する。この「磐座神」が転訛して「いさがみ」になったという。また、集落の奥にある高さ10m余りの巨岩「塔の石」も、地名の由来になったという説。
262	鳥羽	とりま	多可郡・由来は、かつて三国岳の頂上に鎮座していた青玉神社が現在の鳥羽の地へ遷座した際、「祭場(まつりば)」が「とりば」と訛り、それに「鳥羽」の漢字が当てられたという。その後、さらに訛って「とりま」と呼ばれるようになった。
263	箸荷	はせがい	多可郡・由来については不明。
264	間子	まこう	多可郡・由来については不明。
265	印南	いんなみ	加古郡・由来は、古代播磨国に存在した「印南郡(いんなみぐん)」に由来する。「播磨風土記」に記された「入浪(いなみ)の郡」という地名逸話が起源という。
266	根宇野	みよの	神崎郡・由来は、笠根山山麓の谷間に位置したため、もと山

			根と称していたが、根宇野と山田という地名となった。この地には、「根宇野大師堂」や「根宇野大歳神社」という歴史的な場所がある
267	近平	ちから	神崎郡・由来については不明。
268	鶺鴒	いかるが	揖保郡・由来は、聖徳太子が法隆寺を建立した大和国（現在の奈良県）の斑鳩に由来する。聖徳太子が播磨国揖保郡の土地を拝領し、「鶺鴒荘（いかるがのしょう）と名付けられたという。
269	佐用岡	さよおか	揖保郡・由来ははっきりしませんが、「作用」という地名自体は、奈良時代初期の「播磨国風土記」に「讃容の郡（さよのこおり）」として記されており、古くから存在していたと思われる。
270	大枝	おえだ	赤穂郡・由来は、古代の氏族である大枝（大江）氏に由来する説と、平安遷都に際し、この辺りから木材を供給していた事に由来する説はある。
271	落地	おろち	赤穂郡・由来は、「スサノオミコト」に退治された「ヤマタノオロチ」の魂がこの地に舞い降り、人々を苦しめたという伝説に由来する。
272	金出地	かなじ	赤穂郡・由来ははっきりしませんが、江戸時代の慶長国絵図に「金谷村」と記されている事から、「金に関係した地名」とと思われる。
273	上郡	かみごおり	赤穂郡・由来は、千種川の河川を拓いて出来た村で、元々は上河原と呼ばれていたものが転じた説と、郡を上中下にわけた内の「上」に位置する事に由来する説がある。
274	佐用谷	さよだに	赤穂郡・由来は作用岡とほぼ同じ。
275	神明寺	じみょうじ	赤穂郡・由来は、天照大神や豊受大神の別称である「明神」や、それらの主祭神とする「明神社」に由来する可能性が高いと思われる
276	大垣内	おおがいち	佐用郡・由来は、地域によって違いますが、「垣内（かいと）」という言葉は、「垣根に囲まれた集落」を意味する事に由来する。
277	奥海	おねみ	佐用郡・由来は、作用川の源流地帯に位置する山間部に由来する
278	亀ヶ辻	かめがさこ	佐用郡・由来については不明。
279	佐用	さよ	佐用郡・由来は、奈良時代初期に編纂された「播磨国風土記」に記されている「讃容の郡（さよのこおり）」に由来する。
280	徳久	とくさ	佐用郡・由来は、峠の際にある事に由来し多地名ですが、現在は明治22年の合併により存在しない。
281	上計	あげ	美方郡・由来については不明。

282	池ヶ平	いけがなる	美方郡・由来ははっきりしませんが、「池のそばにある平らな地」あるいは「池のある小さな台地」と言った由来と思われる
283	耀山	かかやま	美方郡・由来ははっきりしませんが、漢字の意味から「光の当たる明るい土地にある山も指揮は斜面のある地域と思われる
284	相岡	けびおか	美方郡・由来には諸説あり、古くは「檀岡と書かれており由来となった。檀（マユミという低木）」が多く自生していたという。また 中世に存在した「相岡城」に由来する説と、集落の地形的な特徴から名付いたという説がある。
285	多子	おいご・たこ	美方郡・由来については不明。
286	越坂	おっさか	美方郡・由来については不明。
287	辺地	へっち	美方郡・由来は、古くは「九九比（くくひ）と呼ばれており、垂仁天皇の時代に鶺鴒（くくい）という霊鳥が捕らえられた事に由来し、その鳥が棲んでいた場所を「九九比（くくひ）と呼んだ事が始まりとされている。その後、この地に木の神である「九九能智神（くくのちのかみ）」を祀る九九比神社が創建された



日本の国宝「姫路城」別名「しらさぎ城」

奈良県



NO	地名	読み方	由来
1	阿字万字町	あぜまめちょう	奈良市・由来には諸説あり、主なものは、元興寺の阿字万院という坊の跡地である事に由来する説と、弘法大師が「阿字万字」の秘符を修めた事に由来する説、また、かつてあぜ道に豆を植えていた事から「畔大豆辻子（あぜまめずし）」とよばれた事が発端という説などがある。
2	油阪地方町	あぶらさか じかちょう	奈良市・由来は、中世には符坂と言われており、春日大社や興福寺に油を納めていた油座の商人が住んでおり、油を修めた後の空き樽を阪で転がしていたという説がある。
3	蘭生町	いうちょう	奈良市・由来は、かつてこの地に大きな池があり、その池が荒廃した後に「蘭草（いぐさ）」が繁茂した事に由来する。
4	荻町	おおぎちょう	奈良市の「荻町」の由来は、はっきりしないが、全国におなじ地名は存在するが、由来はそれぞれ異なる場合が多い。
5	邑地町	おおじちょう	奈良市・由来は、古くは「邑地村（おおじむら）」と記され、多治、大治、隠地、負地、アウチ、アフチ、ヲウチなど様々な表記がされていた。この地名は「大化の改新」の頃から歴史に登場し、春日大社との関係が深かった事が記録されている。
6	押上町	おしあげちょう	奈良市・由来は、中世文書に見られる「押上郷」に由来し、東大寺国分門付近の集落名として続いてきた地名。古くは「国分里・国分郷」とも呼ばれた地域が、押し上がった地形を示すと見られる「押上」の名で呼ばれ、近世以降も町名が継承されている。
7	大平尾町	おびらおちょう	奈良市・由来ははっきりしませんが、「大きく平らな尾根（尾根上の地形）のある場所」を意味する自然地名とみられる説が有力です。
8	肘塚町	かいのづか ちょう	奈良市・由来は、奈良時代の高僧・玄昉（げんぼう）の「肘（かいな）」がこの地に落ちたという伝承に基づき「肘塚（かいなづか→かいのづか）」と呼ばれるようになったという説がある。
9	鵲町	かささぎ ちょう	奈良市・由来は、かつてこの地にあった「南鵲院（なんじゃくいん）」という寺院名に由来する。鵲（かささぎ）という鳥の生息地にちなんだ説もある。
10	杏町	からもちょう	奈良市・由来は、古代の平城京南端にあった「唐門（羅城門）」が転じた「唐門（からもん）」から「からもも」と読むようになり、それが漢字の「杏」と表記されるようになったという説が有力です。
11	元林院町	がんりいん ちょう	奈良市・由来は、興福寺の別院「元林院」がこの地にあったことに由来するとされ、のちに花街としても知られるようになった町名。
12	京終	きょうばて	奈良市・由来は、平城京の南端にあたり「京の果て（都のはずれ）」を意味することから「京終（きょうばて）」と表記されたという。
13	沓掛町	くつかけちょう	奈良市・由来は、「履物の沓を掛けて休む場所（宿場や峠のたもと）」を意味する言葉に「由来すると考えられ、街道筋の休憩地・宿場機能を反映した地名。一般的には「沓を掛ける＝旅人が草鞋（わらじ）を脱ぎ掛けて休む場所」から生じた地名と思われる。

14	神殿町	こどのちょう	奈良市・由来は、古くからこの一帯にあった神社の社殿（神殿）に由来し、「神の社殿のある所」という意味で名付けられた地名。
15	芝突抜町	しばつきぬけちょう	奈良市・由来は、「芝町」と隣接地を結ぶ細い通り（突き抜け道）に由来し、「芝」＋「突き抜け（突抜）」を合わせた町名と思われる。
16	勝南院町	しょうなみちょう	奈良市・由来は、元興寺の一院であった「勝南院」がこの地にあった事に由来し、寺院名から着いた町名。中世には「小南院」などの表記も見られ、奈良町南部の寺院・門前町として発達した地域。
17	神功	じんぐう	奈良市・由来は、仲哀天皇の皇后で応神天皇の母とされる「神功皇后」にちなむ地名で、近くに神功皇后陵（狭城盾列池上陵）など皇后ゆかりの地であることから名付けられたと思われる。
18	杉ヶ町	するがまち	奈良市・由来は、周辺に杉の木が多く自生・植林されていた事から「杉のある町」を意味して名付けられたと思われる。
19	誓多林町	せたりんちょう	奈良市・由来は、推定ですが仏教に由来する語を含むと考えられており「誓い」「多い」「林（はらし・りん）」が結びついた宗教的色彩の濃い地名です。
20	高天町	たかまちちょう	奈良市・由来は、古代の神話に登場する「高天原（たかまがはら）」に由来するとされ「天に近い高い場所」を意味する地名と思われる
21	都祁	つげ	奈良市・由来は、古代にこの地一体にあったとされる「鬪鷄（つげ）国」や「古事記」などに見られる古い地名「ツゲ」に由来すると思われる。古くから大和高原の要地として人が住み、古代国名に直結する歴史性の高い地名です。
22	椿井町	つばいちょう	奈良市・由良氏は、聖徳太子と平群臣神手が戦勝祈願の際に椿の杖を地に突き立てたところ一夜で芽吹き、そこから清水が沸いたという伝承を持つ井戸（椿井井戸）に由来し「椿の井戸（椿井）」から生まれた地名です。
23	内侍原町	なしはらちょう	奈良市・由来は、平安時代以降に宮中で天皇や中宮に仕えた女官「内侍（ナイシ）」と、若草山麓の「原（はら）」の地形と合わせ、「内侍ゆかりの原野」という意味で名付けられたと思われ、興福寺支配下の南部七郷の一つとして中世から知られた地名です。
24	平城山	ならやま	奈良市・由来は、古代の都「平城京」の北側に連なる丘陵地「平城山丘陵」に由来し、「平らな城（都）のある山（丘陵）」を意味する地名とされている。
25	西（東）包永町	にしかねながちょう	奈良市・由来は、鎌倉時代から室町にかけて活躍した手掻派刀工の始祖とされる包永が鍛冶を行っていた事に由来する地名です。
26	二名	にみょう	奈良市・由来は、古くは「二名村」と書かれ、二つの集落からなる事に由来する。「名（みょう・みな）」は古代から中世の田地や集落の単位を指す語で「二名」は二つの名田（集落）を意味する。
27	丹生町	にゅうちょう	奈良市・由来は、水銀の原料となる赤い鉱石（丹（に・あかつち））＝辰砂を産した（丹生（にう・にゅう））という地名系統に属し、水銀産地・水銀信仰に由来する地名です。

28	忍辱山町	にんにくせん ちょう	奈良市・由来は、町内にある真言宗御室派寺院・円城寺の山号「忍辱山（にんにくせん）」に由来し、この仏教的山号がそのまま地名となった。「忍辱」は、仏教用語で「耐え忍ぶ徳」を意味し、奈良市周辺に多い仏教聖地由来の地名群の一つ。
29	疋田町	ひきだちょう	奈良市・由来は、現時点では確実な定説は公表されていませんが、「疋」という古い字を書くことから、人名や氏族名や古い行政単位に由来する可能性が高いと思われる。
30	白毫寺町	びやくごうじ ちょう	奈良市・由来は、町内にある寺院「百毫寺」に由来し、その寺名は仏像の額にある白い毛の螺旋状の標識「白毫（びやくごう）」にちなむという。
31	生琉里町	ふるさとちょう	奈良市・由来は、戦前、宗教団体の天理教が満州に建設した開拓村の名が「生琉里（ふるさと）」であり、戦後帰国した開拓民たちが奈良市周辺に「第二の生琉里」を築いたことが地名の由来。
32	不審ヶ辻子町	ひしがぢし ちょう	奈良市・由来は、「辻占（つじうら）で行方を占ったが、この場所で姿を見失った（不審が辻）」という伝承に由来し、それが転じて「不審ヶ辻子」となったという。
33	大豆山町	まめやまちょう	奈良市・由来は、古くは「眉目山（まみやま）」と書かれていた地名が転じ「まめ」を大豆の「豆」に当てて「大豆山」と表記されるようになったという説がある。町内にある崇徳寺境内にある「眉目塚」との関係も指摘されている。
34	山陵町	みささぎちょう	奈良市・由来は、周辺に天皇陵をはじめとする多くの古墳（山陵＝みささぎ）が集中している事に由来する。
35	三碓	みつがらす	奈良市・由来は、奈良時代にこの地に住んだ小野福麿が三つの唐臼を据えた事から「三ツ碓（みつからうす）」と呼ばれ、それが転じた地名と思われる。また、聖武天皇が鳥狩りの際にこれを見て名付けたという伝承もある。
36	茗荷町	みょうがちょう	奈良市・由来ははっきりしませんが、一般的にはショウガ科植物の「ミョウガ」が多く自生していた湿地や谷地を指す地名と思われる
37	餅飯殿町	もちいどの ちょう	奈良市・由来は、大峰山の大蛇退治に功績のあった町の若者に東大寺の高僧が「餅飯の殿」の称号を与えたという伝承に由来する。
38	鹿野園町	ろくやおん ちょう	奈良市・古くは「ろくやおん」と読まれ、鹿が集う野や園を意味する「鹿野の園（ししのその）」に由来すると思われる。現在は「しかのその」と読みますが、古代から鹿と野に関わる地名が変化したものと思われる。
39	破石町	わりいしちょう	奈良市・由来は、西大寺東塔の心礎を作る際に大きな石を三十余石の酒を掛けて割った「破石（われいし）」と呼ばれる石に由来する。
40	小明町	こうみょう ちょう	生駒市・由来は、中世以来の村名「小名（こみょう・こみょうむら）」に由来し、現在の小明町や桜が丘など一体を指した歴史的地名がそのまま町名として継承されたもの。
41	曾大根	そおね	大和高田市・由来は、古くは「曾根」「曾根」などと書かれた湿地

			帯・堤防状の土地を指す語に、大根作りが盛んだった事が重なって生まれた地名と思われる。
4 2	土庫	どんご	大和高田市・由来は、古くは「土倉」「土庫」などと書かれ、年貢米などを蓄える土蔵・土倉が多く置かれた場所を指したという説が有力という。」
4 3	今国府	いまご	大和高田市・由来は、古代の大和国府（こくふ＝国の役所）があった「国府」地域のうち、後世に新しく開けた一帯を指して「今の国府」＝今国府と呼んだ事に由来する。
4 4	櫟本	いちのもと	天理市・由来は、天狗が住む巨大な櫟（いちい）の木があったという伝承から、その櫟の「根元（もと）」を意味して生まれた地名といわれている。
4 5	嘉幡町	かばたちょう	天理市・由来は、中世以来の村名「嘉幡村」に由来し、「嘉」は「よい・めでたい」「幡」は旗やのぼりを意味する漢字を合わせた地名と思われる。
4 6	萱生町	かようちょう	天理市・由来は、一面に生えていたカヤなどの草本植物を意味する「萱（かや）」と、草木が生い茂る・生え広がる意の「生（お・う）」が結びついた「萱の生い茂る土地」を表す地名と思われる。
4 7	前裁町	せんざいちょう	天理市・由来は、江戸時代にこのあたりで「善哉（ぜんざい）」と呼ばれる甘い汁物を作る茶店があった事にちなむという説が有力です
4 8	杣之内町	そまのうち ちょう	天理市・由来は、古くから山林伐採や用材生産に関わる「杣（そま）」の人々が関わった地域の「内側」にある土地という意味合いから生まれた地名と思われる。近くには「杣之内古墳群」がある。
4 9	苜原町	ちしゃわら ちょう	天理市・由来は、「苜（ちしゃ＝レタスなどの葉物野菜）」＋「原（はら・わら＝原野）」とみて「チシャの生える原野」を意味すると思われるが、明確な由来とは言えない。
5 0	雲梯町	うなてちょう	橿原市・由来は、古代の渡し場や橋に架けられた「雲梯（うなて・うんてい）」という施設名に由来すると思われ、川を渡るための設備や地形に関係した地名と思われる。
5 1	畝傍	うねび	橿原市・由来は、「畝（うね）」が並ぶ様子を表す語に由来し、条里制の整然とした田畑や、畝が連なった地形を指した地名と思われる。古くから大和三山の一つ畝傍山の名として用いられ、周辺一帯の地名にも広がった。
5 2	小房町	おうさちょう	橿原市・由来は、古くは「大夫（おおふさ）」などと書かれた氏族名や人名に由来し、それが転化して「おうさ」となったと思われる。
	小槻町	おうづくちょう	橿原市・由来は、中世の村名「小槻村（おおづくむら・おつく）」に由来し「槻（けやき）」の木な関わる地名が近世以降に町名化したものと思われる。
5 4	戒外町	かいげちょう	橿原市・由来は、古代の都城「藤原京」の外側（外京・外郭）に位置した事から「戒（界）＝境界の外」を意味する地名になった。
5 5	膳夫町	かしわてちょう	膳夫町・由来は、古代・中世に朝廷の食事を司った役職「膳夫（か

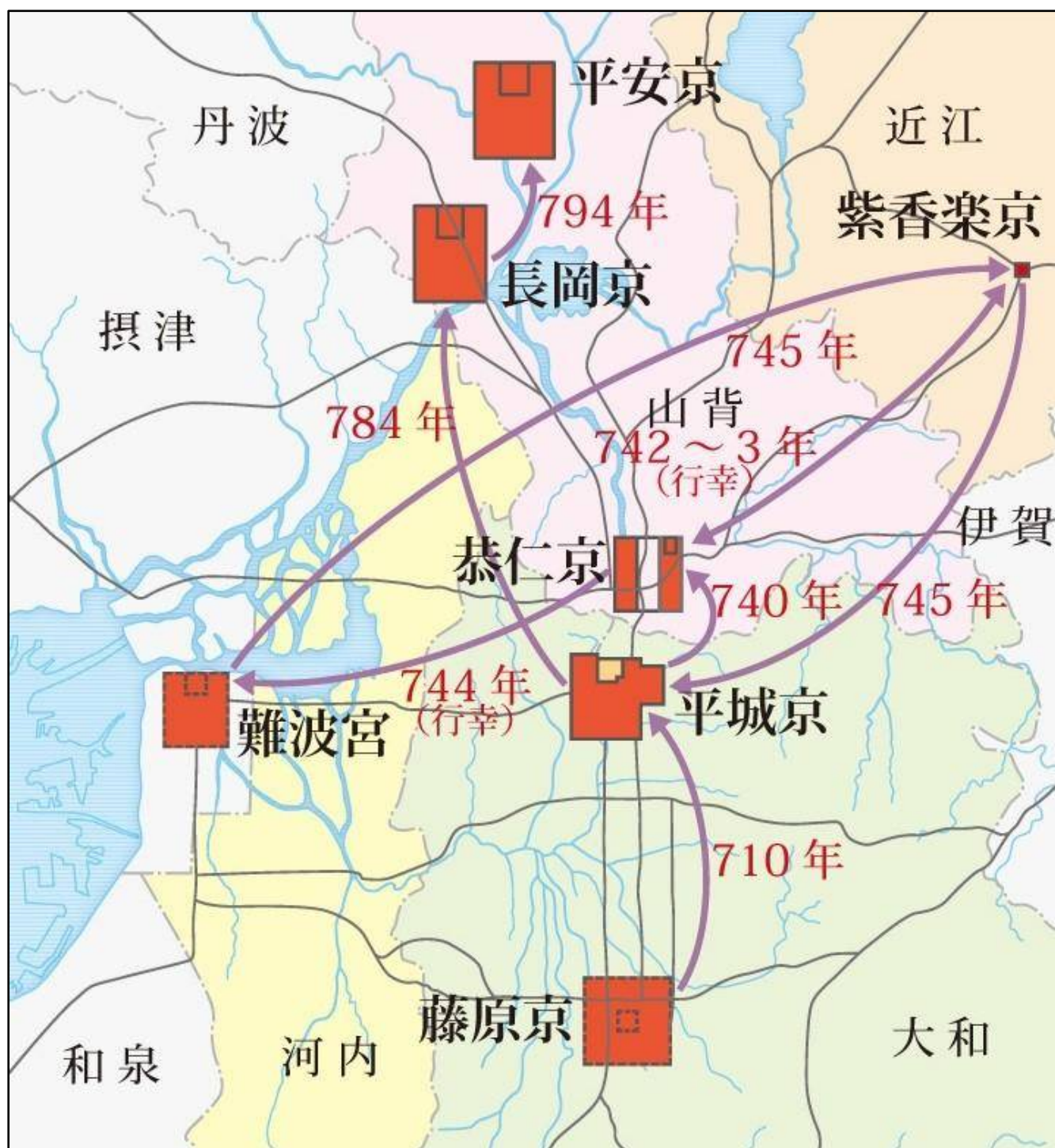
			しわで)」に由来し、宮廷の食膳を担当した人々やその職名にちなむ地名と思われる。
56	地黄町	じおちょう	橿原市・由来は、漢方薬に用いられる薬草「地黄（じおう）」がこの地で盛んに栽培されていた事に由来する。
57	上品寺町	じょんぼうじちょう	橿原市・由来は、古くは「上品寺村」と呼ばれた地域で、地名は当地にあった寺院「上品寺（じょんぼうじ）」に由来する。
58	出垣内町	でがいとちょう	橿原市・由来は、一般的に「垣内（かいと・かきうち）」＝家や集落を囲う垣の内側、「出垣内」＝その外れ・外側に広がった集落や田地を指す地名と解釈される。
59	新口町	にのくちちょう	橿原市・由来は、古くは「にのくち」と読み、条里制に基づく「二ノ口（田地の区画の出入口・端部）」を表す地名が転化したものと思われる。
60	飯高町	ひだかちょう	橿原市・由来は、一般的に「飯（食料・稲）」と「高（高地・高台）」を合わせ、稲作や食料と関わるやや高まりの土地を表す地名と思われる。
61	粟殿	おおどの	桜井市・由来は、アワ（粟）を祀る・納める「殿（どの）」＝粟の神や穀物を祀る祭祀施設・倉庫に由来する地名と思われる。
62	多武峰	とうのみね	桜井市・由来は、山の斜面が「たわむ」ように曲がりくねった地形を表す古語（撓（たわ）む）に由来し、それが転じて「多武（とう）」となったとする説が有力です。大家の改新ゆかりの談山神社を擁する産地で、古くから歴史的に登場する地名です。
63	外山	とび	桜井市・由来は、「日本書紀」見える金色の鷄（とび）伝承の地「鷄邑」に否定される事から「鷄」に由来する説が有力です。「外山」と書いて「とび」と読むのは、古代の伝承に牟杉付いた歴史的地名と思われる。
64	吉隠	よなばり	桜井市・由来は、古くは「吉名張」とも書かれ、万葉集や日本書紀にも見える古い地名で「吉い・良い谷あい（名張）」を意味する地名と思われる。
65	海石榴市	つばいち	桜井市・由来は、三輪山周辺に自生していた椿（つばき）と、古代から立った市場（いち）に」由来し、「椿の市」が転じたものと思われる。「つば」は椿の古い呼び名で、漢字では「海石榴」「海拓榴」と表記される。
66	賀名生	あのう	五條市・由来は、もとは「穴生・穴太・阿那宇」などと書いて「あなう」と呼ばれた地が、南北朝時代に後村上天皇が「願いが叶う」ことを喜んで「加名生（かなう）」と改め、のちに畏れ多いとして「賀名生」と書き換えられ、明治初期に読みを「あのう」に統一されたと伝えられる。
67	生子町	おぶすちょう	五條市・由来は、古くは「生子村」と称された集落で「生（うぶ）」＝生まれ・新しい、「子」＝子孫を意味し、「新しく生まれた人々の村」「子孫繁栄を願う村」という意味合いを持つ地名と思われる。

68	上野町	こうずけちょう	五條市・由来は、中世以来の「上野（こうづけ）」という小字・村名が近世以降も踏襲されているものと思われる。
69	飛養曾	ひよそ	五條市・由来ははっきりしませんが、紀伊山地の山間集落であり、急斜面や水流を連想させる「飛」と、生活を支える豊かな水や土地を連想される「養」、古い地名に多い音写的な「曾」が組み合わさった地名と思われます。
70	五百家	いづか	御所市・由来は、古くは「イホカ（イホケ）」などと表記され、石の多い地形を指す古語「イホ（岩・石）」に由来する地名と思われる。そこから転じて「五百家」の字が当てられたと思われる。
71	今城	いまんじょう	御所市・由来は、外来人が新しく来て居住した事に由来する。
72	御所	ごせ	御所市・由来は諸説あり、市内を流れる葛城川に「五つの瀬」があった事による説や、第5代孝昭天皇の宮「御諸（みもろの）」が転じた説などがあり、「御所＝天皇の仮御所・尊い場所」を意味する地名とされている。
73	蛇穴	さらぎ	御所市・由来は、「蛇がとぐろを巻き穴を作る様子を表す古語「サラケ・サラキ」や「新しく来た人・新しく開いた土地を意味するサラキ（新来）」に由来するとされ、古くからの伝承と野口神社の縁起に結びついた地名です。
74	奉膳	ぶんぜん	御所市・由来は、朝廷や貴人に食事を奉げる役目（奉膳（ぶんぜん））の由来する地名と思われる。古代の職名・役職名が地名化した例で、周辺のその職掌に関わる人々が住んでいた事に反映した地名。
75	忍海	おしみ	葛城市・由来は、古代の「忍海郡（おしみぐん）」に由来し、「海」はかつて「奈良盆地西縁に広がった湖沼や湿地を指す地名要素と思われる。
76	新村	しむら	葛城市・由来は、一般的には「新しく開かれた集落や村」を意味する事に由来する。
77	當麻	たいま	葛城市・由来には複数あり、「常陸国風土記」に見える「日本武尊が征討した地が道が狭く「多ぎたぎしかった」事から「當麻」と呼ばせたとする説と、「たぎたぎしい（険しい・激しい）地形を表す語が地名化した説がある。
78	薑	はじかみ	葛城市・由来は、ショウガ科の植物「ハジカミ（山椒・生姜など辛みのある香味植物）」が多く生えた土地であることから、その名が付いたとする説が有力です。
79	南道穂	みなみみつぼ	葛城市・由来は、「道穂（みつほ）」という古い小字・集落名に南北を付けて区別した地名です。「道穂」の由来は不明。
80	菟田野	うたの	宇陀市・由来は、古くは「日本書紀」推古天皇19年（611年）条に「菟田野（うだの）」と見え、宇陀地方の野（原野）を指す古い地名で、「菟田（うだ）」という地名＋野」が結びついたものと思われる。
81	榛原	はいばら	宇陀市・由来は、「榛（はり）」の木が生い茂る原野を切り開いた土

			地」である事から「榛原（はりはら）」と呼ばれ、それが転じて現在の「はいばら」という読みになった。
82	櫟原	いちはら	生駒郡・由来は、クヌギ（櫟）の木が多く生えていた原野を意味する地名と思われる。古くから「櫟」「原」という一般的な自然地名要素の組み合わせで、周辺の小字名や姓の分布からも、山裾の林と原野が広がる土地柄を反映した名称と思われる。
83	信貴山	しんぎさん	生駒郡・由来は、聖徳太子が物部守屋討伐の際に毘沙門天の加護で戦勝を得た事から、この山を「信ずべき・貴ぶべき山」と名付けたと伝えられる。
84	下垣内	そもがいと	生駒郡・由来は、集落を囲う垣（かき）で区切られた一画＝垣内（かいと・かいち）の内、位置的に下手側にある区画を指す地名。
85	横原	しではら	生駒郡・由来は、「横」というクヌギなどを指す木の名と、平坦な土地を表す「原」が合わさり「クヌギなどの雑木が多い原野」を意味する地名と思われる。
86	福貴	ふき	生駒郡・由来は、一般的に「富み栄える土地」を意味する吉祥語から生まれた地名と思われる。
87	椹原	ひしはら	生駒郡・由来は、一般的には「菱（ひし）」という水草が多く生えた湿地・池の「原（はら）＝原野」に由来する地名です。
88	平群	へぐり	生駒郡・由来は、古くは奈良盆地の北西の対角に位置する事から「辺の国（へのきに）」と呼ばれたものが転化し「平群」になったという説が有力です。
89	五百井	いおい	生駒郡・由来は、「五百（いお）」という数詞と「井（い）」＝井戸・湧き水を表す語が結びつき「多くの井戸や湧水のある場所」を意味する地名と思われる。
90	斑鳩	いかるが	生駒郡・由来は、この地に群れを成していた鳥「イカル（イカル）にちなみ「斑鳩（いかるが）」と呼ばれるようになったという説と、聖徳太子の宮殿「斑鳩宮」の所在地であったことも、地名定着の大きな要因となったという。
91	伴堂	ともんど	磯城郡・由来は、古代の職能集団「伴部（ともべ）」や、それを率いた「伴造（とものみやつこ）」に由来すると思われる。また、彼らに関わる堂（仏堂）があった事から「伴堂」となった説もある。
92	十六面	じゅうろくせん	磯城郡・由来は、条里制に由来する一帯の区画名（十六番目の面＝区画）から生じた地名と思われる。
93	上	かむら	高市郡・由来は、一般的に「奈良（なら＝平らな土地）」の中で相対的に上手・上流側に位置する地域を示す地名と思われる。
94	上居	じょうご	高市郡・由来は、古くは「上居村」と呼ばれ、高市郡の一村として記録されるが、由来ははっきりしませんが「上の方に位置する居住地（集落）」を意味する一般的な地形や居住形態が由来と思われる。
95	檜前	ひのくま	高市郡・由来は、古代の郷名「檜前郷」に由来し、檜（ひのき）の多い丘陵の「檜の前（斜面や麓）」を意味する地名と思われる。

96	上牧	かんまき	北葛城郡・由来は、古代にこの一帯が宮廷の馬を放牧した「上の牧（うへのまき）＝上位の牧場であった事に由来するとされ、下流側の下牧」と対になる名称です。
97	百済	くだら	北葛城郡・由来は、飛鳥時代に百済王族が営んだ宮殿「百済大井宮」や寺院「百済大寺」などが置かれた事に由来し、朝鮮半島の古代国家の百済の名をそのまま地名化したもの。
98	穴闇	なくら	北葛城郡・由来ははっきりしませんが、「穴のように暗い場所」や「窪地で日当たりの悪い土地」を意味する古い言葉に由来する地形説が有力と思われる。
99	新子	あたらし	吉野郡・由来は、「新しく開いた土地や田幡」を意味する古語「新子（にいご・あらこ）」に由来する。開墾地や新田集落を示す地名。
100	佐名伝	さなて	吉野郡・由来は、中世文書に「佐名手郷」「阿陀佐名手」などに見える古い村名で、語源は確定していないが「サナ（狭長・砂・斜面などの地形語）＋「テ（手＝辺り・場所）」とみる説があり、周辺の地形を表した地名と思われる。
101	新野	にいの	吉野郡・由来は、「新しく開いた野（新開地）」を意味する地名と思われる。「新（にい）」＋「野（の）」が合わさった開拓由来の地名。
102	仔邑	よむら	吉野郡・由来は、古代の「邑（むら）」を表す字を含む地名で、集落やムラを意味する古語「を・お」などに由来する可能性が高い。
103	洞川	どろがわ	吉野郡・由来は、山腹の洞（ほら）や洞窟から湧き出す水が集まる川筋の地形を表した地名とされ、「洞（ほら）＋「川」」が転じて「どろがわ」と読まれるようになったと思われる。修験道の霊場・大峯山の登山口として発達した温泉・旅館街の名としても知られる
104	小椽	ことち・ こつが・ こつつじ	吉野郡・由来は、「小さな椽（とち）の木が多く生えていた土地」を意味する地名と思われる。古代はトチノキを指す「椽」に由来する自然地名という。
105	井光	いかり	吉野郡・由来は、「日本書紀」に登場する井戸から現れた国津神「井氷鹿（いひか）」の名に由来するという。井戸から出た神の伝承と、井戸の「井」、光る・輝くイメージが重なった古い信仰起源の地名。
106	東川	うのがわ	吉野郡・由来は、大和川水系の支流である東川（ひがしがわ・あずまがわ）沿いの集落である事から「川の東側（上流側）の集落」を意味する地形由来の地名と思われる。
107	上多古	こうだこ	吉野郡・由来ははっきりしませんが、「多くの谷（多くのたこ＝谷・窪地）」などの地形に由来すると思われそうですが、推測です。
108	入之波	しおのは	吉野郡・由来は、「入之」が「入野」「波」が「端」を意味し、山に入る端の土地を表す事から、この字が当てられたとされる地名。
109	武木	たきぎ	吉野郡・由来は、「武（たけ）」＝険しい・高い地形「木」＝山林・木材を表し、山深く木の多い急峻な土地を示す地名と思われる。
110	人知	ひとち	吉野郡・由来は諸説あり、平らに均した土地を意味する「ならず」に由来する説と、山の斜面を指す「なら（平）」に由来する説、さら

			に渡来人の居住地を古代朝鮮語で国を意味する「ナラ」と呼んだとする説などがある。
111	小	おむら	吉野郡・由来は、低地や窪地などの小さな地形や狭い土地を指す古い方言や地形語が語源とされる説が有力で、多くは田畑や集落の細分名として残っている。
112	木津	こつ	吉野郡・由来は、奈良時代に平城京などの都城建設の為に木材を木津川で運び、この地で陸揚げした「木の津（木材の港）」が由来とされ「木津」と表記されるようになったという。
113	大豆生	まめお	吉野郡・由来は、大豆の栽培と関わる地名と思われ「大豆が良く生育する土地」など豆作と結びつけて名付けられたと思われる。



和歌山県



NO	地名	読み方	由来
1	小豆島	あずしま	和歌山市・由来は、川沿いの中州が洪水などで「小さく崩れ変わる島（崩岸島）のように見えた事から、その地形的特徴を表した地名とされる説がある。
2	有家	ありえ	和歌山市・由来は、中世から近世にかけてこの一帯に「有家」の姓の一族・家筋が住み、その「有家の家（屋敷や集落）を指した呼び名が地名として定着したという説がある。
3	新内	あろち	和歌山市・由来は、地元では「北の新地」という名称で呼ばれており、新地を「新たな地」という事で「新内（あろち）と呼ぶようになったという説がある。
4	有功	いさお	和歌山市・由来は、古くは「有功村」と書かれ、功績・善行を意味する「功（いさお）」に由来し、開発や治水に尽くした人物や一族の功を称えた地名とする説がある。
5	伊太祁曾	いだきそ	和歌山市・由来は、平安時代の「延喜式神名帳」に記載される伊太祁曾神社の社名に由来し、その社名は樹木を日本各地に植えたとされる木の神・五十猛命（いそたけるのみこと）にちなむという。
6	岩橋	いわせ	和歌山市・由来は、もとは「湯橋（ゆはし）」と呼ばれ、現在の温泉付近まで海が入り込んで「瀬」となっていたことから「岩瀬（いわせ）」と呼ばれるようになり、これが「岩橋」の字を当てた地名になったという。
7	井辺	いんべ	和歌山市・由来は、古代の「忌部（いんべ）郷」に由来し、神事や祭祀を司った忌部氏の居住や支配地であった事から「井辺（いんべ）」と呼ばれるようになったと思われる。
8	江南	えな	和歌山市・由来は、紀ノ川河口部の「江」（入り海・河口）臨む南側の地域という地形的特徴から「江の南＝江南」と名付けられたという説がある。
9	大垣内	おおがいと	和歌山市・由来は、「垣内（かきうち・かいと）」と呼ばれる村落や集落を囲った区画を；意味する語に「大」が付いたもので、「大きな垣内」＝中心的・規模の大きい集落」表す地名と思われる。
10	徒町	かちまち かちどまち	和歌山市・由来は、江戸時代に武家屋敷や足軽・徒士（かち）と呼ばれる歩兵層が多く住んだ事から「徒（かち）の町」と呼ばれたことに由来する。
11	梶取	かんどり	和歌山市・由来は、船の舵を取るから付いた地名。また、年貢輸送の運賃の支払いを受ける鎌倉時代の運送業者の「舵取」が地名になったという説もある。
12	吉礼	きれ	和歌山市・由来は、中世文書に見える「名草郡三上院吉礼郷」に由来し、平安時代にはすでに成立していた古い地名。漢字は「吉い礼（良いめぐみ）」など吉祥を表す当て字と考えられる。
13	雑賀崎	さいかざき	和歌山市・由来は、古くは「雑賀の浦」と読ばれ、熊野権現の一つの鳥居があったことに由来する地名と、岬の先端部を表す「崎」が

			合わさったという。万葉集にも詠まれる古い景勝地で、中世には雑賀衆ゆかりの地でもあった。
14	土入	どうにゅう	和歌山市・由来は、「土が入り込んだ土地（砂洲や干拓地など）を意味する語源と思われる。川や海に土砂が堆積してできた低地や新田を示す地名と思われる。
15	永穂	なんご	和歌山市・由来は、古代からの荘園名「永穂郷（ながほごう）」に由来し、紀ノ川北岸の豊かな穀倉地帯を示す地名。
16	西布経丁	にしぬのえちよう	和歌山市・由来は、城下町時代の「永穂町（ぬのえちよう）」という町名が東西に分かれて出た地名で「布をさらして干す川沿いの場所」に由来する。
17	新留丁	にんとめちよう	和歌山市・由来は、城下町時代に既存の町場の外側に新しく開かれた「新しい留まりの場所＝新しい町」から生まれたと思われ、「新しく開発された区域を示す「新」と、区画や町割りを表す「留（とめ）+丁」が組み合わさった地名と思われる。
18	直川	のうがわ	和歌山市・由来は、古代から中世にかけて見られる「直川郷・直川庄・直川村」に由来する。古くは「直河（なおかわ・のうがわ）」と書かれた紀ノ川流域の古い郷名や荘園名が現在も地名として残っている。
19	吐前	はんざき	和歌山市・由来は、元々「埴崎（はにさき）」と書かれた「埴＝粘土質の土」の岬（さき）」を意味する古い地名が変化したものとされる中世には「埴崎」「羽崎」などとも表記され、紀ノ川南岸の岬状の地形を指したと思われる。
20	東布経丁	ひがしぬのえちよう	和歌山市・由来は、西布経丁におなじ。
21	布施屋	ほしや	和歌山市・由来は、古くは「婦世也」「保志也」と書かれ、日本書紀にも見える屯倉名「俯世（布施）」に関係づける説がある。古代の屯倉（朝廷直轄地）に由来する可能性が高い地名。
22	六十谷	むそた	和歌山市・由来は、中世に名草郡の大村として成立した「六十谷村」に由来し、紀ノ川北岸から葛城山脈に至る谷筋一帯を指した歴史的な地名です。
23	且来	あっそ	海南市・由来は、古くからの集落名であり、弥生時代から奈良時代の遺跡が集中する地域です。「且来（あっそ）」も神巧皇后と応神天皇に「関係する地名で、昔は「且来」と書いたという。「且」は日の出を意味する字で、この地に立ち寄った神巧皇后と応神天皇が、「明日の朝また来よう」と約束して都に戻った事に由来する。
24	鱒川	かれがわ	海南市・由来は、魚の鱒（カレイ）のいる川という所もあるかもしれませんが、多くは涸川で、水のない川、干上がったたりする川の事と思われる。
25	扱沢	ぐみざわ	海南市・由来は、「アキツ（アクツ）」という人名・小字名に、谷や沢を表す「沢」が付いたものと思われ、山合いの小さな谷筋の集落を

			示す地形的由来の地名と思われる。
26	重根	しこね	海南市・由来は、「山の根（ふもと）が重なり合う地形」から「重根」と表記されたという説がある。
27	冷水	しみず	海南市・由来は、海岸近くに湧く清く冷たい湧き水（清水）に由来し、「清水浦」「冷水浦」とも書かれた事から、冷たい清水のある浦を意味すると思われる。
28	次ヶ谷	つげだに	海南市・由来は、「山の尾根を越えた次の谷」を意味する地形由来説が有力です。
29	船尾	ふのお	海南市・由来は、中世文書に見える「船尾浦・船尾郷」に由来し、黒江湾・和歌浦湾に面した船着き場・漁村としての性格から「船の尾（先端部）」を意味する地形・港湾地名と思われる。
30	百垣内	ももがいと	海南市・由来は、「垣内（かきうち・かいと）＝家や田畑を囲った区画が「百（多くの・たくさん）が付き、多数の家や区画が集まった場所を示す地名と解釈されるのが有力な説です。
31	応其	おうご	橋本市・由来は、戦国期から安土桃山期の僧・木喰応其（応其上人）の名に由来し、彼が紀ノ川に橋を架けた事による功績から、その名が寺や周辺地名に残ったものという。
32	賢堂	かしこど	橋本市・由来は、高野山への古い参詣道（高野七口）の一つである「賢堂口」のとなった集落で、参詣者を迎える堂（お堂）があった事に由来すると思われる。
33	柏原	かせばら	橋本市・由来は、紀ノ川の河原に柏の木が生えていた河原地形に由来する地名と思われる。河川の流路変化で生じた河原と、そこに繁った樹木の名が結びついた自然地名です。
34	学文路	かむろ	橋本市・由来は、もとは「禿（かむろ）や「香室」と書かれた地名が転じたもので、高野山参詣の宿場や梅の香る土地に由来する。
35	神野々	このの	橋本市・由来は、古代寺院「神野々廃寺」や神仏習合的な信仰と関わる「神の野（神のいる野原）」が語源と考えられる地名とされ、奈良時代からの歴史を背景に持つと思われる。
36	胡麻生	ごもう	橋本市・由来は、古くは「胡麻生（ごまう）」と書き、ゴマの栽培地・ゴマの良く生えた土地を意味する地名と思われ、のちに読み方が「ごもう」に転じた。
37	隅田	すだ	橋本市・由来は、古くは荘園名の「隅田荘」に由来し、紀ノ川北岸一帯を指した地名が現在の隅田町名として残ったものと思われる。
38	谷奥深	たにおぶか	橋本市・由来は、紀ノ川の支流沿いの谷の最奥部に位置する山間集落である事から、「谷の奥深い所」という地形そのものを表した地名と思われる。
39	向副	むかそい	橋本市・由来は、「向添」とも書き、「川向うに添う（そって続く）土地」という意味から生まれた地名と思われる。
40	須谷	すがい	有田市・由来は、「ス（洲・砂洲）」と「谷」が結びついた、川沿いの砂洲状の谷地敬を表す地名と思われる。

4 1	熊野	いや	御坊市・田辺市・由来は、古くから山深いこの地域を「隈（くま＝奥まった所）」と呼んだ事や、熊野川流域一帯の自然崇拜の聖地であった事に由来し、「奥深い聖なる野（の）」の意味する地名。
4 2	財部	たから	御坊市・由来は、奈良時代の「財郷」や平安期の「財部郷」にさかのぼる古い地名で、「財（たから）」＝租税・貢納物などの富を集める地・荘園に由来する地名。
4 3	狼岨山	おおかみだわ さん	田辺市・由来は、「狼（おおかみ）」と山の地形語（だわ・峠状の鞍部）」が結びついた、狼に由来する山名と思われる。熊野一帯に残る狼信仰や、峠名（コヒロウ峠）などの例からも、狼と峠・山を牟杉付けた地名と思われる。
4 4	神島台	こうのしま だい	田辺市・由来は、近くにある「神島（こうのしま）」と呼ばれる小島を見下ろす高台である事から「神島を望む台地」という地形由来の地名と思われる。
4 5	土河屋	ちちごや	田辺市・由来ははっきりしませんが、「土質に特徴のある川沿いに成立した家や集落」といった地名と思われる。
4 6	温川	ぬるみがわ	田辺市・由来は、急流の多い山間でこの一帯だけ川の流が穏やかで、平坦な地形であったことから「努留美川（ぬるみがわ）」＝流れの緩い川を意味する古い呼び名に由来する。
4 7	芳養	はや	田辺市・由来は、「香り高い・よい香りのする土地」を意味する古語「かぐわし」「かんばし」などの同系の語から転じた地名とされ、古くは荘園名「芳養庄」として中世文書にも見える地名。
4 8	伏菟野	ふどの	田辺市・由来は、「伏した兔のいる野」あるいは「ウサギに関わる野原」を意味する地名と思われる。
4 9	兵生	ひょうぜい	田辺市・由来は、「兵（つわもの）」に由来し、山中の警護・軍事と関わるちであった事から「兵の生（お）る所」＝兵生と解釈される説が有力です。
5 0	北郡	ほくそぎ	田辺市・由来は、熊野川支流沿いの小字名で、川沿いの北側一帯を指す地形的呼称が転じたものと思われる。
5 1	真砂	まさご	田辺市・由来は、川や海辺に堆積した細かな砂・砂洲を意味する古語「まなご・まさご」（混じりけのない砂）に由来し、砂の多い地形を反映した地名。
5 2	神子浜	みこのはま	田辺市・由来は、熊野三山などに仕えた「神子（みこ）」と呼ばれる宗教的な役職・人々に関わる地名と思われ、「神に仕える者の浜」程の意味を持つと解釈される説が有力です。
5 3	文里	もんり	田辺市・由来は、中世文里荘（もんりのしょう）という荘園名に由来し「文里浦」などと呼ばれた海辺の集落名が近世以降も残った者とされている。
5 4	田長	たなご	新宮市・由来ははっきりしませんが、「田長」は田んぼ（田）と、長い地形・長く伸びた耕地あるいは（長）を名乗る一族に由来する可能性が高いと思われる。

55	能城山本	のきやまもと	新宮市・由来は、熊野川沿いにあった中世城郭「能城城（のきじょう）」と、その城の建つ山の麓（山本）に広がる集落に由来する。
56	猪垣	いのかけ	紀の川市・由来は、山間部で田畑を荒らすイノシシを防ぐ為に築いた石垣や土塁などの「猪垣（ししがき）」があった事に由来する。
57	麻生津中	おおづなか	紀の川市・由来は、旧「麻生津村」の中心部（中村・中集落）を指す名称であり、「麻生津」という古い村名＋「中（中心部）」を示す字名が合わさったものと思われる。
58	遠方	おおかた	紀の川市・由来は複数あり、多くは「都や中心地から遠い場所」「村はずれ」を意味する古語「遠方（おちかた）」に由来すると思われる
59	勝神	かすかみ	紀の川市・由来は、竜門山の別名「勝神山」及び産土神「吾勝尊（あかつかつひこ）」を祀る信仰に由来する説がある。
60	国主	くにし	紀の川市・由来は、古くは那賀郡国主村と呼ばれ、貴志川の深い淵「国主淵」やそれにまつわる伝承を背景に、中世以来の村名として続いてきた歴史的地名。
61	花野	けや	紀の川市・由来は、古くは「ケヤ」「ケヤノ」などと呼ばれた地名があり、後世に「花野」という表記になったが、確実な由来は不明。
62	重行	しげき	紀の川市・由来は、中世にこの地が属した「池田庄」に由来する古い地名で、「紀伊続風土記」では「志解由幾」と訓じられる中世以来の地名が近世以降も受け継がれたもの。
63	後田	しれだ	紀の川市・由来は、中世文書に「尻江田」とも記された紀ノ川氾濫原の田地を指す呼称が変化したものとして、「川の後ろ側（奥側）の田」あるいは「入り江状の低湿地の田」を意味する地名と思われる
64	杉原	すいばら	紀の川市・由来は、杉の木が多く生えていた「原・平坦地・野原」を意味する自然地名。
65	深田	ふけだ	紀の川市・由来は、「低湿地で水が深くたまる田（深い田）」を意味する地形由来の地名と思われる。
66	赤垣内	あかがいと	岩出市・由来は、「垣内（かきうち・かいと）」と呼ばれる集落地形を指す語に「赤い土・赤土の土地」を意味する「赤」が付いた地名と思われる。
67	上ヶ井	あげい	海草郡・由来は、「井（い）＝井戸・湧水を意味し、その上手側・高い位置にある集落や田地を指した地形的由来の地名と思われる。
68	初生谷	ういだに	海草郡・由来は、中世には「字井谷」と書かれた地名があり、これが転じて現在の「初生谷」という表記になったと思われる。
69	動木	とどろき	海草郡・由来は、江戸時代から見られる古い地名で、現在の名字「動木（とどろき）」の発祥地ともされる。
70	蓑垣内	みのがいと	海草郡・由来ははっきりしませんが、「蓑のような形の斜面や谷を、垣で囲った「(区画した)内側の土地」を意味する開拓地名。
71	笠田	かせだ	伊都郡・由来は、元々「総田（かせだ）」などと書かれた地名があり、その枝郷としての「下笠田」にちなみ、江戸時代に藩主・松平定綱が「笠田」と名付けたと言われる。

72	中飯降	なかいぶり	伊都郡・由来は、古代の郷名「指理（いぶり）郷」に由来し、その「中（なか）」に位置する飯降地区を示す地名と思われる。
73	平沼田	ひらんた	伊都郡・由来は、「平らな沼地（湿地）」と「田」に由来し、川沿いの低湿地を開墾した水田地帯を表す地名と思われる。中世文書には「平奴田」などと表記され、高野山領の小河内郷に属した村として記録されている。
74	河根	かね	伊都郡・由来は、紀ノ川の川岸・川の縁（川の根元部分）に開けた集落であることから「川の根」から付いた地名と思われる。
75	唐尾	かる	有田郡・由来は、古くは「韓尾」「唐尾」とも書かれ、朝鮮半島（新羅など）との交流や渡来人との関わりを示す地名と思われる。
76	河瀬	ごのせ	有田郡・由来は、「鹿瀬谷から流れる川の瀬（浅瀬）」に由来する地名とされ、川の流が浅くなった場所を意味する自然地形由来の地名
77	粟生	あお	有田郡・由来は、江戸時代に湯口村と北尾村をまとめた名主「粟生弥七郎」の名に由来する人名起源の地名と思われる。
78	奥	おき	有田郡・由来は、山地の内側・谷の奥まった場所を指す場所を指す古い日本語「オク」に由来し、「山の奥・里の奥にある集落」という意味で付けられた地名と思われる。
79	垣倉	かいぐら	有田郡・由来は、「垣（かき）」で囲った倉や屋敷があった事に由来する地名と思われる。
78	修理川	するがわ	有田郡・由来については不明ですが、古くは「修理川村」と呼ばれた山間の集落名が現在の大字名・集落名として継承されている。
79	遠井	とい	有田郡・由来は、「山里の奥まった場所にある井戸・水場」を意味する「遠い井（とおい・とい）」が語源と思われる。一般的に「山間の奥の集落」を表す地名。
80	伏羊	ぶよう	有田郡・由来については不明。
81	蜚取島	あまとりじま	日高郡・由来は、海女・海士などの海の民を意味する古語「蜚（あま）と「取る」を合わせ「海人が漁をする島」「海人を保護・統率した場所」という意味合いを持つと思われる地名。
82	高家	たいえ	日高郡・由来は、一般的に「周囲より土地が高い場所にある集落」であることから名付けられたと思われ、「高い土地の家（集落）」を意味する地形由来の地名。
83	衣奈	えな	日高郡・由来は、古くは「衣奈浦」「衣奈庄」と呼ばれた湾岸集落で沈降湾である衣奈湾に面した地形に由来する地名。中世には「石清水八幡宮」の荘園「衣奈園」「衣奈庄」として史料に現れ、衣奈八幡神社の門前集落として発達した。
84	吹井	ふけい	日高郡・由来は、古くは歌枕として知られた「吹井（ふけい）の浦」「吹飯（ふけい）の浦」に由来し、海辺で風が吹き寄せ、「波打ち寄せる様子を表した古い地名が現在の「吹井」に受け継がれたものと思われる。
85	印南	いなみ	日高郡・由来は、古くは「稲見」「稲海」など稲作や海に関わる表記

			が転じたと思われ、「いなみ」という古い地名音がのちに「印南」の字に充てられたと思われる。
86	上洞	かぼら	日高郡・由来は、洞（ほら）＝谷・洞窟状地形に対する「上手側の集落」を意味する地形由来の地名と思われる。
87	田ノ垣内	たのかいと	日高郡・由来は、一般的に田んぼを区切る土手や垣状の地形（田の境界）を表す地形語に由来する。多くは小字レベルの古い地名で、田の広がる低地の縁や段差部を指す例が多い。
88	横川	ほくそがわ	日高郡・由来は、「昔この土地に山火事ありて燃え広がりしも、大木西にて消火せし」により、木の西の火と書き「ほくそ」と読ませたことに由来する。
89	晩稲	おしね	日高郡・由来は、「晩に実る稲（おそいね）」を意味する漢字表記を当てたもので、梅や稲作に適した温暖な土地柄を背景にした地名と思われる。
90	勘解由寺	かんげゆじ	日高郡・由来は、古代官職名「勘解由使（かげゆし）」に関する人名・官職名が寺名や字名になったと思われる。
91	気佐藤	きさと	日高郡・由来ははっきりしませんが、「袈裟佐藤」とも書く。
92	埴田	はねた	日高郡・由来は、古くは「埴（はに＝粘土質の土）」の算出・利用と、水「田」が組み合わせあった「粘土質の田・埴土の田」を意味する地名と思われる。
93	南部	みなべ	日高郡・由来は、古代の郷名「南部郷」や中世荘園名「南部荘」に由来し、日高郡に南端に位置する事から「南の方の地＝南部」と呼ばれた説と「みのべ（海辺）」が転田という説がある。
94	愛川	あたいがわ	日高郡・由来は、旧・美山村域を流れる小河川（愛川）に由来する地名で、川の名がそのまま集落の大字名となったと思われる。
95	伊藤川	いとごがわ	日高郡・由来は、古くは「伊藤川村」として日高郡の村名で、伊藤川という川筋・谷筋に由来する地名と思われ、姓の「伊藤」と川・谷を表す語が結びついた地名。
96	小釜本	こかもと	日高郡・由来ははっきりしませんが、「小さな釜状の地形（谷や窪地）や「釜」の字を含む水場や湧水地名に由来すると思われる。
97	寒川	そうがわ	日高郡・由来は、中世にこの地に置かれた荘園「寒川荘」の名に由来し、その荘園名が地域名として残ったもの。
98	早藤	はいくず	日高郡・由来は、「早」の字を「は（波伊）」「藤」の字をくず（久受）」と読ませる当て字で、「はいづく」という古い地名表記が由来という。
99	早川	ひゅうがわ	日高郡・由来は、一般に「流れの早い川（早い川）」を意味する自然地形に由来する地名と思われる。
100	三百瀬	みよせ	日高郡・由来ははっきりしませんが、川の瀬（急流や浅瀬）が多い場所を数や比喻で表した地名と思われる。
101	牟婁	むろ	西牟婁郡・由来は、もとは田辺湾沿岸一帯の地名で、のちにこの地域に郡家（郡役所）が置かれた事から郡名となった。

102	安居	あご・やすい	西牟婁郡・由来は、村内の祇園社そばにあった大きな湧き井戸（大井戸）の清水に由来し、この井戸の水で田地十八石を潤した事から「安井（やすい）」と呼ばれ、のちに「安居」とも表記されるようになった。
103	安宅	あたぎ	西牟婁郡・由来は、熊野水軍を率いた安宅一族の本拠地となった事から、その一族名や水軍名に由来する地名です。中世には安宅城館が置かれ、周辺一帯の荘園名「安宅荘」としても知られる。
104	嵩屋峠	いわやとおげ	西牟婁郡・由来は、周辺に露出する大きな岩や岩窟状の地形を「岩屋」と呼んだ事に由来し、岩の多い峠道を示す地形由来の地名。
105	庄川	しゃがわ	西牟婁郡・由来は、富田川水系の支流「庄川」に沿って成立した荘川村に由来する。「庄（荘）」＝荘園や集落」と川を合わせた地名。
106	竹垣内	たけがいと	西牟婁郡・由来は、竹で組んだ垣根（竹垣）で囲まれた「内側の土地」や「囲い地」を意味する語から生まれた地名と思われ、周辺の小字「田垣内」（たがいと）などと同様に、垣で区切られた田畑や集落を示す地形や土地利用由来の地名。
107	玉伝	たまで	西牟婁郡・由来ははっきりしませんが、玉のような石や地形や人物名に由来する可能性が考えられる。
108	十九淵	つづらふち	西牟婁郡・由来ははっきりしませんが、多くの淵を持った川の深みや淵を指した地名と思われる。
109	日置	ひき	西牟婁郡・由来は、古くは「辺喜川」「安宅」河」とも呼ばれた日置川の河口の浦「日置浦」に由来し、川と港町の名が現在の地名として残ったもの。
110	朝来	あっそ	西牟婁郡・由来は、古くは、「阿曾」「阿蘇」などと書かれた古代以来の地名が音を保ったまま残ったと思われる。
111	柿垣内	かきがいと	西牟婁郡・由来は、垣の木が多い土地と垣や囲いで区切られた集落内の土地（垣内）を合わせた地名で、柿の栽培地を示す地名。
112	栗垣内	くりがいと	西牟婁郡・由来は、栗の木が多い土地を「垣（かき）」で囲った内側という意味合いから、「栗の木に関わる囲まれた土地を指す地名。
113	周参見	すさみ	西牟婁郡・由来は、「荒れすさぶ海」＝荒ぶる海を意味する言葉が転化したものとされ、熊野灘の荒波に由来する地名。
114	防己	つづら	西牟婁郡・由来ははっきりしませんが、漢方薬の「防己」や「ツヅラフジ類の自生との関連があるのかと思われる。
115	見老津	みろづ	西牟婁郡・由来は、「岬の先端から沖合を見張る・見通す場所を意味する古語に由来する地名説が有力。
116	井鹿	いじし	東牟婁郡・由来は、古くは大居村の枝郷で、寛永18年に別の村となる。村名の意味は、山溪の間に会って猪や鹿が多い事から付いた地名と思われる。
117	狗子ノ川	くじのかわ	東牟婁郡・由来は、「狗子（いぬこ）」という人名や小字名と川が結びついた地名で、犬に関する伝承や犬を飼う人に由来する説が有力。
118	高遠井	こうどい	東牟婁郡・由来は、高い所にある井戸（湧き水や井泉）を意味する

			地形由来の地名です。
119	粉白	このしろ	東牟婁郡・由来は、古くは「粉ノ白村」と書かれ、砂浜や白砂にちなむ「白」と、砂が細かく砕けた様子を表す「粉」が組み合わさった地名と思われる。
120	田垣内	たがいと	東牟婁郡・由来は、一般的に「田んぼに囲まれた内側の土地（田の内側の区画）」を意味する地形由来の地名と思われる。
121	直柱	ひたはしら	東牟婁郡・由来については不明。
122	八尺鏡野	やたがの	東牟婁郡・由来は、那智大社のご神体とされる大鏡（八尺鏡）にちなみ、その鏡を祀る野（野原）や山麓一帯を指す地名になったという説がある。
123	夏山	なっさ	東牟婁郡・由来は不明ですが、大地町の一部として熊野灘沿いに位置する集落名。
124	一雨	いちぶり	東牟婁郡・由来は、「一度の雨で増水するほど急峻な谷や川筋」である事に由来する説が有力です。
125	洞尾	うつお	東牟婁郡・由来は、「洞（ほら）＝洞窟・谷あい」「尾」＝山の尾根や尾根筋とみて、谷状の地形と山の尾根を表した自然地形由来の地名と思われる。
126	蔵土	くろづ	東牟婁郡・由来については不明。
127	南平	なびら	東牟婁郡・由来は、一般的な地名形成から「南側の平坦地（平地）」を意味する地名と思われる。
128	直見	ぬくみのうみ	東牟婁郡・由来は、古くは「ぬくみのへら」という小字名に由来するとされる地名です。
129	真砂	まさご	東牟婁郡・由来は、川や海辺に堆積した細かい砂や砂洲を意味する古語「まなご・まさご」（混じりけのない砂）に由来する地名。
130	瀨峡	どろきょう	東牟婁郡・由来は、「瀨」は「深くて流れの穏やかな渚やよどみ」を意味する古語に由来し、そのような静かな深い流れが続く峡谷景観から「瀨峡」と呼ばれるようになった。
131	出雲	いづも	東牟婁郡・由来は、古代から海上交通を通じて島根県出雲地方との交流があり、その地名が移入・勧請されたという説が有力です。
132	鬮野川	くじのかわ	東牟婁郡・由来は、古くは「籤（くじ）を意味する「鬮」と川沿いの野を合わせた地名で、川沿いの集落を示す名転じたものという。
133	神野川	このかわ	東牟婁郡・由来は、「神野荘（このしょう）」と呼ばれた荘園名・郷名に由来し、「神にゆかりのある野（神の野）」を意味する地名が川名や集落名として残ったものと思われる。
134	野佃	のうなぎ	東牟婁郡・伊由来ははっきりしませんが、字面から「野（開けた土地）＋「佃（か・かかり）」のどと推測される地名。
135	吐生	はぶ	東牟婁郡・由来は、江戸期の地誌「続風土記」が「吐生」は本来「土生」であったという説を伝え、川沿いの性質を表す地名が転化したものと思われる。



制作・編集にあたり、インターネットの「ウィキペディア」及びA Iデータを活用して作成しています。

参考文献 インターネット

制作・編集 上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原の歴史を知る会 会員)

連絡先 090-3545-1113